

奈良県御所市

巨勢山古墳群Ⅳ

— 巨勢山74・75号墳の調査 —

平成14年(2002年)3月

御所市教育委員会

奈良県^{ごせ}御所市

こ せ やま
巨 勢 山 古 墳 群 IV

— 巨勢山74・75号墳の調査 —

平成14年(2002年)3月

御 所 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、御所市教育委員会が調査を実施した、奈良県御所市栗阪字タケノ口に所在する巨勢山74・75号墳の発掘調査報告書である。両墳は土砂採取により崖面に放置され、自然崩壊の危険があったので、平成5年度の国庫・県費補助事業として平成5年(1993年)9月24日から平成6年(1994年)1月6日まで、実働60日間をかけて範囲確認調査を実施した。
2. 現地調査は、御所市教育委員会 技術職員 藤田和尊・木許 守 が共同で担当した。また、当時、調査補助員として富田尚夫(現・愛媛県歴史文化博物館)、永井正浩(現・堺市埋蔵文化財センター)と、井上主税・海部博史(現・普通寺市教育委員会)らが各部所を担当し、作業員として地元有志15名の参加があった。
3. 遺物整理・報告書作成には調査参加者のほか、藤村藤子、尾上昌子、榎原静代、藤井浩子と、相見粹・阪本晋通(奈良大学)、東野茂樹(関西大学)、廣瀬一郎(龍谷大学)があつた。
4. 本書の執筆分担は、目次に記すとおりであるほか、土器観察表は木許が作成した。編集は木許・藤田が行った。なお、奥田尚・永井正浩両氏には玉稿を賜りました。記して深謝致します。
5. 製図は、土器を藤村藤子が、その他は各執筆者が主担したが、74号墳の主体部は相見、74号墳の鉄器は東野、75号墳の石室は阪本、奥田氏執筆分に関わる挿図は広瀬による製図である。また遺構の撮影は藤田・木許が、遺物の撮影は相見が行った。
6. 文中の遺物番号は挿図、図版および土器観察表の番号とも統一した。挿図における出土遺物実測図の縮尺は、土器については $\frac{1}{2}$ 、鉄製品・銀製品については $\frac{1}{4}$ または $\frac{1}{8}$ に統一した。
7. 参照・引用文献は、「第1章第2節 歴史的環境」のうち、各遺跡にかかわる文献について、番号を付してその節の末尾に掲げ、その他の本文全体を通じては、「第5章 まとめ」末尾に一括した。また、「第6章 考察」については、各節末に記した。
8. 古墳の墳丘土層図においては、太線以下は墳丘の残存部分を示し、地山やその他必要な情報はスクリーントーンにより表現した。
9. 調査ならびに本書作成にあたっては、下記の方々から貴重な御指導・御教示や多大なる御配慮・御協力を賜りました。記して深謝します(五十音順、敬称略)。

網干善教、尼子奈美枝、石野博信、泉森 峻、植田隆司、岡崎晋明、奥田 尚、河上邦彦、田中一廣、千賀 久、續伸一郎、服部聡志、土生田純之、古瀬清秀、松井 章、松尾充昌、宮代栄一、宮原晋一、森岡秀人、米田文孝

本文目次

例言

第1章 位置と環境

- 第1節 地理的環境 (相見) 1
- 第2節 歴史的環境 (相見) 1
- 第3節 巨勢山古墳群の既往の調査と現状 (藤田) 9

第2章 巨勢山74号墳の調査

- 第1節 位置と墳丘 (藤田)15
- 第2節 主体部115
 - 1. 形状 (藤田)15
 - 2. 遺物出土状態 (藤田)22
 - 3. 出土遺物 (木許)22
- 第3節 主体部226
 - 1. 形状 (藤田)26
 - 2. 遺物出土状態 (藤田)26
 - 3. 出土遺物 (木許)26

第3章 巨勢山75号墳の調査

- 第1節 位置と墳丘 (藤田)35
- 第2節 石室内埋土と床面 (藤田)35
- 第3節 横穴式石室 (永井)36
 - 1. 墓壇36
 - 2. 玄室39
 - 3. 羨道43
 - 4. 閉塞施設44
- 第4節 遺物出土状態 (木許)45
- 第5節 出土遺物 (木許)49
 - 1. 土器49
 - 2. 馬具55
 - 3. 鉄器・銀製品85

第4章 その他の遺構 (藤田)94

- 第1節 土抗1
- 第2節 墓道
- 第3節 土抗2

第5章 まとめ (木許)96

第6章 考察

- 奥田 尚 巨勢山75号墳の石室材について103
- 永井 正浩 巨勢山75号墳の横穴式石室について106
- 木許 守 出土馬具からみた巨勢山75号墳の階層的位置111

挿図目次

- 図1 巨勢山古墳群(31)と周辺の遺跡
- 図2 巨勢山74・75号墳と周辺の古墳
- 図3 巨勢山74・75号墳 墳丘測量図
- 図4 巨勢山74号墳 墳丘・主体部1・主体部2 土層断面図
- 図5 巨勢山74号墳 主体部1・2
- 図6 巨勢山74号墳 主体部1 平面図
- 図7 巨勢山74号墳 主体部1 立面図
- 図8 巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器(その1)
- 図9 巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器(その2)
- 図10 巨勢山74号墳 主体部1 出土鉄製品
- 図11 巨勢山74号墳 主体部2 平面図
- 図12 巨勢山74号墳 主体部2 立面図
- 図13 巨勢山74号墳 主体部2 出土須恵器
- 図14 巨勢山74号墳 主体部2 出土鉄製品
- 図15 巨勢山75号墳 墳丘断面土層図
- 図16 巨勢山75号墳 横穴式石室
- 図17 巨勢山75号墳 石室 閉塞石
- 図18 巨勢山75号墳 石室 閉塞の状況
- 図19 巨勢山75号墳 石室床面の遺物
- 図20 巨勢山75号墳 玄室馬具出土状態
- 図21 巨勢山75号墳 出土土器(その1)
- 図22 巨勢山75号墳 出土土器(その2)
- 図23 巨勢山75号墳 出土土器(その3)
- 図24 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡板)
- 図25 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(轡)
- 図26 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(杏葉その1)
- 図27 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(杏葉その2)
- 図28 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(杏葉その3)
- 図29 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡その1)
- 図30 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡その2)
- 図31 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡その3)
- 図32 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡復元図その1)
- 図33 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鏡復元図その2)
- 図34 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(雲珠・雲珠復元図)
- 図35 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鞍・辻金具その1)
- 図36 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(辻金具その2)
- 図37 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鉸具・責金具・銅製飾金具)
- 図38 巨勢山75号墳 出土鉄器・銀製品
- 図39 巨勢山75号墳 出土鉄釘
- 図40 土坑1 平面図
- 図41 土坑1 土層断面図

巨勢山75号墳の石室材の石種

表目次

- 表1 巨勢山古墳群の既往の発掘調査古墳一覧
表2 巨勢山74号墳 出土土器観察表
表3 巨勢山75号墳 出土辻金具 方形板・脚金具計測表
表4 巨勢山75号墳 出土土器観察表

巨勢山75号墳の石室材の石種と直径

図版目次

- 図版1 巨勢山74・75号墳 航空写真
巨勢山74・75号墳（手前が75号墳）
図版2 巨勢山74号墳 調査前（西から）
巨勢山75号墳 調査前（東から）
図版3 巨勢山74号墳 全景（南から）
図版4 巨勢山74号墳 主体部1（南から）
同 遺物副葬状況（北から）
図版5 巨勢山74号墳 主体部2（南から）
同 （北から）
図版6 巨勢山75号墳（上から）
同 （羨道側から）
図版7 巨勢山75号墳 墳丘（東から）
同 石室の調査状況（奥壁側から）
図版8 巨勢山75号墳 墳丘断面（奥壁側）
同 墳丘断面（右側壁側）
図版9 巨勢山75号墳 石室全景（奥壁側から）
図版10 巨勢山75号墳 石室 奥壁側
同 石室 玄門側
図版11 巨勢山75号墳 石室 奥壁
同 石室 玄門側
図版12 巨勢山75号墳 石室 閉塞石（玄室から）
同 石室 閉塞石（玄室から）
図版13 巨勢山75号墳 石室 左側壁
同 石室 左側壁（奥壁寄り）
図版14 巨勢山75号墳 石室 左側壁（中央部）
同 石室 左側壁（羨道寄り）
図版15 巨勢山75号墳 石室 右側壁
同 石室 右側壁（奥壁寄り）
図版16 巨勢山75号墳 石室 右側壁（中央部）
同 石室 右側壁（玄門から羨道）
図版17 巨勢山75号墳 石室（奥壁と左側壁）（手前が左側壁）
同 石室（奥壁と右側壁）（手前が右側壁）

- 図版18 奥壁と左側壁（左が奥壁）
 奥壁と左側壁（左が奥壁）
 奥壁と右側壁（右が奥壁）
- 図版19 巨勢山75号墳 石室 左側壁と据付穴（奥壁側から）
- 図版20 巨勢山75号墳 右側壁と据付穴（奥壁側から）
 同 右側壁と袖部（左が袖部）
- 図版21 巨勢山75号墳 奥壁背面
 同 左側壁 背面（奥壁側から）
- 図版22 奥壁背面（右側壁側から）
 右側壁背面（奥壁側から）
 右側壁背面（羨道側から）
- 図版23 巨勢山75号墳 袖部 馬具出土状況（手前が袖石）
- 図版24 巨勢山75号墳 壺鐙と銅製飾金具
 同 （奥壁側から）
- 図版25 巨勢山75号墳 鏡板付轡と杏葉
 同 円環状雲珠と杏葉（左が袖石）
- 図版26 土坑1（東から）
 土坑2（左）と墓道（右） （南から）
- 図版27 巨勢山75号墳 主体部1 出土須恵器
- 図版28 巨勢山75号墳 主体部1 出土須恵器・鉄製品
 巨勢山75号墳 主体部2 出土須恵器・鉄製品
- 図版29 巨勢山74号墳 出土須恵器のへら記号とあて具痕跡
- 図版30 巨勢山75号墳 出土須恵器
- 図版31 巨勢山75号墳 出土須恵器のあて具痕跡
 巨勢山75号墳 出土土師器
- 図版32 巨勢山75号墳 玄室出土馬具
- 図版33 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（轡・杏葉・鐙）
- 図版34 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鏡板・引手）
- 図版35 同
- 図版36 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その1）
- 図版37 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その2）
- 図版38 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その3）
- 図版39 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鐙その1）
- 図版40 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鐙その2）
- 図版41 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（雲珠）
 巨勢山75号墳 玄室出土馬具 雲珠復元状況
- 図版42 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鞞・辻金具）
- 図版43 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鉸具・責金具・銅製飾金具）
- 図版44 巨勢山75号墳 出土鉄器
- 図版45 巨勢山75号墳 出土銀製品
 巨勢山75号墳 出土鉄釘
- 図版46 巨勢山75号墳 出土瓦器・土師器
- 別添図 巨勢山75号墳 横穴式石室
 巨勢山古墳群分布図

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

御所市は、奈良盆地の西南部に位置する。西部は金剛山・葛城山が並ぶ金剛山地を境にして、大阪府と接している。東南部には竜門山地の西端にあたる巨勢山丘陵が起伏し、それらの南を中央構造線が走って吉野川河谷と境している。北部は低平な奈良盆地の一部を占め、沖積地帯が葛城川・曾我川によって形づくられている。両河川の上流部は南方に入り、前記の山地の間に溪谷をつくっている。

さて、奈良盆地と吉野川河谷の間にある竜門山地は主として花崗岩類より成り、東方より西方に向かうにしたがって高さを減じ幅も狭くなる。本市の東部はちょうど西端付近にあたる丘陵地帯となっている。

金剛山の東方、葛城川上流の谷のさらに東側、曾我川の谷の間に巨勢山丘陵がある。曾我川の東側には高取山付近より次第に低くなった山地の端が奉膳山などで終わっている。巨勢山丘陵は西に葛城川の谷、東は曾我川の構造谷で切られてほとんど独立した丘陵となって南北約5kmに細長く延びている。地質は領家複合岩類の角閃石黒雲母石英閃緑岩となっている。

第2節 歴史的環境

御所市における縄文時代の遺跡は、後期の櫛羅遺跡（1）、玉手遺跡（2）の他、石器製作場であったと考えられる後期初頭の小林遺跡（3）の存在が挙げられる程度で、あまり知られていない。

弥生時代の遺跡としては、まず鴨都波遺跡（4）が挙げられよう。本遺跡は、遺構や遺物の豊富さとともに、弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落として著名である。このほか、前期の遺跡には玉手遺跡（2）、中西遺跡（5）などがあり、中期後葉の小林遺跡（3）では方形周溝墓が確認されている。名柄遺跡（6）においては、中期の所産と考えられる銅鐸と銅鏡が出土した。また、後期になると高地性集落も多く営まれ、巨勢山丘陵中の巨勢山境谷遺跡（7）、巨勢山中谷遺跡（8）、巨勢山八伏遺跡（9）などがあるほか、葛城山頂遺跡（10）、曾我川流域の国見山遺跡（11）などを挙げることができる。

古墳時代の遺構では、前期の檜原遺跡（12）が知られている。溝や土坑などが確認されており、布留式土器の一括資料を得ている。中期には集落跡として中西遺跡（5）が知られるほか、中期後

葉から後期前葉にかけて豪族の居館跡と考えられる名柄遺跡（13）が営まれる。

中期中葉以降の遺跡には、広域の空間に居住・生産・祭祀の要素が散在している南郷遺跡群（14）がある。このほか、鴨神遺跡（15）では中期後葉の道路遺構などが確認されている。

一方、古墳については、前期古墳として、車輪石や石製合子などを出土したと伝える大字原谷字オサカケ所在の古墳（16）や、細線式獣帯鏡・筒形銅器・勾玉・刀剣等が出土した西浦古墳（17）、埴輪を有する巨勢山419号墳（18）、三角縁神獣鏡や方形板革綴短甲、漆塗鞍などの豊富な遺物が出土した鴨都波1号墳（20）、また、新庄町域に入るが、巴形銅器や玉類を出土した寺口和田13号墳（19）などが知られているが、南葛城地域の前期古墳の分布は稀薄であると言える。

こうした状況の中、5世紀前葉に至り室宮山古墳（21）が突如築造される。本墳は巨勢山古墳群の北に位置し、墳長238mの規模を誇る南葛城地域最大の前方後円墳である。盾形周濠が巡るとみられ、北側の周堤に接してネコ塚古墳（22）という陪冢がある。室宮山古墳の主体部のうち後円部にあるものは、墳丘中軸をはさんで南北に並んだ2基の竪穴式石室で、そのうち南側石室には長持形石棺が遺存している。副葬品として鏡片、武器類、石製品、埴輪など、多数の遺物の出土が知られている。

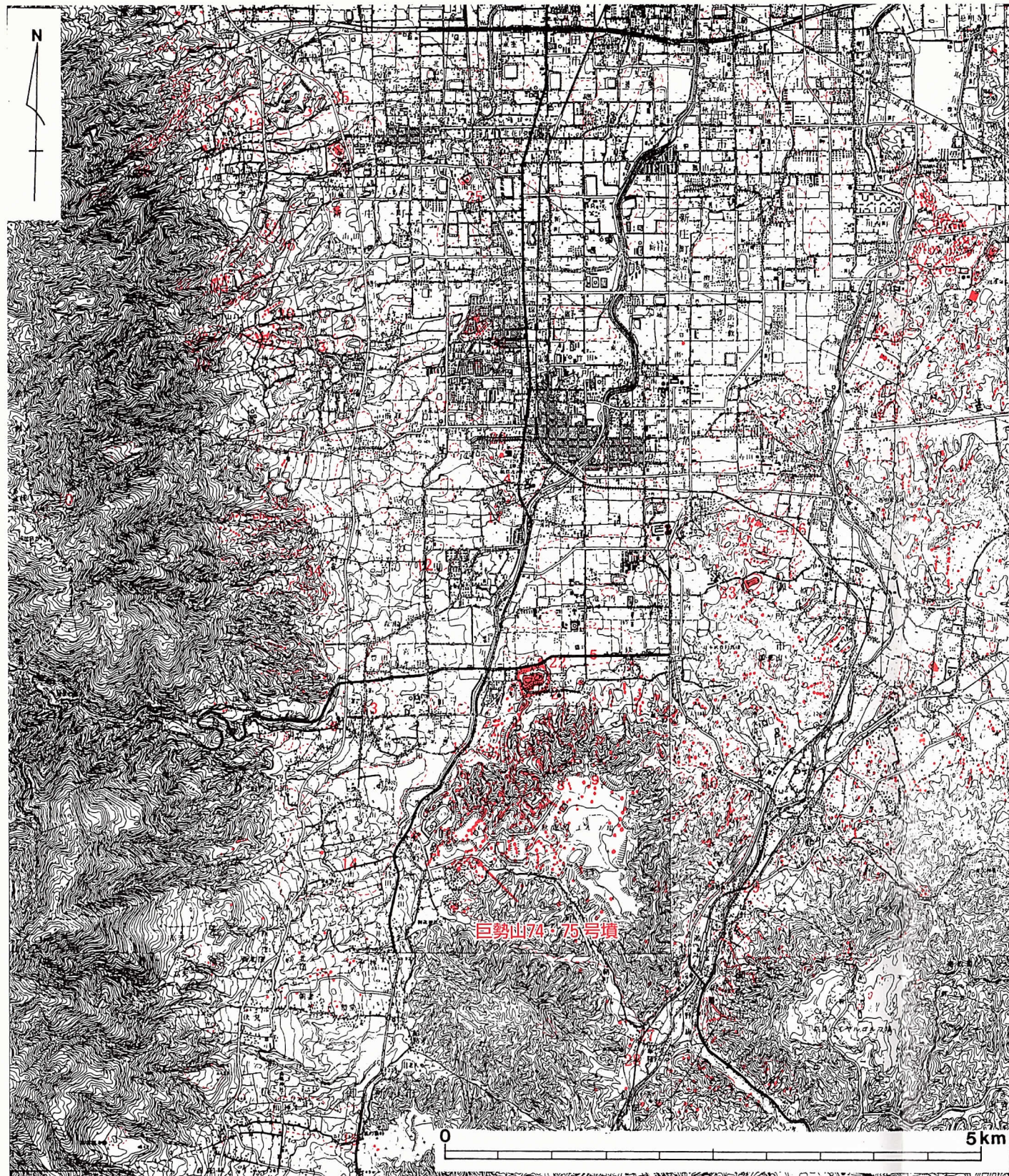
この室宮山古墳に後続する盟主墳として、掖上鐘子塚古墳（23）が想定される。本墳は5世紀中葉から後葉にかけて築造され、墳長は149mを測る。御所市域にはこれに後続する大型前方後円墳は見られないが、新庄町域においては新庄屋敷山古墳（24）、北花内大塚（飯豊陵）古墳（25）、二塚古墳（26）などの中規模前方後円墳が継続して築造される。

御所市域では、水北古墳（27）、水南古墳（28）、樋野権現堂古墳（29）、新宮山古墳（巨勢山708号墳）（30）などの巨石を用いた大型横穴式石室が、順次巨勢谷に築造される。

以上のように、南葛城地域には大・中規模古墳が継続して築造されるが、後期におけるこの地域を特徴づけるのは、葛城山東麓および周辺の独立丘陵などに多数分布する群集墳であろう。以下では御所市・新庄町を中心に、主要な群集墳について概観していく。

まず、今回報告する巨勢山古墳群（31）は、巨勢山丘陵に立地する総数700基に及ぶ我が国最大級の群集墳である。前方後円墳と方墳も含むが、大部分は小規模な円墳である。埋葬施設については、5世紀代は木棺直葬もしくは粘土槨などを主体部とするが、6世紀初頭から前葉頃には横穴式石室を採用する支群も見られる。一方で、6世紀後葉以降にならないとそれを採用しない支群もある。先述の419号墳は、4世紀後葉から末葉にかけての築造と見られ、現地点での群中最古の古墳である。7世紀代にも横口式石槨を内部主体とする323号墳などの築造が続いている。なお、本古墳群の成立過程に関しては、室宮山古墳の築造を契機としたという考えがある（白石1973）。

石光山古墳群（32）は巨勢山古墳群の北、葛城山麓から東にのびる独立丘陵上に立地する。約100基で構成され、多くは円墳だが前方後円墳と方墳も含む。5世紀後半に築造を開始し、6世紀前半に古墳築造のピークを迎える。埋葬主体の大部分は木棺直葬で、墳丘の周囲に小竪穴式石室や箱式



1. 櫛羅遺跡
2. 玉手遺跡
3. 小林遺跡
4. 鴨都波遺跡
5. 中西遺跡
6. 名柄遺跡 (銅鐸・銅鏡出土地)
7. 巨勢山境谷遺跡
8. 巨勢山中谷遺跡
9. 巨勢山八伏遺跡
10. 葛城山頂遺跡
11. 国見山遺跡
12. 檜原遺跡
13. 名柄遺跡
14. 南郷遺跡群
15. 鴨神遺跡
16. オサカケ所在の古墳
17. 西浦古墳
18. 巨勢山 419 号墳
19. 寺口和田 13 号墳
20. 鴨都波 1 号墳
21. 室宮山古墳
22. ネコ塚古墳
23. 掖上鑑子塚古墳
24. 新庄屋敷山古墳
25. 北花内大塚 (飯豊陵) 古墳
26. 二塚古墳
27. 水泥北古墳
28. 水泥南古墳
29. 樋野権現堂古墳
30. 新宮山古墳 (巨勢山 708 号墳)
31. 巨勢山古墳群
32. 石光山古墳群
33. 石川古墳群
34. 吐田平古墳群
35. 寺口和田古墳群
36. 火野谷山古墳群
37. 寺口忍海古墳群
38. 寺口千塚古墳群
39. 笛吹古墳群
40. 山口千塚古墳群

図1 巨勢山古墳群(31)と周辺の遺跡(1/50,000)

石棺・埴輪円筒棺などを伴う古墳が多い。6世紀後半になって僅かに横穴式石室を採用する古墳が現われるが、古墳築造のピークは過ぎており、また古い古墳を潰して新たに築造しているものがあるなど、木棺直葬墳を築造した集団と同一集団ではない可能性も考えられる。

石川古墳群(33)は葛城山腹の尾根の稜線上に営まれ、約70基で構成される。群中には横穴式石室を内部主体とする前方後円墳(石川古城1号墳)が1基みられるが、他は全て円墳と考えられている。埋葬施設については、10基程度の横穴式石室が知られており、それ以外は不明である。また、横口式石槨を内部主体とする、終末期古墳の存在も知られている。

吐田平古墳群(34)は石川古墳群の南、吐田平と呼ばれる葛城山腹の棚状台地から派生する丘陵尾根上に立地する。23基の円墳で構成され、4基が発掘調査されている。このうち吐田平第2号墳は横穴式石室を埋葬施設とし、6世紀初頭に位置付けられている。一方、吐田平第1号墳は6世紀後半の木棺直葬墳であり、6世紀代を通じて横穴式石室と木棺直葬の両者が併行採用されていたと考えられている。

寺口和田古墳群(35)は寺口の北側の支尾根に立地し、13基の古墳が調査されている。径50mの円墳で、粘土槨を内部主体とする13号墳は、出土遺物より4世紀末から5世紀初頭の築造とみられ、これが群形成の端緒となったと考えられている。本古墳群は葛城山麓で最も早く築造を始める群集墳の一つである。

火野谷山古墳群(36)は寺口字岩谷の尾根上に立地し、2基の前方後円墳と10基の円墳で構成される。このうち5基が発掘調査され、5世紀前半の築造とされる1号墳と2号墳をもって群形成が始まり、6世紀代に継続していくものと考えられている。埋葬施設の中心は木棺直葬であるが、8号墳は小竪穴式石室を主体部としている。

寺口忍海古墳群(37)は、寺口の南方の尾根上に立地し188基以上で構成される。埋葬主体は横穴式石室が中心であるが、竪穴系横口式石室が混在している。群の形成は5世紀末に遡り、7世紀中葉まで継続して古墳が築造される。副葬品では鍛冶生産関係の遺物が目立つ。特に石室内に供献された鉄滓から、本古墳群の被葬者には鍛冶生産に関わった集団が含まれている可能性が高い。

寺口千塚古墳群(38)は新庄町寺口の北方尾根上に立地し、約170基で構成される。このうち平石谷川地区の17基が発掘調査されており、埋葬施設のほとんどは竪穴系横口式石室の範疇に含まれるものであることが判った。この地区の古墳は、立地と規模の点から本古墳群の中でもより下位の階層の集団の墓とみなされている。

笛吹古墳群(39)は笛吹神社西方の東西に延びる尾根上に立地する。75基の古墳で構成され、横穴式石室を内部主体とするものが大多数を占めるとされている。群中には2基の前方後円墳が含まれ、他は全て円墳である。群形成のピークは6世紀後半頃に求められる。本古墳群からはミニチュア炊飯具、釵子、鉄滓等の出土が伝えられている。なお群の東端に位置する笛吹神社古墳には、6世紀前半に比定できる刳抜式家形石棺が安置されている。

山口千塚古墳群(40)は笛吹古墳群の西方、山口集落の西の谷間に立地する。円墳を中心とする約40基で構成され、横穴式石室を内部主体とするものが大半を占める。詳しい築造時期などは今後の調査を待つほかないが、6世紀中葉から後半にかけて群形成のピークを迎えると思われる。

以上、葛城地域の群集墳の概要を述べてきたが、未調査の古墳が多く、実態が明らかになっているものは少ないと言える。

ところで、葛城地域を含む大和の群集墳については、埋葬施設の相違からこれらを分類できると指摘されてきた(白石1974・河上1976)。すなわち、(A)木棺直葬墳主体、(B)横穴式石室墳主体、(C)木棺直葬墳・横穴式石室墳混在、というものである。

上述した葛城地域の群集墳を、現時点での調査成果を踏まえ、これに照らして分類すると、(A)石光山古墳群・寺口和田古墳群・火野谷山古墳群、(B)寺口忍海古墳群・寺口千塚古墳群・笛吹古墳群・山口千塚古墳群、(C)石川古墳群・吐田平古墳群、となる。さらに群形成の開始時期や造墓期間、副葬品内容などの要素を加味するとより複雑な様相を呈するが、特に横穴式石室の採用時期については、各群集墳間に顕著な差がある。まず、(A)は群形成の開始時期や最盛期が(B)や(C)に比べて早いというのが特徴であり、横穴式石室普及以前の様相を示す。(B)は群形成の当初から横穴式石室を採用しており、群形成のピークは概ね6世紀後半頃である。(C)は、当初は木棺直葬を内部主体としていて、ある時期横穴式石室を採用し移行していくものと、横穴式石室採用後も木棺直葬と併行採用しているものがある。

さて、巨勢山古墳群は全体的に見て、一応、(C)に分類することが可能だろう。しかし、支群ごとに見るとそれぞれに個性があり、横穴式石室の採用時期についても一様ではない。例えば境谷支群では6世紀前半、ミノヤマ地区では6世紀後葉という具合である。また副葬品の内容もバラエティに富み、支群形成の開始時期や築造のピークなどもそれぞれに相違を見せる。したがって、巨勢山古墳群全体を上記の分類に当てはめるのは困難である。つまり、本古墳群は支群ごとの多様性を見せている点で、他の群集墳とは区別される、一際特異な存在であると言える。

以上に述べてきたように、複雑な様相を呈する葛城地域の群集墳の分析は、当時の社会構造を知る上で注目される。それゆえ今回の報告が、巨勢山古墳群自体の実態解明、さらには葛城地域の群集墳を理解する上での一助となることは間違いないであろう。

註

- 1 松並尚夫「葛城山麓発見の縄文式土器遺跡について」(『大和志』第6巻第7号、1938年)
- 2 伊藤勇輔「御所市玉手 玉手遺跡発掘調査報告概報」(『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)1984年度』、1985年)
寺沢 薫・林部 均「御所市玉手遺跡第2次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)1987年度』、1988年)
- 3 1986年 御所市教育委員会調査
- 4 網干善教「高床式建築考」『近畿古文化論攷』、1962年、吉川弘文館
網干善教「鴨都波遺跡」(『御所市史』、1965年)

- 擬賢二・菅谷文則・吉村雅博・吉田三良「奈良県御所市鴨都波遺跡出土の石戈」(『考古学雑誌』第59巻第3号、1973年)
- 伊藤勇輔『鴨都波遺跡—調査概報—』、1977年、御所市教育委員会
- 伊藤勇輔「鴨都波遺跡発掘調査概報(県立御所高等学校内)」(『奈良県遺跡調査概報1978年度』、1979年)
- 豊岡卓之「御所市鴨都波遺跡第7次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)1988年度』、1989年)
- 木許 守『鴨都波11次発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第11集、1992年)
- 藤田和尊『鴨都波12次概報』(『御所市文化財調査報告書』第12集、1992年)
- 藤田和尊・木許 守『平成3年度市内遺跡発掘調査』(『御所市文化財調査報告書』第13集、1992年)
- 5 木許 守『奈良御所市室 中西遺跡—第2次発掘調査報告—』(『御所市文化財調査報告書』第9集、1990年)
- 木許 守『奈良御所市室 中西遺跡—第3次発掘調査報告—』(『御所市文化財調査報告書』第10集、1991年)
- 6 高橋建白「南葛城郡名柄発掘の銅鐸と銅鏡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第6冊、1919年)
- 7 関川尚功「総括」(『奈良県五條市引ノ山古墳群』、1980年)
- 藤田和尊『奈良御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第4集、1985年)
- 8 御所市教育委員会『ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』、1989年
- 9 御所市教育委員会『ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』、1990年
- 10 松本俊吉「先史文化」(『御所市史』、1965年)
- 11 関川尚功(前出註7)
- 12 藤田和尊『橿原遺跡Ⅰ』(『御所市文化財調査報告書』第17集、1994年)
- 木許 守『橿原遺跡Ⅱ』(『御所市文化財調査報告書』第18集、1994年)
- 13 藤田和尊「奈良御所市名柄遺跡の調査」(『日本考古学年報』42、1991年)
- 木許 守『名柄遺跡第4次発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第19集、1995年)
- 14 坂 靖編『南郷遺跡群Ⅰ』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69冊、1996年)
- 15 佐々木好直「奈良御所市鴨神遺跡発掘調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第8集、1990年)
- 近江俊秀編『鴨神遺跡—2次～4次調査—』(『奈良県文化財調査報告書』第66集、1993年)
- 木許 守『鴨神遺跡第5次発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第22集、1997年)
- 16 島本 一「琴柱形石製品の新例」(『考古学雑誌』第28巻第6号、1938年)
- 17 梅原末治「大和御所町付近の遺跡」(『歴史地理』第39巻第4号、1922年)
- 18 藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』(『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年)
- 19 島本 一「金鍔山古墳に就いて—埴輪に関する資料—」(『大和志』第4巻第5号、1937年)
- 伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)1980年度』、1982年)
- 20 藤田和尊・木許 守『鴨都波1号墳 調査概報』、2001年、学生社
- 21 梅原末治(前出註17)
- 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年)
- 泉森 岐・河上邦彦「室大墓古墳前方部張出部の調査」(『青陵』No.18、1971年)
- 関川尚功「御所市室大墓古墳外堤」(『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)1988年度』、1989年)
- 木許 守・藤田和尊『室宮山古墳範囲確認調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第20集、1996年)
- 藤田和尊・木許 守『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』(『御所市文化財調査報告書』第24集、1999年)
- 22 梅原末治(前出註17)
- 関川尚功(前出註21)
- 23 網干善教「籬子塚古墳」(『御所市史』、1965年)
- 楠本哲夫「御所市籬子塚 前方部周濠発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年)
- 南葛城地域の古墳文化研究会『奈良御所市掖上籬子塚古墳測量調査報告』、1986年
- 木許 守『掖上籬子塚古墳第2次発掘調査報告』(『御所市文化財調査報告書』第14集、1992年)

- 24 菅谷文則・久保哲正・大山真充『新庄屋敷山古墳』、1975年
- 25 河上邦彦「新庄町飯豊陵外堤の調査」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』（『奈良県文化財調査報告書』第30集）、1978年
土生田純之「埴口丘陵外堤の調査」（『書陵部紀要』第32号、1980年）
- 26 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一『大和二塚古墳』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、1962年）
- 27 網干善教「水泥蓮華文石棺古墳及び水泥塚穴古墳の調査」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14冊、1961年）
河上邦彦「水泥塚穴古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』（『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年）
- 28 網干善教（前出註27）
- 29 佐藤小吉「権現堂古墳」（『奈良県史蹟勝地調査會報告書』第3回、1916年）
河上邦彦『後・終末期古墳の研究』、1995年、雄山閣
- 30 天沼俊一「稲宿の石棺及石槨」（『奈良県史蹟勝地調査會報告書』第1回、1913年）
奈良県教育委員会「新宮山古墳」（『奈良県指定文化財』昭和54年度版、1979年）
- 31 網干善教「小殿古墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第3集、1960年）
網干善教「御所市小殿第2号墳」（『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第4集、1961年）
久野邦雄「大和巨勢山古墳群（境谷支群）－昭和48年度発掘調査概報－」、1974年、奈良県教育委員会
千賀 久・田中一広「巨勢山古墳群（ミノヤマ支群）発掘調査概要Ⅰ」（『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1982年度』、1983年）
田中一広「奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」（『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984年）
田中一広「巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984年）
藤田和尊『奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告』第4集、1985年）
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年）
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年）
- 32 白石太一郎・河上邦彦編『葛城・石光山古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年）
- 33 白石太一郎「御所市石川古墳群」（『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年）
木許 守「石川古城1号墳」（奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県前方後円墳集成』、2001年、学生社）
- 34 網干善教「吐田平古墳群」（『奈良県文化財調査報告』第4集、1961年）
- 35 伊藤勇輔「寺口和田古墳群発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1979年度』、1980年）
伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報（第1分冊）1980年度』、1982年）
- 36 関川尚功・生田維道・松田真一『新庄火野谷山古墳群』（『奈良県文化財調査報告書』第31集、1979年）
- 37 吉村幾温・千賀 久編『寺口忍海古墳群』（『新庄町埋蔵文化財調査報告』第1集、1988年）
- 38 坂 靖編『寺口千塚古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第62冊、1991年）
- 39 天沼俊一「火雷神社古墳」（『奈良県史蹟勝地調査會報告書』第2回、1914年）
坪井良平「大和国笛吹社の古墳」（『考古学雑誌』第3巻第7号、1921年）
泉森 峻・菅谷文則「大和葛城の笛吹・山口古墳群の分布」（『古代学研究』60、1971年）
白石太一郎「新庄町笛吹古墳群」（『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年）
河上邦彦・楠本哲夫「新庄町笛吹古墳群試掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報1977年度』、1978年）
泉森 峻「山口千塚・笛吹古墳群」（『改訂 新庄町史』本篇、1984年）
- 40 喜田貞吉「大和南葛城郡山口の千塚」（『歴史地理』第19巻第3号、1912年）
泉森 峻・菅谷文則（前出註39）
白石太一郎「新庄町山口千塚古墳群」（『奈良県の主要古墳Ⅱ』、1974年）
泉森 峻「山口千塚・笛吹古墳群」（前出註39）

第3節 巨勢山古墳群の既往の調査と現状

巨勢山丘陵は、北は盆地平野部に面し、東は曾我川の構造谷と大口峠で、西は葛城川の谷で、また、南は朝町川その他の小河川による氾濫原により画され、ほぼ独立丘陵状を呈している。

巨勢山古墳群の範囲は、従来、この丘陵のうち特に古墳分布の著しい西北部に限って言われることもあったが、集中度は減じながらも、東または南に連綿と続く古墳の分布は現状では限り難い。やはり地形上のまとまりと古墳分布状況を勘案して、現在のところは、巨勢山丘陵と、南西部の古墳が分布する別の丘陵を加えた、東西3.3km、南北3.5kmの図1に示した部分をもって、巨勢山古墳群の範囲とみなす(『巨勢山古墳群Ⅱ』藤田編1987)べきだと考える。

この場合、稲宿所在の新宮山古墳やヒガンド古墳も巨勢山古墳群に含まれることになり、これらを巨勢谷の首長墓系列を構成する古墳であることを強調する立場(筆者も基本的にはそれで良いと考えているが)からの抵抗も予想されるが、古墳群の分布状況と評価とは別のものであるとの立場を堅持し、必要があればこれをいくつかの大別グループに分けることにより対処したいと思う。ただ、無用の混乱を避けるために、それぞれ巨勢山707号墳(ヒガンド古墳)、巨勢山708号墳(新宮山古墳)などと併記する。

また、古墳の名称については、かつては、支群構成を配慮して、小字名などから巨勢山古墳群ミノヤマ支群第1号墳(例えば千賀・田中1983)、巨勢山境谷10号墳(藤田1985)あるいは巨勢山古墳群4支群第16号墳(巨勢山4-16号墳)(田中1984a・b)などと称されたこともある。

しかしながら前報告(藤田編1987)で述べた通り、古墳を乗せる尾根は各所で手の指状に分岐し、主尾根のグループに所属させるのか、分岐した支尾根のグループに所属させるのか、の判断に迷うものも少なくない。

そのため、全面的な発掘調査を経っていない現状では支群への分離は極めて困難なので、筆者らは同書以来、通し番号をもって呼び、巨勢山323号墳などと称している。なお、旧来の名称がある場合には混乱が生じる虞れがあるので、巨勢山41号墳(ミノヤマ1号墳)などとし、旧来の名称や通称を()に入れて併記することにしたのは、巨勢谷の古墳などと同様である。なお、こうした方式は、新改定の『奈良県遺跡地図』(奈良県教育委員会1998)でも踏襲された。

さて、巨勢山古墳群中の個々の古墳の名称となる、その通し番号は、巨勢山古墳群の詳細な分布調査報告書(田中1984b)の「表2 御所市巨勢山古墳群一覧」の左端に添えられたものを基準とし、混乱が生じない程度の改変を加えている場合がある(藤田編1987等)。新規検出墳には新たな番号を付けているので、現在のところ、『巨勢山古墳群Ⅲ』(藤田編2002)で報告した770号墳および771号墳が最終の古墳番号となっている。

発掘調査による新規検出墳は巨勢山古墳群中、西半部とおそらく北半部に集中する傾向がある。

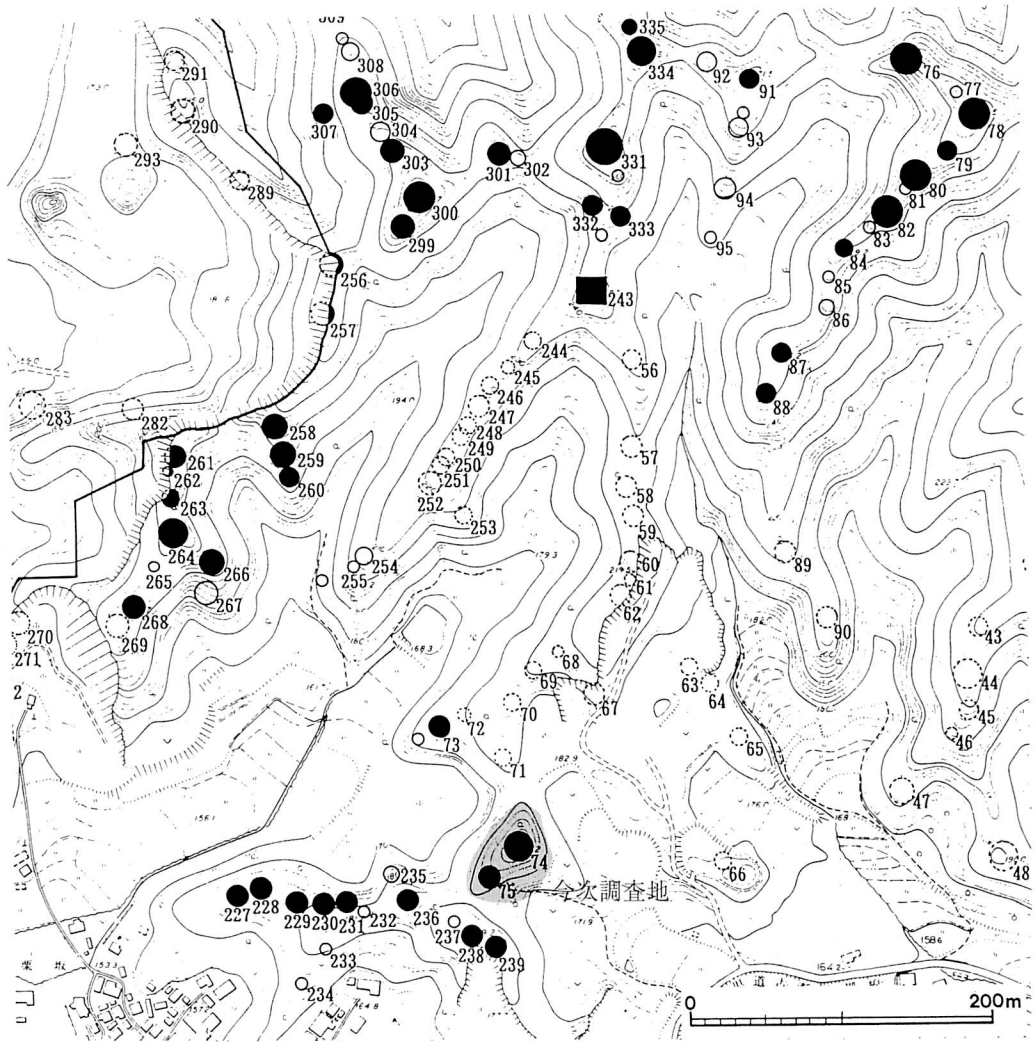


図2 巨勢山74・75号墳と周辺の古墳(S. = 1/5000)

『巨勢山古墳群Ⅱ』（藤田編1987）段階での最終古墳番号は764号墳（同書別添図1による）で、その後の増加分7基の内訳は、a. ドットを落とされていながら番号のなかった2基（奈良県教委1998で修正）、b. 発掘調査による新規検出墳で、現地説明会資料（御所市教委1987、1990）記載の2基（767・表1 768号墳）、c. 後期古墳の築造により破壊された、墳丘下から検出の中期古墳3基（藤田編1987の1基=323号墳下層検出墳を769号墳と新規命名、に加え、『巨勢山古墳群Ⅲ』（藤田編2002）所収の2基=770・771号墳）となっている。

このうち、bとcの種類古墳は、古墳群の西半部および北半部においては、今後の発掘調査の進捗によって、かなりの増加が見込まれる。

一方で、古墳として登録（田中1984b）されていながら、発掘調査の結果、自然の隆起や植林に伴う平坦面でしかなかったことが判明したものも相当数ある。

1988年(昭和63年)から1991年(平成3年)にかけて、ゴルフ場開発に伴う大規模な調査を実施したが、1、2、3、6、7、8、10、11、37、38、106、151、152、157、158、159、162、189、190、191、192、193、201、203、204、206、207、209、211、214号墳として登録されていた30箇所と、念の為に新たに調査対象とした11地点の計41箇所は自然地形であった。これらのうちには古墳以外の遺構を検出し得たものもある(後述)が、古墳番号としては欠番として処理している。こうした例は巨勢山古墳群のうちでも中南部に集中する傾向があり、今後欠番となって減少するであろう古墳数についても一定程度予測が可能で、その数はおそらく70を超えることはないであろう。なお、1999年(平成11年)に調査を実施した428・429・430地点(号墳を呼び替え、以下同様)も古墳ではなく、近世墓、炭焼窯、中世集落など(藤田編2002)であった。

以上のような複雑な状況は、巨勢山古墳群の実数の把握を極めて困難にしており、現在のところ、総数700基もしくはそれ以上、との概数を示し得るに過ぎないが、我が国最大規模の群集墳、との評価は揺るがない。

さて、巨勢山古墳群の既往発掘調査墳の概要は一覧表に記しておいたので、ここではそれぞれの調査の契機を中心にまとめておく。巨勢山古墳群の発掘調査は、1960年(昭和35年)、古墳群西南部の小殿で、国道24号線開発に伴い、不時発見された、287号墳(小殿2号墳)(網干1961a)、288号墳(小殿1号墳)(網干1960)の2基の古墳を端緒とし、このころから地元業者による土砂採取が丘陵のいたるところで始まる。この時期、調査できたのは431～439号墳(境谷1号墳～9号墳)のわずか9基(久野・中井1974)にとどまり、多くの古墳が未調査のまま破壊された。

続く調査は国体のラグビー場建設に伴うもので、ミノヤマ支群と呼称される41～45、47～50、52、89、90号墳の12基(千賀・田中1983)が調査された。その報告書を『巨勢山古墳群Ⅰ』として刊行を予定しているが、諸般の事情により、遺憾ながら未刊である。また、71(4-16)号墳(田中1984a)もラグビー場に通じる県道拡幅工事に伴う調査である。

こうして古墳群の破壊が急速に進む中、実態の把握が急務となり、1983年(昭和58年)度には詳細な分布調査が実施された(田中1984b)。640号墳(条池南古墳)は石棺の存在が著名でありながら荒廃が著しかったので、隣接の641号墳(条池北古墳)と併せて、保存を目的としてこの年度に調査された。

保存を目的とした調査は1984年(昭和59年)度にも継続され、458(境谷10号墳)の調査では巨勢山境谷遺跡(弥生時代の高地性集落)の存在が明確になるという成果(藤田1985)も得たが、1985年(昭和60年)以降、御所市の活性化を図るとの目的で、巨勢山丘陵の開発が盛んに行われることになる。

321～324号墳、769号墳(323号墳下層墳を新規命名)の調査(藤田編1987)では、323号墳が遺存状態の良好な横口式石椁であることが判明し、その重要性からこの調査区全域現状保存の英断が下されたが、243号墳(藤田編1987)に次いで、1987年(昭和62年)の工業団地建設に伴う調査では257・

表1 巨勢山古墳群の既往の調査古墳一覧

(2001年12月現在)

古墳名	通称	墳形	墳長	内部主体	主な出土遺物	文献等(含略報)
21号墳		円墳	18m	木棺直葬(3)	鉄刀、簡尻装具、鉄鏃、須恵器	御所市教委1990
22号墳		円墳	15m	横穴式石室	銀製指輪、耳環、鉄鏃、鉄鎌	御所市教委1990
29号墳		円墳	9~14m	木棺直葬		御所市教委1990
30号墳		円墳	13~16m	木棺直葬	鉄鏃、須恵器	御所市教委1990
31号墳		円墳	9m	木棺直葬	須恵器、土師器	御所市教委1990
32号墳				木棺直葬	銀釧、ガラス玉	御所市教委1990
41号墳	ミノヤマ1号墳	円墳	8~11m	木棺直葬	刀子	千賀・田中1983
42号墳	ミノヤマ2号墳	円墳	8~15m	木棺直葬	歩揺付飾金具、馬具、須恵器	千賀・田中1983
43号墳	ミノヤマ3号墳	円墳	7~8m	木棺直葬	鉄鏃、須恵器、土師器	千賀・田中1983
44号墳	ミノヤマ4号墳	円墳	10~16m	木棺直葬	須恵器、管玉	千賀・田中1983
45号墳	ミノヤマ5号墳	円墳	10m	横穴式石室		千賀・田中1983
47号墳	ミノヤマ7号墳	円墳	15m	横穴式石室		千賀・田中1983
48号墳	ミノヤマ8号墳	円墳	20m	木棺直葬		千賀・田中1983
49号墳	ミノヤマ9号墳	円墳	10~15m	木棺直葬		千賀・田中1983
50号墳	ミノヤマ10号墳	円墳	10~15m	木棺直葬	鉄鏃、耳環、須恵器	千賀・田中1983
52号墳	ミノヤマ12号墳	円墳	10~15m	横穴式石室	馬具、玉、須恵器	千賀・田中1983
53号墳		円墳	16~18m	木棺直葬	刀子、須恵器	御所市教委1990
71号墳	(4-16)	円墳	15~17m	横穴式石室	銀製指輪、馬具、須恵器	田中1984a
74号墳		方墳		木棺直葬	刀子、須恵器	本杵所収
75号墳		円墳		横穴式石室	馬具、鉄鏃、須恵器、土師器	本杵所収
89号墳	ミノヤマ13号墳	円墳	7~10m	木棺直葬	胡鍬金具、鉄鎌、鉄鏃	千賀・田中1983
90号墳	ミノヤマ14号墳	円墳	10m	木棺直葬	須恵器	千賀・田中1983
145号墳		円墳	15m	木棺直葬(2)	鉄鏃、鉄鎌、刀子、土師器	御所市教委1989
146号墳		円墳	18~21m	木棺直葬(3)	鉄刀、馬具、鉄鏃、切子玉	御所市教委1989
147号墳		前方後円墳	32m	木棺直葬(2)	銀製指輪、小刀、鉄鏃、鉄鎌	御所市教委1989
149号墳		円墳	15m	土壙墓	瓦質土器	御所市教委1989
150号墳		円墳	15m	横口式石槨?	土師器	御所市教委1989
153号墳		方墳	15~20m	木棺直葬	銀製指輪、帯状金具、鉄鏃	御所市教委1989
154号墳		方墳	15m	木棺直葬		御所市教委1989
155号墳		円墳	14m	横穴式石室	耳環、鉄族、鉄鏃、須恵器	御所市教委1989
156号墳		円墳	13~15m	横穴式石室	馬具、鉄刀、鉄鏃、玉類	御所市教委1989
194号墳		円墳	8m	横穴式石室	土師器	御所市教委1990
197号墳		円墳	13m	横穴式石室	鉄釘	1991年御所市教委調査
202号墳		円墳	15m	横口式石槨	土師器	御所市教委1990
243号墳		方墳	17~18m	木棺直葬	鉄鏃、刀子、須恵器	藤田編1987
257号墳		円墳		木棺直葬		1987年御所市教委調査
261号墳		円墳	15m		埴輪	御所市教委1987、保存
282号墳		円墳	12m		埴輪、須恵器	御所市教委1987
283号墳		円墳	10~15m	(横穴式石室)	石棺、人骨、須恵器	御所市教委1987
287号墳	小殿2号墳			木棺直葬	鉄斧、須恵器	網干1961
288号墳	小殿1号墳			箱形石棺	須恵器	網干1960
289号墳		円墳	15m			御所市教委1987
290号墳		円墳	18~24m		埴輪、須恵器	御所市教委1987
291号墳		円墳	12m	木棺直葬	須恵器	御所市教委1987
292号墳		円墳	10~13m	横穴式石室	銀製釧、馬具、鉄鏃、ガラス玉	御所市教委1987
321号墳		円墳	7~8m	木棺直葬	須恵器	藤田編1987
322号墳		方墳	8m	木棺直葬(2)	土製丸玉、須恵器	藤田編1987
323号墳		方墳	11~15m	横口式石槨	須恵器、土師器	藤田編1987、保存
324号墳		円墳	6~7m		刀子、須恵器	尼子・横出1987、保存
371号墳		円墳	20m	木棺直葬(2)	馬具、鉄鏃、鉄鎌、玉、須恵器	1998年御所市教委調査
373号墳		円墳	7m	木棺直葬		藤田編2002
374号墳		方墳	22m	横穴式石室		藤田編2002
407号墳		円墳		横穴式石室	須恵器、土師器、馬具	木許1998
408号墳		円墳		横穴式石室	馬具、須恵器、土師器	木許1998
409号墳		円墳		木棺直葬(2)	須恵器	1998年御所市教委調査
414号墳		円墳	8m	横穴式石室	須恵器	藤田編2002
415号墳		円墳	15m	横穴式石室	馬具、銀環、鉄鏃、須恵器、土師器	藤田編2002
416号墳		円墳	7m	横穴式石室	釘	藤田編2002
417号墳		円墳	8m	横穴式石室		藤田編2002

古墳名	通称	墳形	墳長	内部主体	主な出土遺物	文献等(含略報)
418号墳		円墳	15m	横穴式石室	刀子、鉄滓、須恵器	藤田編2002
419号墳		方墳	11m	木棺直葬	剣、埴輪	藤田編2002
420号墳		円墳	24m	横穴式石室	馬具、鉄滓、刀子、須恵器	藤田編2002
421号墳		円墳	20m	横穴式石室	馬具、鉄鏃、鏝、須恵器、土師器	藤田編2002
431号墳	境谷8号墳	円墳	12m	横穴式石室	馬具、鉄族、須恵器	久野1974
432号墳	境谷9号墳	円墳	14m	横穴式石室	須恵器	久野1974
433号墳	境谷6号墳	円墳	8m	木棺直葬	須恵器	久野1974
434号墳	境谷7号墳	円墳	10m	木棺直葬	鉄鏃、鉄鎌、須恵器	久野1974
436号墳	境谷4号墳	円墳	10m	木棺直葬	鉄槌、鉄鉗、鉄斧	久野1974
437号墳	境谷3号墳	円墳	10m	木棺直葬	須恵器	久野1974
438号墳	境谷2号墳	円墳	10~14m	木棺直葬	銅鏡2、剣、勾玉、管玉	久野1974
439号墳	境谷1号墳	円墳	15m	横穴式石室	須恵器	久野1974
449号墳		円墳	35m	粘土槨	甲冑、埴輪	藤田編2002
458号墳	境谷10号墳	円墳	24~30m	(横穴式石室)	須恵器	藤田1985,保存
565号墳		円墳	15~20m	木棺直葬	須恵器	1991年御所市教委調査
640号墳	糸池南古墳	円墳	13~16m	穴式石室横	家形石棺、馬具、須恵器	田中1984b
641号墳	糸池北古墳	円墳	13~15m	横穴式石室	馬具、鉄刀、須恵器	田中1984b
718号墳	稲宿2号墳	円墳	12m			山田1976
719号墳	稲宿3号墳	円墳	17~19m	木棺直葬	埴輪、須恵器	山田1976
745号墳	戸毛向井6号墳	円墳	15m	木棺直葬	埴輪、須恵器	入倉1991
744号墳	戸毛向井7号墳	円墳	13m	木棺直葬	鉄鏃、鉄鎌	入倉1991
767号墳	(新規検出墳に新たに命名)	円墳	8m			御所市教委1987
768号墳	(S-1号墳に新たに命名)	方墳	7m	横穴式石室	須恵器	御所市教委1990
769号墳	(323号墳下層墳に新たに命名)				埴輪、鉄鏃、刀子、馬具	藤田1987
770号墳		円墳	14m	木棺直葬?	須恵器	藤田編2002
771号墳		方墳	16m	木棺直葬?	須恵器	藤田編2002

289~292・767号墳(新規検出墳に本書で新たに命名)、282・283号墳が調査対象となり、また、急斜面を登る長大な墓道を検出している(御所市教委1987)。この事業に伴っては上記の合計8基が記録保存となった。

さらに1988年(昭和63年)~1991年(平成3年)に実施のゴルフ場建設に伴う事前調査では21、22、29~32、53、145~147、149、150、153~156、194、202、768号墳の19基(御所市教委1989、1990)と、197、565号墳の計21基(148号墳は、前方後円墳147号墳の前方部となったため欠番とした。)が記録保存となり、このほかさらに30箇所が古墳として登録され、可能性のある11箇所を加えた計41箇所の調査を実施したが、先述の通り、これらについてはいずれも自然地形であった。

ただし、これらの箇所でも古墳以外の遺構を検出し得たところも少なからずあり、実際に古墳であったところも併せて記すと、弥生時代の高地性集落では、155号墳の北から156号墳にかけて巨勢山中谷遺跡(御所市教委1989)、192地点では巨勢山八伏遺跡を検出(御所市教委1990)した。古墳に伴う陪葬墓は156号墳(御所市教委1989)と565号墳のそれぞれ墳丘裾で1基ずつ、563号墳(調査対象外)の南側で1基検出している。

歴史時代の遺構としては、150号墳北側から157・158地点にかけての道(御所市教委1989)があり、また、木棺直葬墓や土坑(確実に墓であるものを含む)は、150号墳北側・157地点(御所市教委1989)、29号墳から32号墳にかけてと、53号墳および192地点の裾(御所市教委1990)のほか、7、8、10地点、565号墳周辺などで、計15基を検出している。

工業団地ならびにゴルフ場建設に伴う調査の整理作業は継続中であるが、ほとんど絶えることのない新規の発掘調査に対応せざるを得ない現状にあって、膨大な資料数を処理しきれておらず、誠に遺憾ながらこの報告書も未刊となっている。共に現地説明会を実施しているが、特にゴルフ場開発に関わる現地説明会資料(御所市教委1989、1990)は、コピーを綴じただけのものとはいえ、内容は比較的充実しているので、引用の要があるときには当面の間、同資料に拠られたい、との思いを無念の気持ちと共に記しておく。

一方、地場産業の一つでもある土砂採取に伴う事前の発掘調査は、1990年(平成2年)の449号墳(藤田編2002)の調査を皮切りに事業者の理解も得られるようになり、ようやく軌道に乗り始める。

本書に所収した74・75号墳は1993年(平成5年)度の調査で、導入期の横穴式石室や金銅装馬具などの検出で注目される。

その後、1995年(平成7年)度には373、374号墳を、1996年(平成8年)度には414～421号墳の調査を実施(藤田編2002)している。なお、土砂採取に伴う発掘調査は現在も継続中で、1997年(平成9年)度には371号墳と、407・408号墳(木許1998)を、1998年(平成10年)度には409号墳を調査している。これらの報告書も逐次刊行の予定である。

このほか、国道309号線バイパスの建設に伴って、1990年(平成2年)には、744号墳(戸毛向井7号墳)と745号墳(戸毛向井6号墳)の調査(入倉1990)が行われている。

以上、巨勢山古墳群において発掘調査の行われた古墳は85基となり、開発に伴う調査で古墳ではなかった地点、および、かつて調査が為されないまま破壊された古墳も含めると、総数700基強のうち、およそ2割が消滅しているものと推測される。

巨勢山丘陵における、市の活性化を目指した直営または半官半民の大規模開発はようやく終息したが、地場産業としての土砂採取は、ゴセ土なる、水捌けが良く良質なために地上げなどに好んで用いられる、いわば土砂のブランド品の産地が、巨勢山古墳群の分布と不幸な対応関係にあるために、このままでは今後も盛んに行われるだろう。

現在、国史跡指定への動きが出始めており、早期の実現に向けて努力したい。

第2章 巨勢山74号墳の調査

第1節 位置と墳丘

巨勢山74・75号墳は、巨勢山古墳群の南西端の位置に相当し、巨勢山丘陵から南に伸びる一支尾根がひとたび鞍部となって、再び独立丘陵上に高まった最高所に74号墳、そこから尾根の方向に沿ってやや南西に下り、小さな鞍部を経た位置に75号墳がある。この尾根は75号墳を経た後、南西側で再び高まると共に東西に広い支尾根となり、ここには227～242号墳の16基の古墳が存在していた。

74号墳の墳丘のほぼ北半にあたる範囲は自然崩壊により既に消滅していたが、南側には墳頂部を含む範囲が遺存しており、2基の木棺直葬の主体部も検出できた。墳丘は地形の制約を受けて歪であるが、一辺16mほどの方墳を意識するものとみられる。段築や外表施設はない。

墳丘裾は尾根を削って平坦面を造成することにより形成されている。西側では196.50mのコンターライン付近に平坦面を造成している。左廻りに記述していくと、この平坦面は南に至るにしたがってやや東側に方向を変えつつ幅を狭め、南西のコーナー部分を経て南辺の半ばまで至る。これより南側は尾根が痩せて急な崖面になるために、南東のコーナーは形成できないまま196.00mのコンターライン付近に平坦面を造成し、東側の墳丘裾の半ば付近まで至ってようやく直線的に延びる東辺となる。

盛土は標高198.00mのあたりから、原則として外から内へなされる。いずれも地山に因する、いわゆる花崗岩バイラン土である。

第2節 主体部1

1. 形状

墳頂部には概ね北-南に主軸を採る2基の主体部がある。うち、墳丘のほぼ中央にある主体部1が初葬棺で、その東に接する主体部2は追葬棺である。

それぞれの主体部の墓壙は、共に地山から0.7mほどの盛土を行った後に掘り込まれ、これを元の高さまで埋め戻した状態がそのまま墳頂部となる。主体部2の構築は当初は計画されていなかったようで、主体部2の墓壙が主体部1の墓壙東辺を切っている。

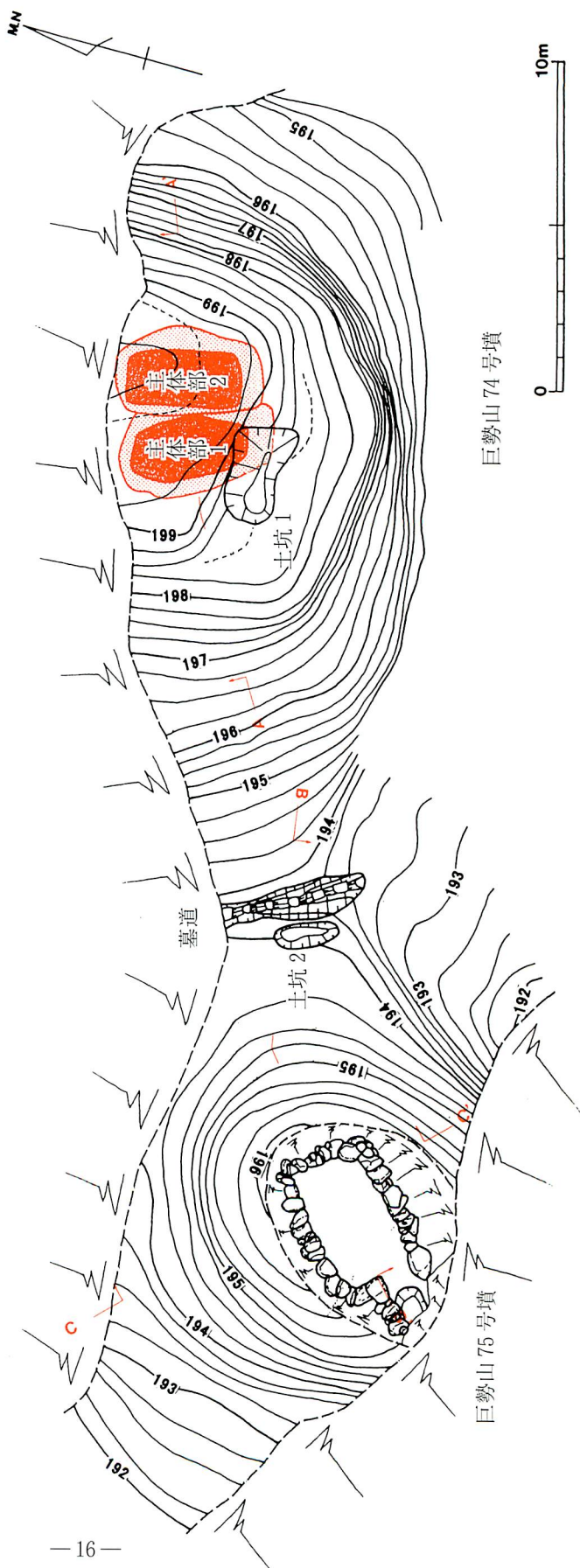
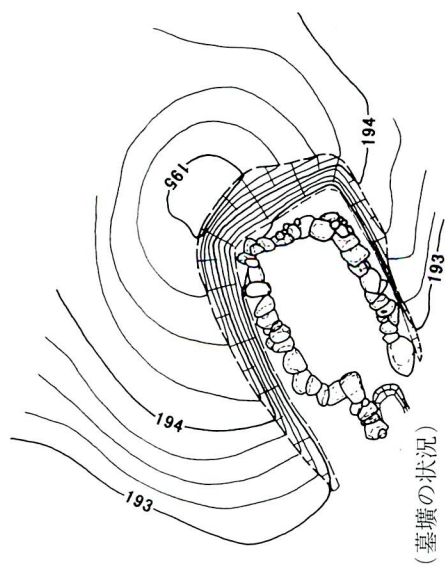
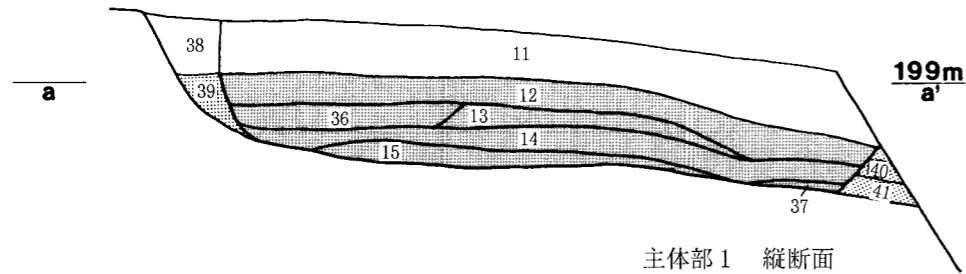
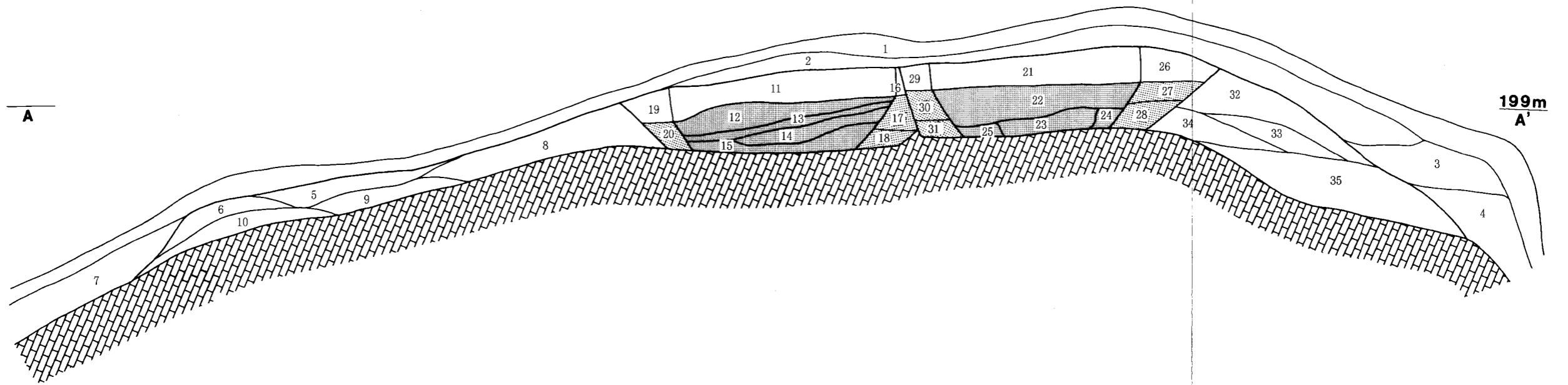
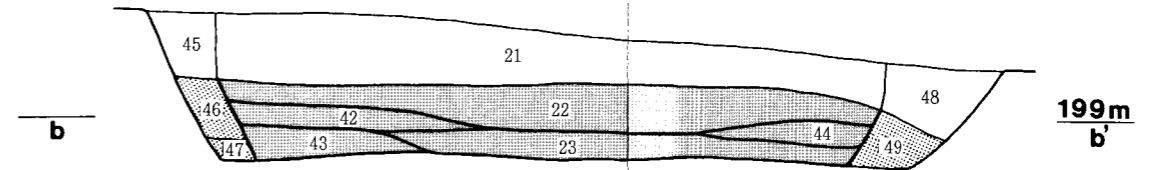


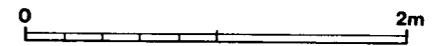
图3 巨勢山74・75号墳 墳丘測量図 (S. = 1/200)



主体部1 縦断面

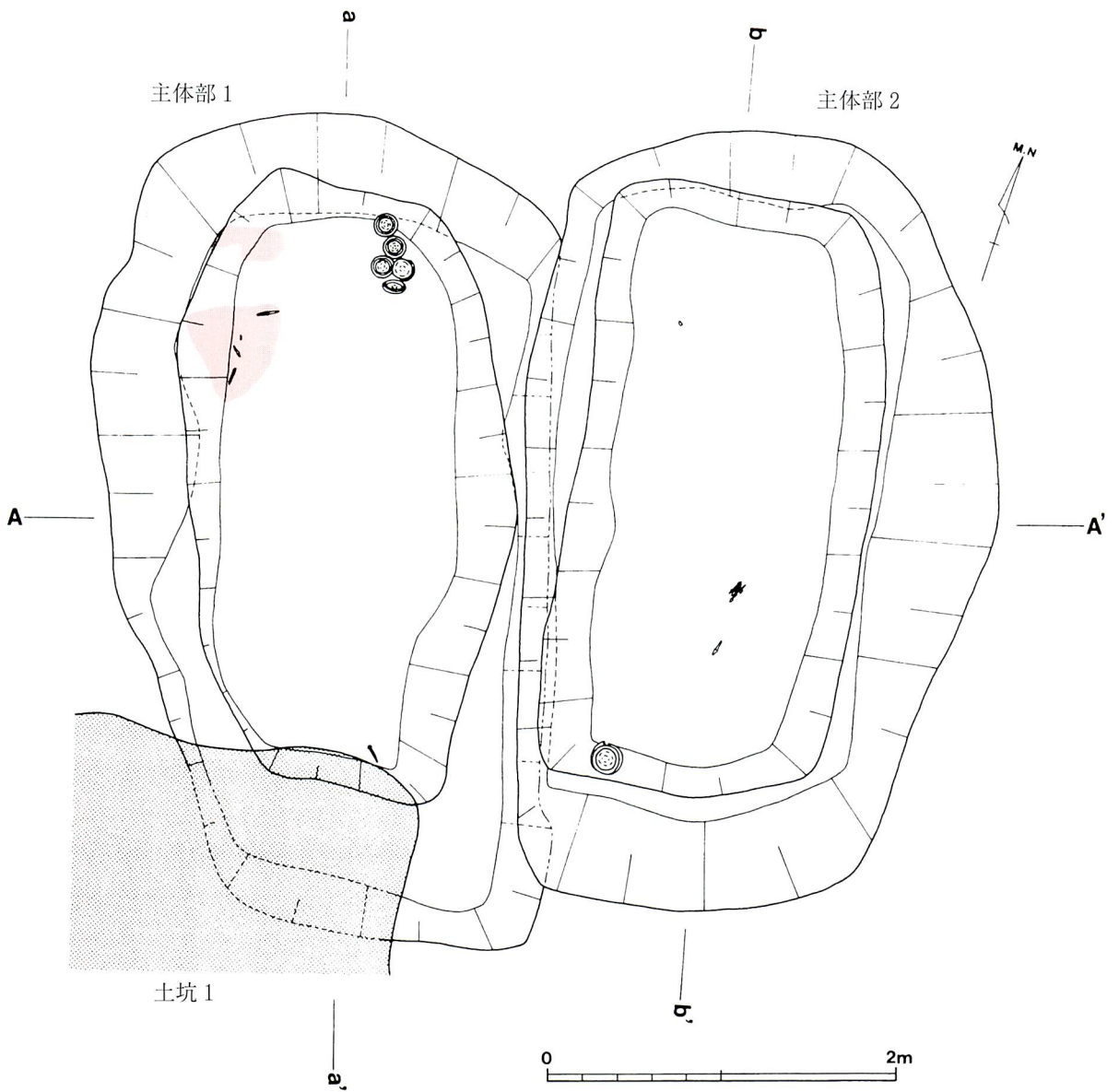


主体部2 縦断面



- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 表土 | 11. 暗褐色砂質土 | 21. 暗褐色砂質土 | 31. 黄褐色砂質土 | 41. 白黄色砂質土 |
| 2. 暗黄褐色砂質土 | 12. 黄褐色砂質土 | 22. 黄白色砂質土 | 32. 淡黄褐色砂礫土 | 42. 黄褐色砂質土 |
| 3. 淡黄褐色砂質土 | 13. 黄褐色砂質土 | 23. 黄白色砂質土 | 33. 淡黄褐色砂礫土 | 43. 灰褐色粘質土 |
| 4. 淡黄褐色砂質土 | 14. 黄色砂質土 | 24. 明灰黄色砂質土 | 34. 明褐色砂礫土 | 44. 黄色砂質土 |
| 5. 黄褐色砂質土 | 15. 黄褐色砂質土 | 25. 黄褐色砂質土 | 35. 赤黄褐色砂質土 | 45. 暗灰褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色砂質土 | 16. 暗黄褐色砂質土 | 26. 暗灰褐色砂質土 | 36. 明灰黄色砂質土 | 46. 暗褐色砂質土 |
| 7. 暗黄褐色砂質土 | 17. 黄褐色砂質土 | 27. 黄褐灰色砂質土 | 37. 黄色砂質土 | 47. 暗黄褐色砂質土 |
| 8. 黄褐色粘質土 | 18. 黄色砂質土 | 28. 黄明灰色砂質土 | 38. 暗黄褐色砂質土 | 48. 暗灰褐色砂質土 |
| 9. 黄褐色砂礫土 | 19. 暗黄褐色砂質土 | 29. 暗灰褐色砂質土 | 39. 黄褐色砂質土 | 49. 暗褐色砂質土 |
| 10. 暗黄褐色砂礫土 | 20. 黄褐色砂質土 | 30. 明灰黄色砂質土 | 40. 白黄色砂質土 | |

图4 巨勢山74号墳 墳丘・主体部1・主体部2 土層断面図 (S. = 1/40)



	主体部 1	主体部 2
棺主軸	N-17度30分-W	N-14度30分-W
墓壙規模 (最大・単位m)	長さ4.8×幅2.6、深さ0.9	長さ4.5×幅2.7、深さ0.7
棺形態	刳拔式舟形木棺	刳拔式舟形木棺
棺規模 (上辺・単位m)	長さ3.5×幅1.9	長さ3.5×幅1.7
(下辺・単位m)	長さ3.1×幅1.3	長さ3.1×幅1.3
(深さ・単位m)	0.9	0.7
埋葬頭位	北	北
出土遺物	須恵器杯蓋2、須恵器杯身3、鉄鏃1、刀子3、鉄釘1ほか	須恵器杯身1、須恵器無蓋高杯1、鉄鏃5、刀子1

図5 巨勢山74号墳 主体部1・2 (S. = 1/40)

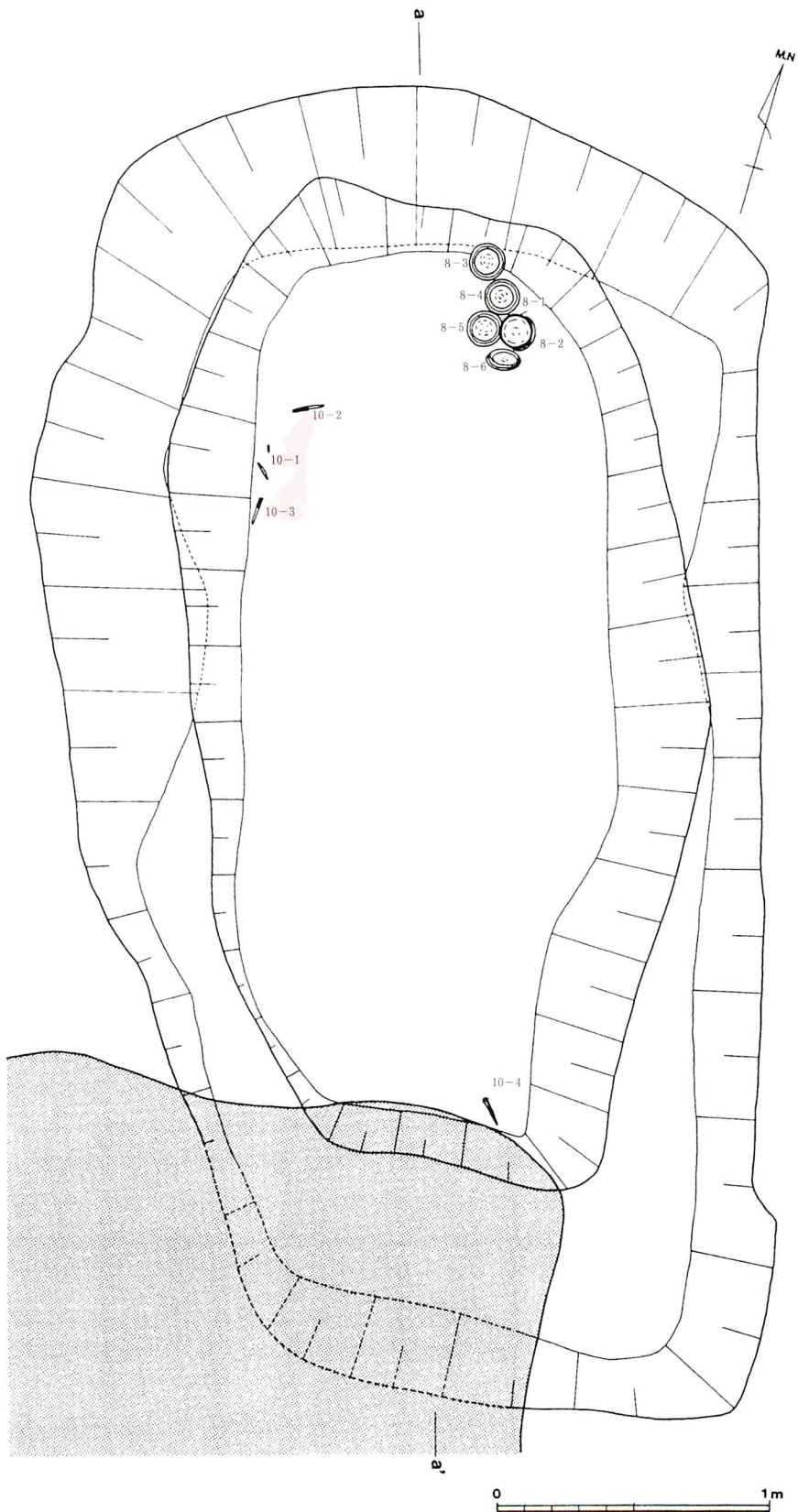


图6 巨勢山74号墳 主体部1 平面図 (S. = 1/25)



图7 巨勢山74号墳 主体部1 立面図 (S. = 1 / 25)

主体部1の南半、特に墓壙西辺の南半付近にかけては、墳丘はかなり削り取られており、また、中世に掘られたとみられる土坑1が、墓壙南辺の大半を掘り抜いている。

主体部1の墓壙の規模はそれぞれ最大で南北4.8m、東西2.6m、深さ0.9mを測る。底は北側のほうが0.3mほど高くなっている。東側の長辺は主体部2の墓壙掘削の影響を受けており、また、南西側が歪にすぼまるのは墳丘が削平を受けているためである。

棺は刳抜式の舟形木棺を直葬したものとみられ、巨勢山古墳群では通有である。棺の主軸はN-17度30分-Wに採る。上辺は南北3.5m、東西1.9m、下辺は南北3.1m、東西1.3mで、棺身の深さの検出できた最大値は0.6mを測る。底は中央がわずかにくぼむがほぼ平らで、北側のほうが南側より0.3m高く、埋葬頭位は北とみられる。

2. 遺物出土状態

棺の北東コーナーでは、棺上から落ち込んだ須恵器杯蓋2点(8-1・2)、須恵器杯身4点(8-3~6)が出土している。いずれも口縁を上に向けており、杯蓋2点は重ねられた状態であった。

棺の北西コーナー付近では刀子3点(10-1~3)と鉄鏃の茎と見られる小破片1点がやはり棺上から落ち込んだとみられる状態で出土した。刀子3点のうち2点には破損箇所があり、出土状態の鋒の方向も揃わない。この部分と北西コーナーの位置のみにベンガラとみられる赤色顔料の散布が認められた。いずれも棺を納める前に墓壙に散布されたもので、北西コーナーの位置の赤色顔料の方が濃厚である。

棺の南東コーナーでは、なぜか1点のみ鉄釘(10-4)が出土している。棺床にほぼ接しており、棺の破損箇所などを補修するためのものかともみられる。

このほか、墳丘西側の流出土から出土した須恵器がある。杯蓋1(9-7)、杯身3(9-8~10)、高杯1、1(9-11)、甕の破片などを確認できる。本来は、乱掘の著しかった南西コーナーの棺に置かれたものであろう。つまり、北東と南西の対向するコーナーの位置の棺上にそれぞれまとまって須恵器が置かれたことになる。

3. 出土遺物

出土遺物のうち須恵器について、図8・9に示した。図8は棺の北東コーナー付近出土のもの、図9は墳丘西側流出土に混じって出土した土器のうち凶化可能であったものを示した。観察結果の詳細は、表2(31~34頁)に記したので、ここでは特徴的なことについて記述する。

(8-1)・(8-2)は杯蓋である。全体の形状は天井部が丸みをもって膨らんでおり、丁寧なヘラケズリが天井部の2/3に及んでいる。(8-2)の胎土は比較的粒径の大きい石英をかなり含むことが特徴的で、同様の胎土を有するものに、主体部1出土のものでは(8-5)の杯身がある。これらは、口径の点でも対応しているので、セットで製作された蓋杯であると考えられるが、(8-2)の口縁部付

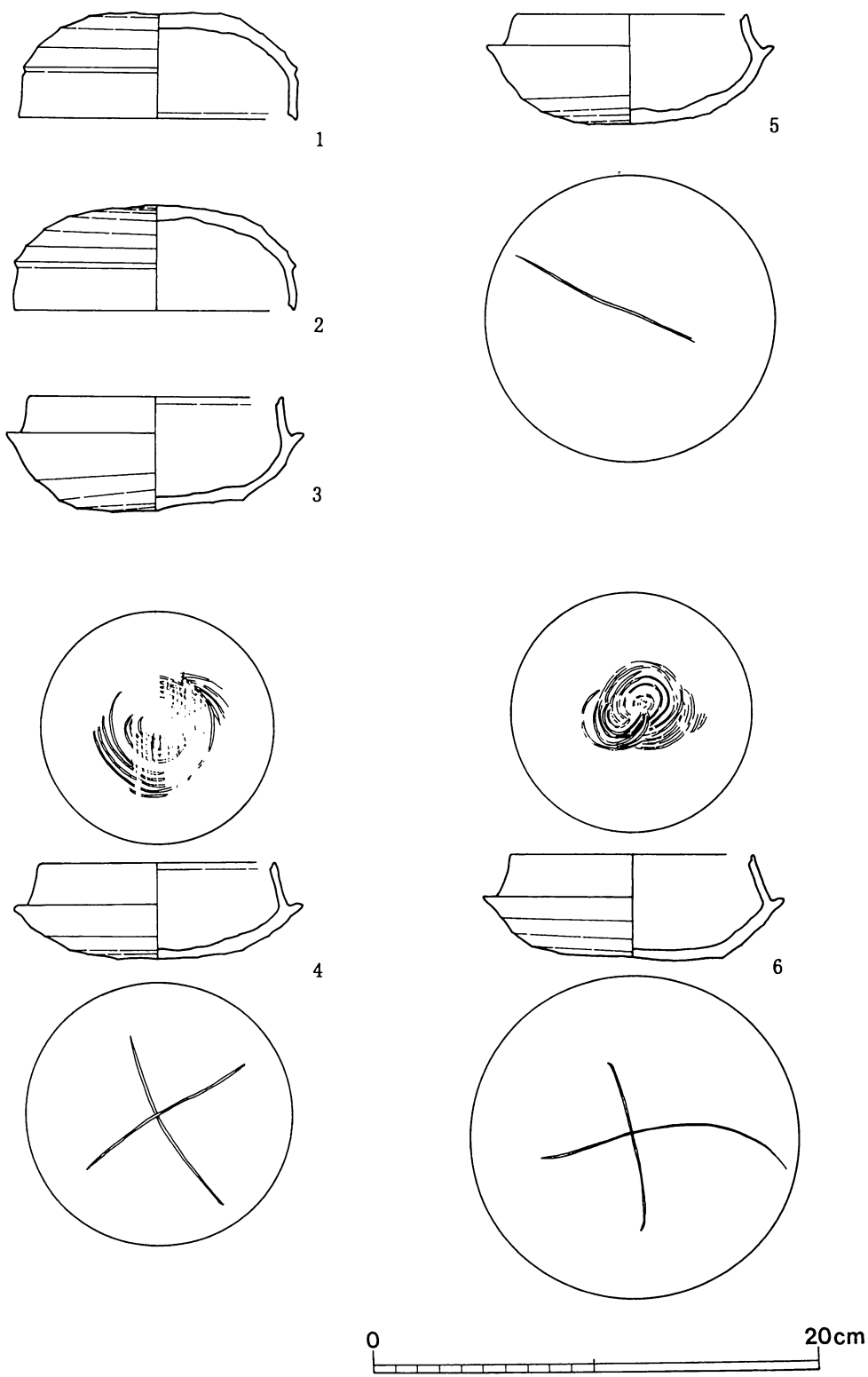


図8 巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器(その1) (S. = 1 / 3)

近に、焼成前の歪みが生じており、うまく合わない。

杯身(8-3~6)は、全体の形態をみると、歪みがあるものの底部が下方に丸く膨らむ(8-3)・(8-5)と、底部があまり膨らまないで扁平な感じがする(8-4)・(8-6)がある。口縁端部の形状はヴァリエーションがあるが、内傾する面を成すか、内面に段を有しており、いずれも、その部分に強いヨコナデによる凹線が巡っている。

底部外面のヘラ記号は、(8-4)・(8-5)・(8-6)にあり、全体の形状が扁平な感じがするとした(8-4)・(8-6)は、共に「X」字状に交差するヘラ記号で共通している。この2個体には、底部内面中央に同心円状のあて具の痕跡が残っており、製作工程の上でも共通点がみられる。これらのことから、この2個体の製作地が同じである可能性が考えられるが、両者の胎土を比較すると、焼成後の色調はやや異なり、含まれる鉱物も微妙に異なっている。粘土の採取地の問題もあり、俄かに断じ難い。なお、胎土が明らかに異なって特徴的な(8-5)は、「一」字状の記号となっており、上の二者とは異なっている。

図9には、墳丘西側流出土から出土した土器を掲げた。いずれも須恵器である。「遺物出土状態」でも述べられたとおり、これらの遺物は、元は南西コーナーの棺上に置かれたものと理解される。なお、このような遺物は、図示できたもの以外に、須恵器高杯・同甕などの破片があった。

図上で全体の形状を復元できたものは、杯蓋(9-7)・杯身(9-8)があった。杯蓋(9-7)は全体の約1/2が残存していた。天井部の中央部は平らになるが全体に上方に丸く膨らんでいる。ヘラケズリの範囲も天井部の2/3以上に及ぶ。杯身(9-8)は約1/3ほどの破片である。底部が下方に丸く膨らんでいる。ヘラケズリの範囲は底部の全体に及んでいる。底部外面に「一」字状のヘラ記号が認められるが、図示したように多くが欠損しており、全体が判らない。

この他の須恵器の破片として、杯身(9-9・10)・(9-11)がある。杯身(9-9)は1/5以下の破片で、(9-10)はさらに小さい破片である。(9-9)は、底部があまり下方に膨らまないでやや扁平な感じがするものである。ヘラケズリの範囲はやや狭いが、ケズリの後に全体をヨコナデしており、仕上げはむしろ丁寧である。(9-11)は、頸部の約1/2が残存していた。外面全体に黒色釉が認められる。

以上の、棺の内外で出土した須恵器については、いずれもTK47型式(田辺1966・以下、須恵器の形式分類については同書による)併行に比定できるだろう。

次に鉄製品は、図10に提示した。

(10-1・2・3)は刀子である。いずれも鹿角装の刀子で、(10-1)は全長8.1cm、刃幅1.3cm、背幅4mmを測る。背関はない。現状の重量は9.2gである。(10-2)は、鋒を欠損している。両関で、刃部の最大幅は1.2cm、背厚は4mmを測る。(10-3)は、刃部中途から鋒までを欠損している。茎の周囲に鹿角が残るため明瞭ではないが、両関とみられる。刃幅は1.0cm、背厚は3mmを測る。

鉄釘(10-4)は、棺のコーナー付近で出土した。鉄釘の出土はこの1点のみであり、遺物出土状

態でも述べられたように、棺の補修などに用いられたものとみられる。頭部は延圧してつくられている。形状は、錆化のために明瞭ではないが方形を意識しているように見え、身部との境界は前後左右に段を有する。身部の断面形は一辺8mmほどの方形である。現存の全長は10.1cmを測る。

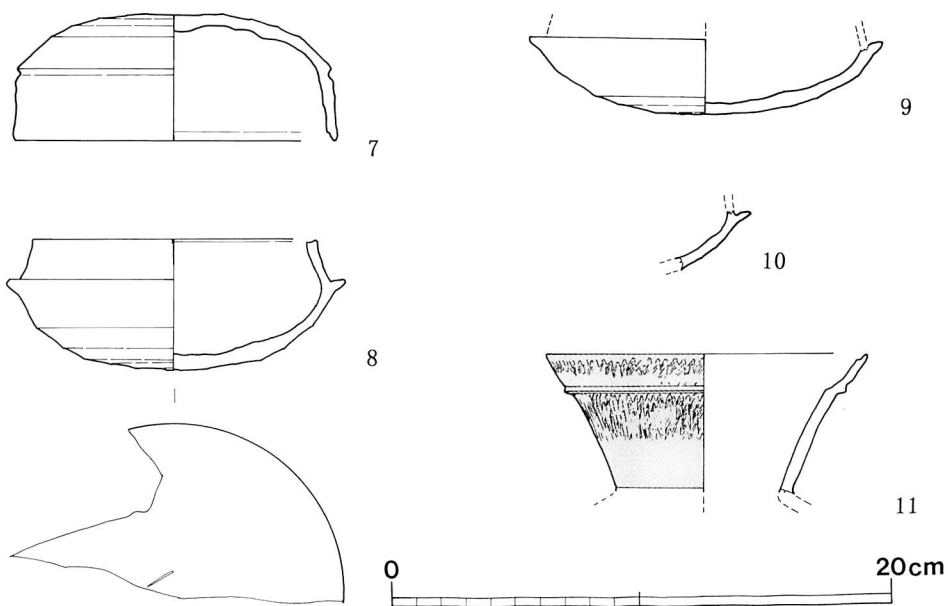


図9 巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器(その2) (S. = 1/3)

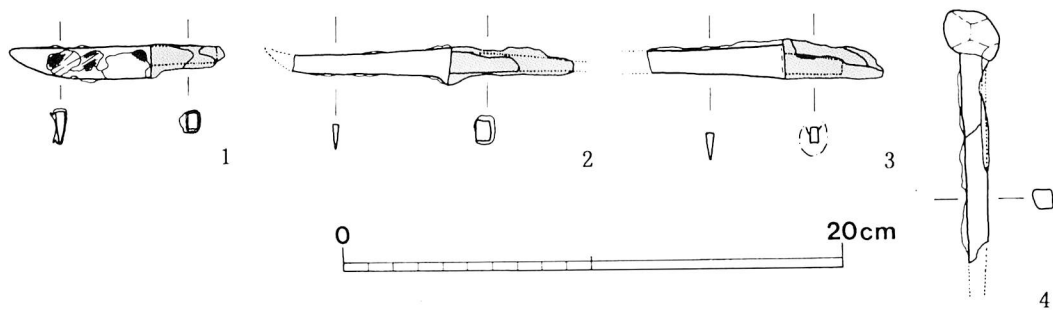


図10 巨勢山74号墳 主体部1 出土鉄製品 (S. = 1/3)

第3節 主体部2

1. 形状

墳頂部の2基の主体部のうちの追葬棺で、初葬棺である主体部1の東に接して設けられた。2基の主体部の墓壙は、共に地山から0.7mほどの盛土を行った後に掘り込まれ、これを元の高さまで埋め戻した状態がそのまま墳頂部となる。主体部2の構築は当初は計画されていなかったらしく、墳丘の中心からやや東に偏し、その墓壙が主体部1の墓壙東辺を切っている。

主体部2の墓壙の規模はそれぞれ最大で南北4.5m、東西2.7m、深さ0.7mを測る。東辺がかなり張り出す。底はほぼ水平である。

棺は刳拔式の舟形木棺を直葬したものとみられ、巨勢山古墳群では通有である。棺の主軸はN-14度30分-Wに採る。上辺は南北3.5m、東西1.7m、下辺は南北3.1m、東西1.3mで、棺身の深さの検出できた最大値は0.3mを測る。底はほぼ平らで水平である。埋葬頭位は主体部1と同様、おそらく北とみられる。

2. 遺物出土状態

棺の北西部では、中軸よりやや西側で鉄鏃の鏃身片1点(14-7)が棺上から落ち込んだ状態で出土した。また、棺の南半ではほぼ中軸上で、やはり棺上から落ち込んだ状態で、鉄鏃5本分ほど(14-1~3・5・6・8~10)が出土した。まとまって出土しているが、鋒の方向は揃わない。そのやや南側には刀子(14-4)がある。刃部を東、鋒は北に向けるが、その先端は欠失しており、やはり棺上遺物である。

棺の南西コーナーの棺上では、須恵器杯身(13-1)が須恵器無蓋高杯(13-2)の上に重なって出土した。いずれも口縁は上に向ける。なお、無蓋高杯は当初より脚部を全て欠失している。

3. 出土遺物

図13に主体部2出土の須恵器を示した。観察結果の詳細は、表2(31~34頁)に記したので、ここでは特徴的なことについて記述する。

杯身(13-1)は口縁部の一部を欠損しているが、出土状態からみて完形のそれが副葬されたものである。主体部1出土の杯身に比べると口径が一回り大きく、端部の処理も比較的シャープさに欠けてやや粗雑な感を受ける。しかし、底部外面のヘラケズリの範囲は広く、ケズリの後ヨコナデで仕上げている。底部内面には同心円状のあて具の痕跡が、同じくヨコナデで擦り消されているが、僅かに残っている。

無蓋高杯(13-2)は、脚部を欠損した杯部のみが出土した。その出土状態から当初から脚部を欠いたものを副葬したと考えられる。

口縁部と底部の境界に1条のつまみ出し凸帯が巡るほかは装飾を施さない。内外面の一部に黒色釉が認められるが、意図的なものであるか判らない。なお、杯底部に残った、脚部の痕跡から、それが3方スカシを有するものであったことが判る。

須恵器は、MT15型式に比定できるものであろう。

次に、鉄製品は図14に提示した。遺物出土状態で記されたように、鉄鏃はいずれも棺上から落ち込んだ状態で出土した。棺の北西部で検出された(14-7)は両端を欠損しているのも明瞭ではないが、鏃身の鋒付近とみられる。一方、棺の南半のほぼ中軸上ではその他の鉄鏃がまとまって出土した。鏃身部が残る(14-1~3)の3個体と茎部に当る(14-5・6・8~10)がある。このうち(14-2)と(14-3)として示したものは、それぞれ2片の破片で接合はできなかったが、出土状態から同一個体と判断できたものである。(14-5)と(14-6)は、残存部分の形状から(14-1~3)とは別個体と判断できたので、ここには少なくとも5本分があったと考えられる。ただし(14-8~10)は、茎の先端部付近で、これら5個体との接合関係が不明で、元は、5個体以上が副葬されていた可能性もある。

全体の形状がかりうじて判る(14-1~3)は、いずれも長頸鏃で、鏃身は長三角形で両丸造である。鏃身関は角関で、箆被部の関は台形関である。(14-1)・(14-2)は前後左右の全面に段を有し、(14-3)は左右にのみ段を有する。鏃身の最大幅は1.2cm前後、厚さは2~3mm程度を測る。

これらの鉄鏃南側で刀子(14-4)が出土した。鋒および茎の先端を欠損しており全長は判らない。現状で14.5cmを測る。刃関のみを有し背関の無いものである。刃幅は最大1.5cmで、背厚は6mmを測る。茎尻に厚さ1mm程の鉄板を巻いている。この金具の内側には把の残存である木質が残っている。

現状での重量は、28.3gである。

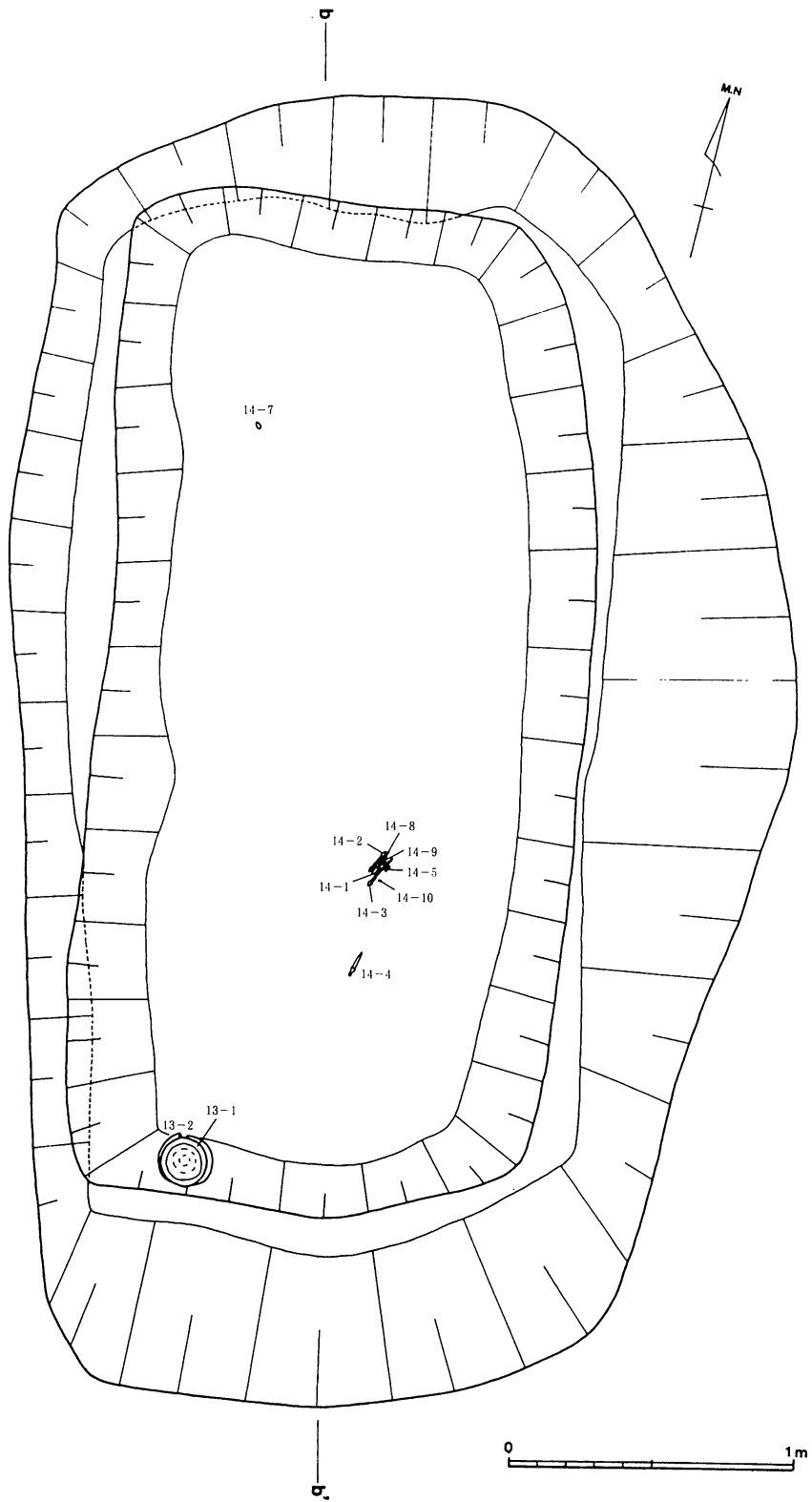


图 11 巨勢山74号墳 主体部 2 平面图(S. =1/25)

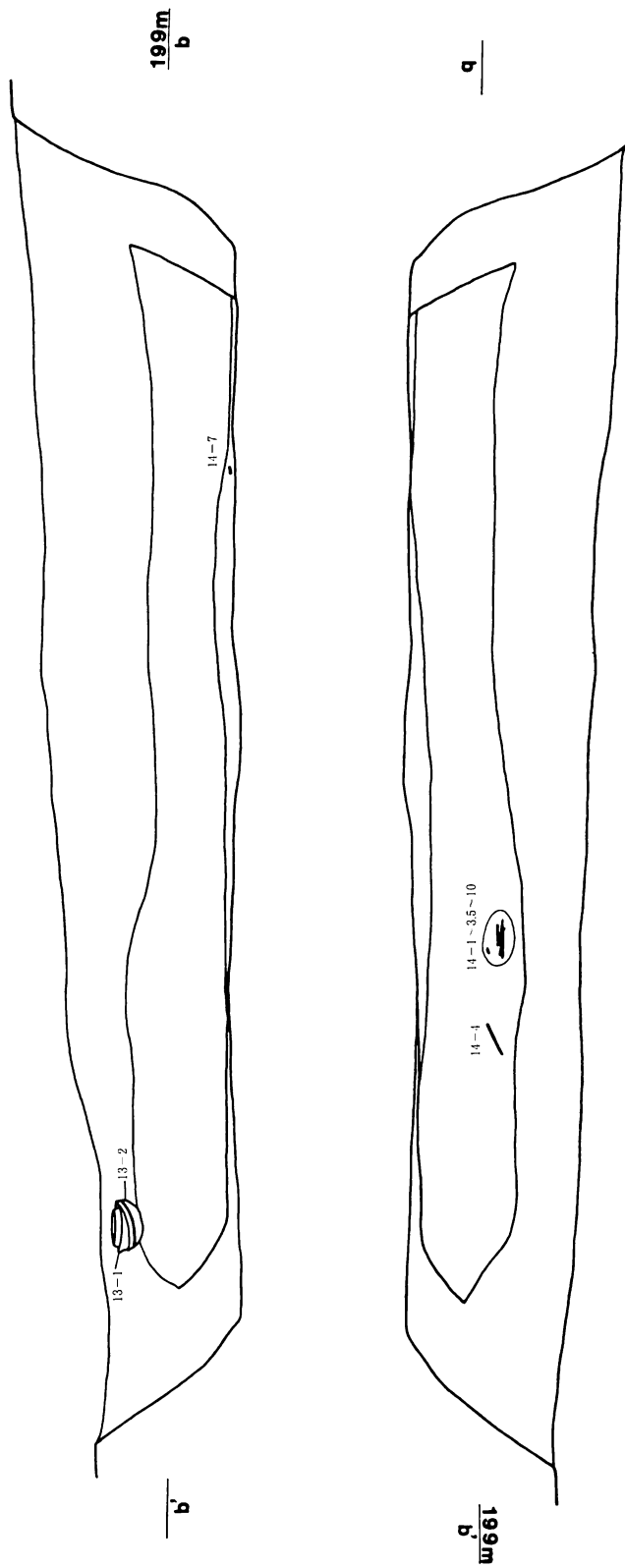


图 12 巨勢山74号墳 主体部2 立面図(S. = 1/25)

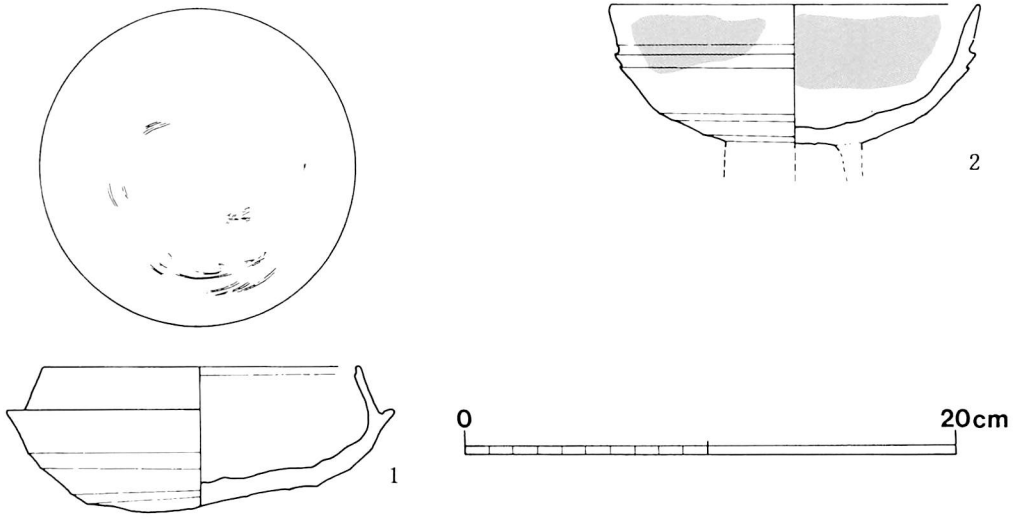


图13 巨勢山74号墳 主体部2 出土須恵器 (S. = 1 / 3)

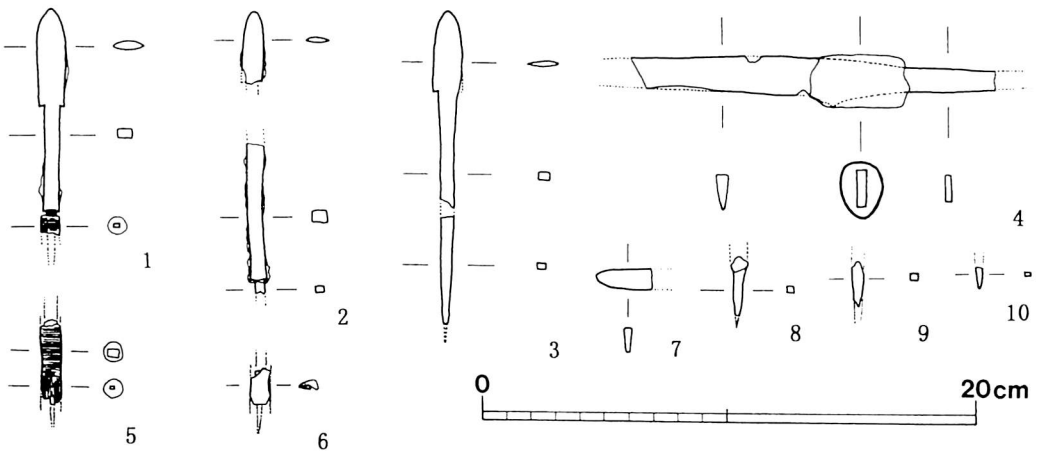


图14 巨勢山74号墳 主体部2 出土鉄製品 (S. = 1 / 3)

表2 巨勢山74号墳 出土土器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎 土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
8-1 須恵器 杯蓋 74号墳主体部1	口径 12.4cm 器高 4.6cm 口縁部はほぼ直線的に下方にくだり、端部は内傾する面をなす。端面中央は浅い凹線となって窪む。口縁部と天井部の境界は、凹線が巡る。天井部の形状は丸みを帯びて膨らむが、頂部はやや平坦である。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部2/3ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・ -	直径2mm以下の石英をわずかに含む。0.5mm以下の石英・チャート・角閃石を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・ -	
8-2 須恵器 杯蓋 74号墳主体部1	口径 12.4cm 器高 4.7cm 口縁部は僅かに内彎しつつ下る。口縁端部は内傾する面をなし、端面中央は強いヨコナデによって凹線状に窪む。口縁部と天井部の境界は、低いが突出した稜になっている。天井部の形状は、丸みをもって膨らんでいる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の2/3ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・ -	直径2~3mm大の石英をかなり含む。3mm以下のチャートを含む。0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・ -	口縁部に焼成前の歪みが生じている。 胎土は、8-5の杯身に似る。
8-3 須恵器 杯身 74号墳主体部1	口径 11.2cm 器高 5.1cm たちあがりはやや内上方に直線的にのび、先端部は丸いが、内面に段を有する。受け部はほぼ水平に突出し、先端部はやや尖り気味になる。底部は丸く膨らむことを指向するが、歪に窪んだ部分があり、このため、正置した時に、口縁部が水平にならない。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ後ナデ	直径1mm大の角閃石をかなり含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	良好	・白灰色 ・白灰色 ・淡青灰色	底部の一部が歪に窪むほか、口縁部に焼成前の歪みが生じている。 74号墳主体部1出土の他の須恵器とは、一見して胎土・色調が異なる。
8-4 須恵器 杯身 74号墳主体部1	口径 10.4cm 器高 4.2cm たちあがりは内上方にのび、端部近くで上方にわずかに屈曲する。口縁端部は、内傾する面をなす。端面の向端は、極めて鈍い稜をなし、下端部には極浅い凹線が巡っている。受け部はほぼ水平にのび、先端部は丸い。底部の形態はあまり下方に膨らまないで、扁平な感を受ける。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ後ヨコナデ(ロクロ回転方向右廻り)。「X」字状に交差するヘラ記号。 内面 ヨコナデ。中心部分に、ナデで一部消された同心円状のあて具痕跡。	直径1mm以下の石英をわずかに含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・ -	底部外面に「X」字状に交差するヘラ記号。内面に同心円状あて具痕跡。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎 土	焼成	・外面 色調 ・内面 ・断面	備 考
8-5 須恵器 杯身 74号墳主体部1	口径 10.2cm 器高 4.9cm たちあがりは内上方にのび、中位で上方にわずかに屈曲する。端部は、内傾する面をなす。端面の両端辺は、鈍く丸みを帯びる。端面中央に、部分的に凹線となって窪む箇所がある。受け部は外上方にのびて、先端部は丸い。底部の形態は、丸みをもって下方に膨らんでいる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)。一部はその後ヨコナデ。「-」字状のヘラ記号。 内面 ヨコナデおよびナデ	直径2~3mm大の石英をかなり含む。2mm以下のチャートを含む。0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・-	底部外面に「-」字状のヘラ記号。胎土は、8-2の杯蓋に似る。
8-6 須恵器 杯身 74号墳主体部1	口径 10.5cm 器高 4.7cm たちあがりは、内傾して内上方にのび、中位で極僅かに上方に屈曲する。端部は丸く、内面に凹線が巡る。凹線の下端は極めて鈍い稜で段をなす。受け部は、水平よりわずかに上方にのび、先端はやや尖る。底部の形態は、あまり下方に膨らまないで、中心部は平らになる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)の後、全体をヨコナデ。中心部に「X」字状に交差するヘラ記号。 内面 ヨコナデ。中心部分にナデで一部を消された同心円のあて具痕跡。	直径2mm以下のチャートをわずかに含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・暗灰色	底部外面に、「X」字状に交差するヘラ記号。底部内面に同心円のあて具痕跡。
9-7 須恵器 杯蓋 74号墳墳丘西側 流出土	口径 12.8cm(残存1/2程度) 器高 5.0cm 口縁部は、極僅かに外反して下方にのび、端部は丸く、内面に段をなす。口縁部と天井部の境界は、浅い凹線が巡り、凹線の上端辺が僅かに突出して丸い稜になっている。天井部は比較的丸く膨らむが、中心部は平らである。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 内面 ヨコナデ ・-	直径2mm大の石英を僅かに含む。0.5mm以下の角閃石・石英・長石を若干含む。	良好	・淡灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎 土	焼成	・外面 色調 ・内面 ・断面	備 考
9-8 須恵器 杯身 74号墳墳丘西側 流出土	口径 11.2cm (残存1/3からの回転復元) 器高 5.1cm たちあがりは、内傾して内上方にのびる。 厚さはそれに従って増し、端部付近で最も厚くなる。端部は、僅かに内傾する面をなす。端面の中央は、凹線状に極僅かにくぼむ。受け部は、水平よりやや上方にのび、先端部は丸い。底部の形態は、下方に丸く膨らんでいる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)。 「一」字状のヘラ記号。 内面 ヨコナデ	直径2mm大の石英を若干含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	底部外面に「一」字状のヘラ記号。
9-9 須恵器 杯身 74号墳墳丘西側 流出土	口径 - 器高 - 受け部は外上方にのび、先端部は丸い。底部の形態は、あまり下方に膨らまないで、やや扁平な感を受ける。 ・欠損 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ後ヨコナデ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の石英を僅かに含む。0.5mm以下の石英・角閃石を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	
9-10 須恵器 杯身 74号墳墳丘西側 流出土	口径 - 器高 - 受け部はほぼ水平にのび、先端は鋭い。 ・欠損 ・外面 ヨコナデおよびヘラケズリ 内面 ヨコナデ ・欠損	直径0.5mm以下の長石・角閃石を僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	
9-11 須恵器 甕 74号墳墳丘西側 流出土	口径 12.6cm (残存1/2からの回転復元) 器高 - 口縁部は僅かに内彎しつつ、外上方にのびる。端部は内傾する面をなすが、端面の両端は、丸く鈍い稜になっている。端面の中央は凹線状に浅くくぼむ。口縁部と頸部の境界は、外面では段をなし、内面で緩やかに屈曲している。頸部は外上方にほぼ直線的にのびている。 ・外面 ヨコナデ後、口縁部、頸部のおおのに櫛描波状文。 内面 ヨコナデ ・欠損 ・欠損	直径1mm以下の長石を含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡灰紫色	口頸部外面に黒色釉。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部)	胎 土	焼成	・外面 色調 ・内面 ・断面	備 考
13-1 須恵器 杯身 74号墳主体部 2	口径 12.3cm 器高 5.7cm たちあがりは、内上方にほぼ直線的のびる。口縁端部は丸く、内面に浅い凹線が巡っている。凹線の下端辺が突出気味になって、段をなす。受け部は外上方にのび、その先端部は丸い。底部の形態は、下方に膨らみ気味になる箇所と削り取られる箇所があって均整が取れない。このため正置した時に、口縁部が水平にならない。全体としてはやや扁平な感を受ける。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り)後ヨコナデ 内面 ヨコナデ。同心円状のあて具痕跡が僅かにのこる。	直径2mm以下の石英を僅かに含む。0.5mm以下の石英・長石を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	底部内面に同心円状のあて具痕跡。 口縁部に焼成前の歪みが生じている。
13-2 須恵器 高杯 74号墳主体部 2	口径 14.4cm 器高 5.5cm(杯部高さ) 口縁部は外上方にほぼ直線的のびて開く。端部は丸く収める。口縁部と底部の境界は、つまみ出し凸帯になっており、凸帯の上下端はこの時のヨコナデによって凹線になる。杯底部の形態は下方に丸く膨らんで深い。脚部の形態はまったく不明であるが、杯底部に残った痕跡から、3方スカシであることが判る。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ ・欠損	直径1mm以下の石英・長石・角閃石をかなり含む。	良好	・濃灰色 ・淡灰色 ・淡青灰色	内外面の一部に黒色釉。

第3章 巨勢山75号墳の調査

第1節 位置と墳丘

巨勢山74・75号墳は、巨勢山古墳群の南西端の位置に相当し、巨勢山丘陵から南に伸びる一支尾根がひとたび鞍部となって、再び独立丘陵状に高まった最高所に74号墳、そこから尾根の方向に沿ってやや南西に下り、小さな鞍部を経た位置に75号墳がある。この尾根は75号墳を経た後、南西側で再び高まると共に東西に広い支尾根となり、ここには227～242号墳の16基の古墳が存在していた。

75号墳は直径11mの円墳である。南側は自然崩壊のため不明であるが、西側は193.75m、北側と東側は194.50mのコンターライン付近に平坦面を造って墳丘端としている。墳丘端の平坦面の形成は、東側は地山削り出し、北側と西側は盛土による。

墳丘は原則として内側から外側へ積まれるが、西側の墳丘下半については、比較的早い段階で墳丘端を盛土で造成し、横穴式石室を覆った盛土との間を最後に埋めるという工程を採っている。盛土はよく締まっている。

横穴式石室の墓壙に関する詳細は後述されるとおりだが、長さ8.6m、幅5.0m、深さは奥壁側の最大の箇所では2.0mを測る。その埋め方は、底から1m程度までは細かい単位で丁寧に埋めており、非常に硬く締まっている。それより上は単位としてはやや雑になるが、よく締まっている。

第2節 石室内埋土と床面

横穴式石室内の埋土は、上半は石材抜き取りに伴って一気に落ち込んだものであるが、12層以下は石室が開いた状態で徐々に堆積したものである。12・14・15・17層は面は形成しないが、瓦器碗や径5cm以下に破砕された獣骨が多く出土した。獣骨の大半は牛とみられ、付近で解体したものの捨て場として再利用されたのであろう。

それ以下の18・19・20層も石室開口後に形成されたもので、副葬品の須恵器片や棺に伴う鉄釘片などを含んでいる。後述の通り埋葬時の状態が保たれたのは袖付近の一角のみである。

石室の床面にも攪乱が及んでいたが、その構造は知ることができ、墓壙底のほぼ平坦に削りだされた地山の上に、明赤褐色細砂または淡赤褐色細砂（アミで示す）を3～4センチの厚みに置土し

て貼床としている。床面は奥壁側に比して羨門付近の方が11cm高く、両側壁側の方が床面中央部よりも7cm高い。

床面の上には最大4cmの厚みでベンガラとみられる赤色顔料の堆積（黒塗りで示す）がある。木棺のおそらく内面全体に塗布されたものの痕跡とみられる。その平面的な範囲は図19に示す通り長さ2.8m、幅1.0mの長方形に復元でき、これは棺の形状を示すものであろう。なお、棺は鉄釘を用いた組合式木棺で、単次葬とみられる。

また、床面の貼床は精良な明赤褐色細砂を選別して2～3cmほどの厚みに敷きつめるが、石室基底石の据え付け穴の埋土は暗褐色砂質土で、暗みがかかっている点は、あまり気を使って選別された埋土とは言い難い。

第3節 横穴式石室

巨勢山75号墳の主体部は、玄室の幅が広い右片袖の横穴式石室である(第16図・付図)。玄室は、平面において横幅が中央で膨らむ、いわゆる胴張り形の形態を呈する。羨道は、自然崩壊によって破壊されているものの、石積みの観察によって右壁が本来の長さを保つ可能性が高い。この場合石室全長は5.8mとなり、玄室長に対して羨道が短い形態となる。石室の開口方向は南西であり、主軸は磁北を基準とした座標の南北軸より東へ49度振る(N-49度-E)。玄室床面は現存する墳丘の最高点から約3.2m下にあり、墳丘の中でも比較的低位位置から構築している。

石室の構造、特に上部については、盗掘や石材の抜き取りのために破壊されており不明な点が多い。石材は周辺地域で採集できる花崗岩と閃緑岩を中心とした割石を使用しているが、角がとれて丸みを持つ自然石に近いものが多く用いられている。また、石室の残存状況に比して閉塞施設については良好な状態で確認することができた。

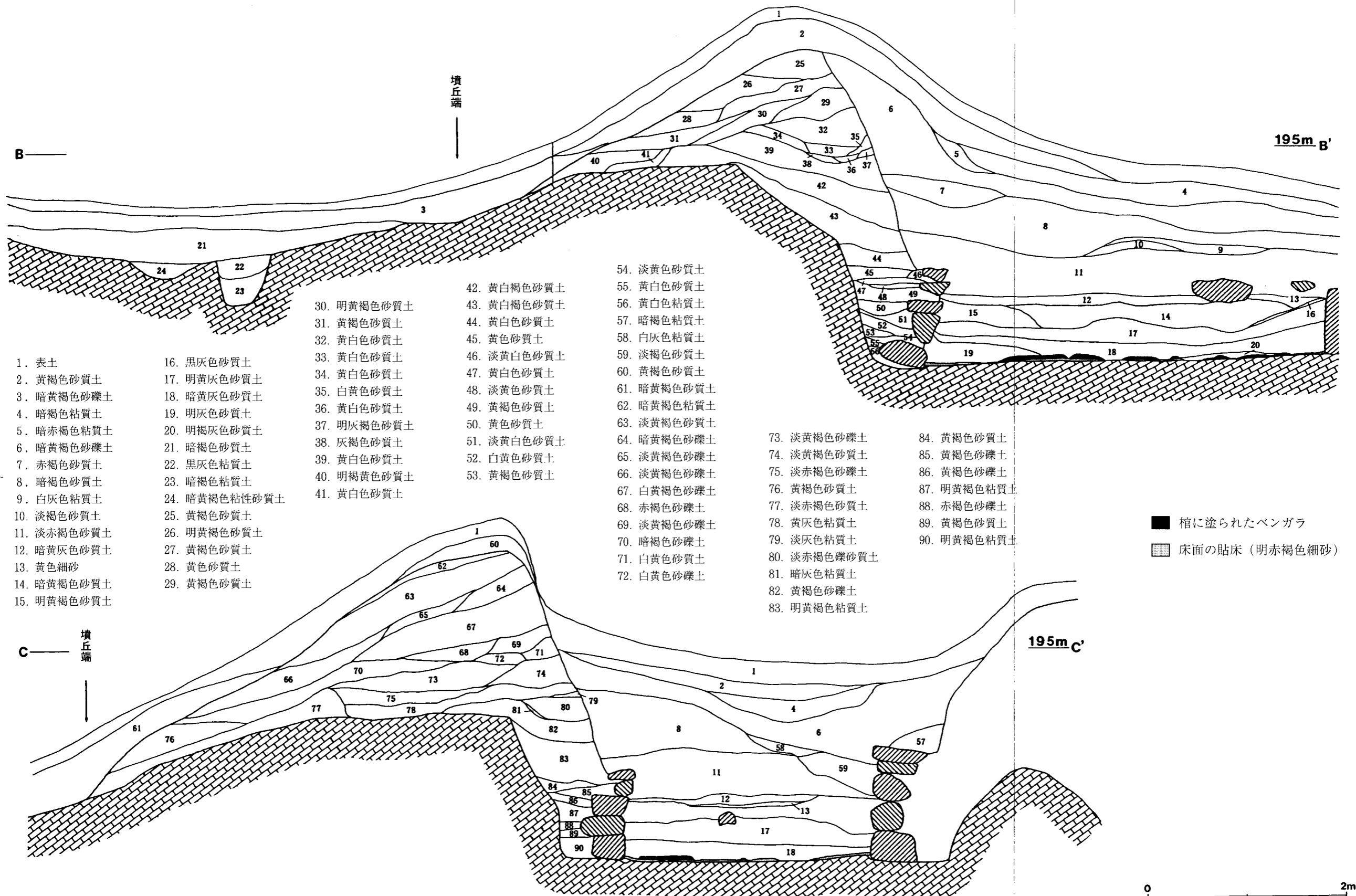
以下、墓壙と石室の各部位について記述を行う。なお、石室石材については奥田尚氏の考察が第6章に掲載されている。

1. 墓壙

墓壙は、墳丘を断割ったトレンチの壁面で断面の確認を行い(図15)、その後石室石材を残した状態で墓壙の掘削を行い平面を確認した。

墓壙の規模は、石室の北側で石室の壁の前面から1.86m、西側で1.2mの幅で掘り込まれている。掘削の深さは、丘陵側に面する奥壁側(北側)での掘り込みが深く2.02m、西側で1.46mである。

墓壙の傾斜は2段となり、上半はすり鉢状に角度をもたせて掘り込み、下半は石室の大きさに併せて掘り込みの角度を急とする。段の傾斜の変化は北側の墓壙の方が著しく、西側は変化が少ない。



- 1. 表土
- 2. 黄褐色砂質土
- 3. 暗黄褐色砂礫土
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 暗赤褐色粘質土
- 6. 暗黄褐色砂礫土
- 7. 赤褐色砂質土
- 8. 暗褐色砂質土
- 9. 白灰色粘質土
- 10. 淡褐色砂質土
- 11. 淡赤褐色砂質土
- 12. 暗黄灰色砂質土
- 13. 黄色細砂
- 14. 暗黄褐色砂質土
- 15. 明黄褐色砂質土

- 16. 黒灰色砂質土
- 17. 明黄灰色砂質土
- 18. 暗黄灰色砂質土
- 19. 明灰色砂質土
- 20. 明黄灰色砂質土
- 21. 暗褐色砂質土
- 22. 黒灰色粘質土
- 23. 暗褐色粘質土
- 24. 暗黄褐色粘性砂質土
- 25. 黄褐色砂質土
- 26. 明黄褐色砂質土
- 27. 黄褐色砂質土
- 28. 黄色砂質土
- 29. 黄褐色砂質土

- 30. 明黄褐色砂質土
- 31. 黄褐色砂質土
- 32. 黄白色砂質土
- 33. 黄白色砂質土
- 34. 黄白色砂質土
- 35. 白黄色砂質土
- 36. 黄白色砂質土
- 37. 明灰褐色砂質土
- 38. 灰褐色砂質土
- 39. 黄白色砂質土
- 40. 明褐色砂質土
- 41. 黄白色砂質土

- 42. 黄白褐色砂質土
- 43. 黄白褐色砂質土
- 44. 黄白色砂質土
- 45. 黄色砂質土
- 46. 淡黄白色砂質土
- 47. 黄白色砂質土
- 48. 淡黄色砂質土
- 49. 黄褐色砂質土
- 50. 黄色砂質土
- 51. 淡黄白色砂質土
- 52. 白黄色砂質土
- 53. 黄褐色砂質土

- 54. 淡黄色砂質土
- 55. 黄白色砂質土
- 56. 黄白色粘質土
- 57. 暗褐色粘質土
- 58. 白灰色粘質土
- 59. 淡褐色砂質土
- 60. 黄褐色砂質土
- 61. 暗黄褐色砂質土
- 62. 暗黄褐色粘質土
- 63. 淡黄褐色砂質土
- 64. 暗黄褐色砂礫土
- 65. 淡黄褐色砂礫土
- 66. 淡黄褐色砂礫土
- 67. 白黄褐色砂礫土
- 68. 赤褐色砂礫土
- 69. 淡黄褐色砂礫土
- 70. 暗褐色砂礫土
- 71. 白黄色砂質土
- 72. 白黄色砂質土

- 73. 淡黄褐色砂礫土
- 74. 淡黄褐色砂質土
- 75. 淡赤褐色砂礫土
- 76. 黄褐色砂質土
- 77. 淡赤褐色砂質土
- 78. 黄灰色粘質土
- 79. 淡灰色粘質土
- 80. 淡赤褐色砂質土
- 81. 暗灰色粘質土
- 82. 黄褐色砂質土
- 83. 明黄褐色粘質土

- 84. 黄褐色砂質土
- 85. 黄褐色砂礫土
- 86. 黄褐色砂礫土
- 87. 明黄褐色粘質土
- 88. 赤褐色砂礫土
- 89. 黄褐色砂質土
- 90. 明黄褐色粘質土

■ 棺に塗られたベンガラ
 ■ 床面の貼床（明赤褐色細砂）

図 15 巨勢山 75号墳 墳丘断面土層図
 (S. = 1/40)

0 2m

墓壙の下半部では、石室の石積みとの裏込めの様子を確認することができた。石材の裏側から墓壙までの幅は0.1～0.76mであり裏込めのスペースが非常に狭い。このことから、特に石室の下半部については石室の内側にあたる位置から石材を積み、その後に裏込めの土を充填していることを確認した。なお、裏込めは土のみで構成しており石材は用いていない。

石室の最下段の石材を固定するための掘り方(据付穴)は非常に浅く、なかには床面のレベルに石材を配置したものさえあった。

2. 玄室

玄室は先述したように中央で横幅が膨らむ胴張り形を呈しており、平面規模としては全長4.1m、奥壁幅2.0m、最大幅2.5m、玄門幅1.18mである。全長と奥壁幅の比率は2.05 : 1である。

石室に使用する石材は、大(約1.5m×0.5m)、小(約0.6m×0.3m)の大略長方形を呈する自然石と、人頭大の自然石を組み合わせ丁寧に横に揃えて構築している。

石積みは、それぞれの壁で横方向に通る石積みの単位は5列まで確認することができ、これより上部は破壊が著しく構造については不明な点が多い。石積みの単位については、以下最下段より1列、2列と記述する。石室上部は、奥壁のコーナー部分において6列目にあたる部分で奥壁と側壁を共有するように架けられた石材を確認することができ、ここが石室の上部構造への変化点であることが判明した。両側壁は左右とも5列目までは直立するように造られており、奥壁は1列目から前傾するように角度を持たせて積んでいる。ただし、右側壁中央部分で下段から石積みを前傾させるような角度を持つ箇所を確認したが、築造当初は直立していたものが、後世に石室が変形したと考えたい。

各壁の構築順序については、コーナー部分において各壁の石材のかみ合わせを観察することができた。奥壁の石材は、右側壁の石材の側面にかぶせるよう並べており、左側壁の石材は、奥壁石材の側面に、袖部の石材は左側壁の側面にそれぞれかぶせて構築している。例外もあるため、あくまでも原則としてはあるが、各壁の石材配置は、右側壁→奥壁→左側壁→袖の順序で行っているといえる。

床の構造については、墓壙に石室石材を配置した後に2～3cmの厚みで淡赤褐色砂質土を敷き、貼床としている。床面のレベルについてはほぼ一定している。袖付近において床面のレベルがやや上がることを確認したが、框のような構造にはならない。また、床面に礫を敷くようなことはなく、棺を配置するための特別な施設は設けていない。

排水溝については石組や素掘りなどの構造物はなく、設けられていないことが判明した。これは玄室のレベルが一定しているうえに、羨道部で墓道状の遺構が伸びていることから、排水が容易であったことを考えることができ、必要がなかった可能性が高い。このような小型の横穴式石室には、排水溝をもつものは少ない。次に各壁の構築方法と構造について述べる。

a. 奥壁 先述したように前方へせり出すような形態となっており、特に4列目から前方への傾きが急となる。この列の左側に側壁と共有するようにコーナーに架けた石材が存在し、ここから石室の持ち送りの角度を急としている可能性が高い。このレベルが北側の墓壇の掘り込みレベルとほぼ一致するが、墳丘は少なくともこれより1.2m立ち上がるために、4列目以降もさらに数列の石積みが続く可能性を考えることができる。使用する石材の大きさについては、最下段から3列目までは大きさをそろえた石材を用いているが、それより上部では比較的小型の石材を織り交ぜて構築しており、持ち送り構造の工夫を施している。

また、側壁の胴張りに併せて奥壁において中央部で石列が湾曲しており、両側壁のコーナーを結んだラインから最大0.1m外側へ曲がる。

b. 右側壁 奥壁沿いの2・3列を共有する石を除いてやや小ぶりながら石材の大きさは一定する。石積みの単位は、5列目まで明確に確認することができる。壁面の大部分は直立するが、中央でわずかであるが前へとせりだすように石積みが傾いている。

石積みの作業単位で興味深いのは、奥壁の2列目にあたるラインが右側壁では3列目に相当しており、石積み作業が他の壁より一列多く行われていることである。この3列目の石積みは使用する石材の大きさが小さいことや、中央で2列目に吸収されることから、奥壁の2列目のレベルをそろえるために調節した作業と考えることができる。これにより奥壁の2列目(右側壁の3列目)が石室構築の作業における一つの区切りであることが判明した。

また、石材が小さいために可能であったのか、玄室が胴張り形に開く大きさが左側壁より大きい。奥壁と袖部の各コーナーを直線で結んだラインから最大0.34m外側へ湾曲する。

c. 左側壁 2列目と3列目の境として石材の大きさが変化する。2列目までは奥壁よりも大きな石材を用いて築造しているが、3列目より上ではやや小降りの石材を使用している。壁面はほぼ直立しているが、先に述べたように6列目に奥壁と共有する石材があり、これより上方は持ち送りを行っている可能性が高い。各列のレベルについては奥壁のレベルと一致し、石材のサイズがこの壁において最も揃えられていることから、この壁が石室構築の基準となった可能性が高い。また、袖部に対応する個所では、他よりも大きい石材を用いている。

胴張り形に開く大きさについては右側壁より小さく、奥壁と袖部との各接点を直線で結んだラインから最大0.16m外側へ湾曲する。

d. 袖部 先述したように右片袖の石室のため、この個所の構築について述べる。1列目は1石で造られ、2列目を2石で構成する。2列目のレベルは右側壁の3列目、奥壁の2列目にあたり、他の壁の構築に併せて築いている。また、2列目の羨道側の石は、羨道側にずれたようになっており、玄門を持ち送りのような形態をもたせて石室の構築を行った可能性がある。なお、後に述べる閉塞の状況から、袖部までは天井石が架かっていた可能性が高い。

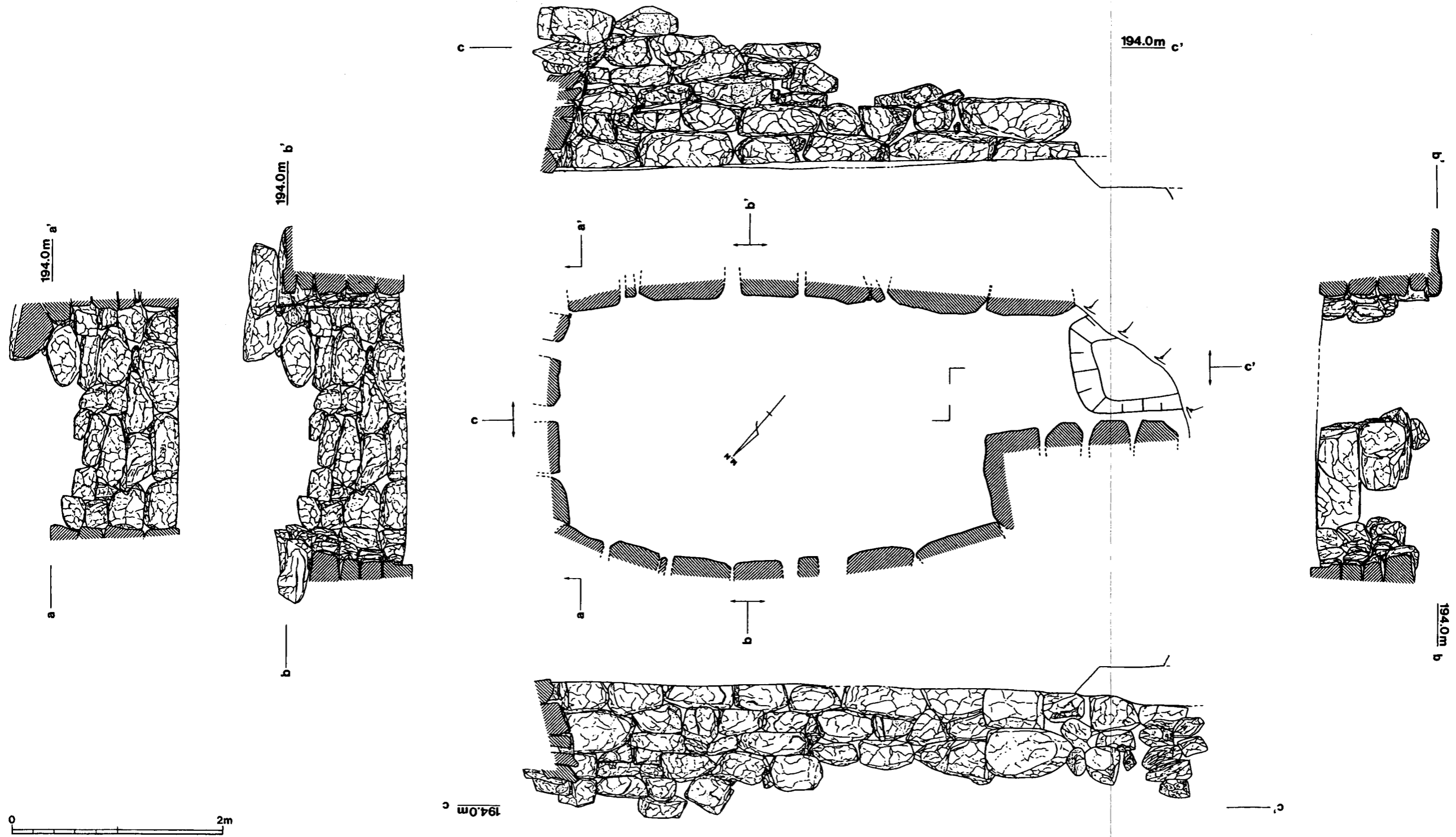


图 16 巨勢山 75号墳 横穴式石室 (S. = 1/40)

3. 羨道

羨道の左側壁は自然崩壊して遺存しないので、残された右側壁の観察を行うこととする。最も外側の石積みを見ると、縦にそろえて積んでいることから、ここが羨門にあたる可能性が高い。この場合、羨道長は2.1mとなる。羨道の幅は袖部で1.18m、中央で1.04mである。石材は、玄門と共有する左側壁を除き、第1列にやや大きな石材を使うものの、人頭大の石材を用いている。石積みの順序は玄室とは異なり、横方向に並べるような意図は観察できない。構築方法は、第1列の石材を並べた後、この羨門部分の石積みと袖部の石積みの間を埋めるように石材を配置する様子を観察できた。非常に稚拙な構造であるため、羨道に天井石を架けることは難しいうえに、露出してい

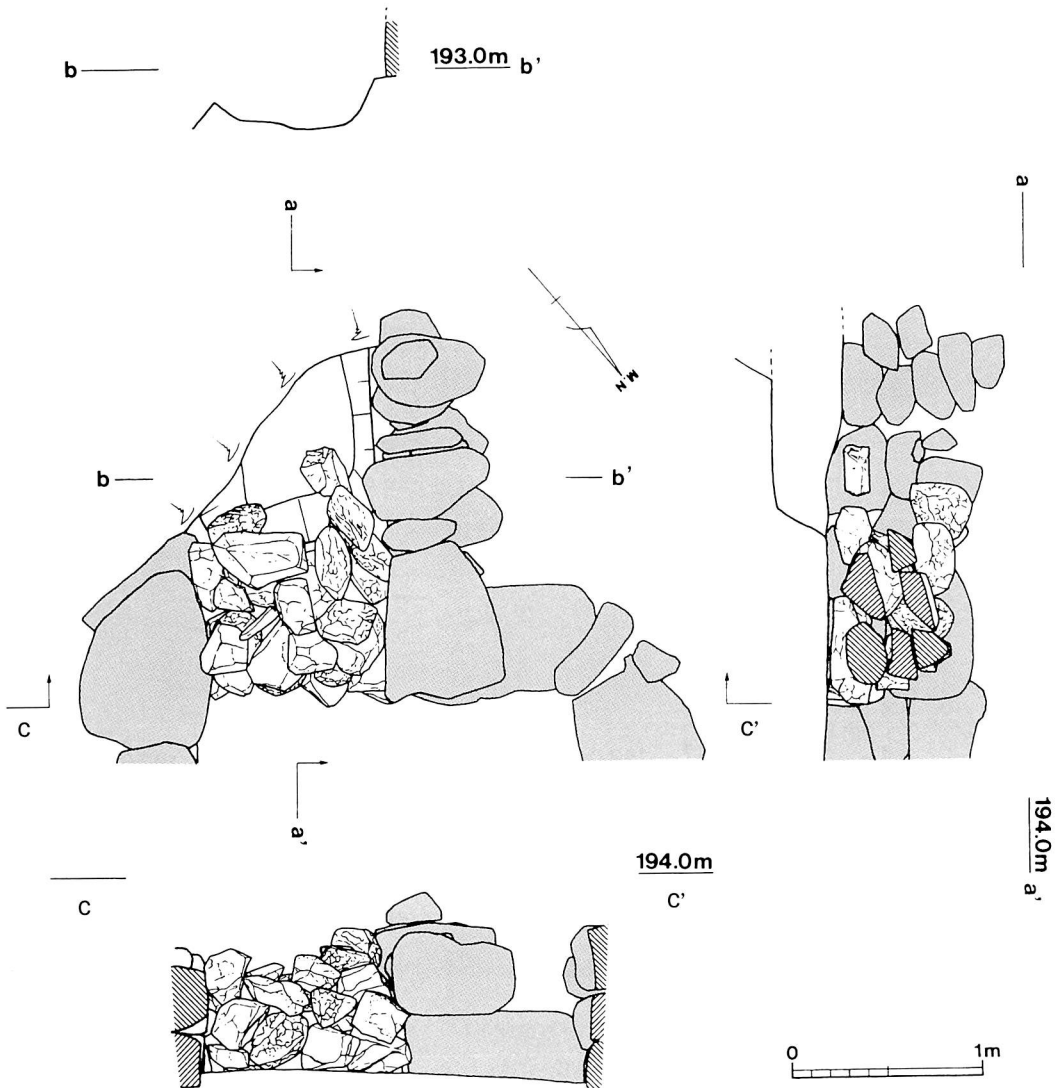


図17 巨勢山75号墳 石室 閉塞石 (S. = 1/40)

る場合通路としての強度も疑わしい。このことから、天井石を架けるのは袖部までで、人体を埋葬した後閉塞する際には、羨道は完全に土で埋めていたことを考えることができる。

また、羨道の床に浅い溝状の遺構を確認した。この遺構は崖によって切られているため、その方向は明らかにできないが、墓道として尾根や谷に沿って続いていた可能性が高い。巨勢山古墳群では、墓道を備えた古墳が比較的多く確認されている。

4. 閉塞施設

閉塞には人頭大の石材を積むことによって行われている(図17・18)。石積みは玄室側からみると左側壁側に1石多いために目路が傾いているものの、右から左方向への順できれいに並べて積み上げている。このことから、追葬のための閉塞石の積み直しがなく、棺の配置状況の他にもこの石室は単葬であり追葬は行われていないことを確認することができた。

また、玄室側の石積みがきれいにそろえられており、ほぼ垂直に積み上げられている。天井石を羨道部まで架け石積みだけで石室を閉塞した場合、閉塞点を頂点としてその両脇から斜面となる山状の石積みとなる。これを解消するためには、石積みによる閉塞作業と羨道部を土で埋める作業を同時に行われていたことを考えることができる。つまり、閉塞石を並べて積むと同時に、裏込めのように石の背後に土を詰め、閉塞石を固定しつつ積み上げていたことを想定できる。羨道部分の土層観察では、墓道状の遺構埋土が水平堆積をしており、したがって流入土ではなく故意に埋められたものと判断できる。このことから墳丘と共有する個所は、閉塞の際に墓道状遺構ごと丁寧な埋められた可能性が高い。つまり、石室の閉塞を終えたときには、墳丘で行われる作業はほぼ終了していたと考えられる。

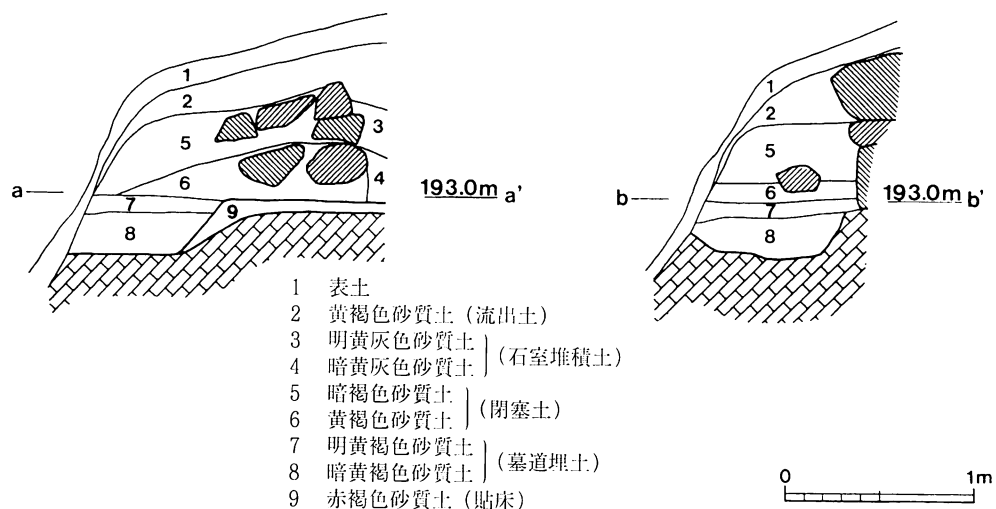


図18 巨勢山75号墳 石室 閉塞の状況 (S. = 1 / 40)

第4節 遺物出土状態

巨勢山75号墳の石室内から出土した遺物のうち、副葬時の状態を保っていたのは、後述する袖石部付近の一角から出土した馬具のみであって、その他の副葬品はすべて二次的に移動されており、多くは石室内に堆積した攪乱層から出土した。

ただし、奥壁付近の床面で鉄鎌(38-1・3・4・5・16・18)および刀子(38-26)が一まとまりになった状態で検出された(図19)。鉄鎌は、(38-1)・(38-3)・(38-5)が鋒を北に向け、(38-5)の鋒のすぐ北側には別の茎(38-18)の先端が接していた。そしてこの(38-5)と(38-1)上に、直交するように(38-4)が鋒を東に向けて検出された。また、(38-16)は、(38-3)の南側で、鋒を南に向けて出土した。刀子(38-26)は、これら鉄鎌から約30cmの間隔をあけて、より石室の主軸に近い位置で、鋒を南東に、刃部を北東に向けた状態で出土した。これらの遺物は、副葬時のおおよその位置を保っているのであろうが、このような、鉄鎌や刀子の鋒の方向がそろわない出土状態などから、やはり攪乱の影響を受けて若干移動していると考えられる。

石室内の堆積土中、12・14・15・17層からは、前述された獣骨のほか、中世の瓦器碗(23-13~15)・土師器皿(23-16~18)や、近世の土師質支脚とみられるもの(23-19)、図示していないが土師器焔炉や灯火具とみられるものなどが出土している。これらに混じって、古墳に関わる遺物も出土しており、図示したもののうち、土器では、須恵器杯蓋(21-1)・杯身(21-2)・(21-4)・短頸壺およびその蓋(21-5~7)・土師器把手付碗(22-10)は、同層出土遺物である。鉄器では、鉄鎌(38-9・15)・刀子(38-27)・刀(38-28)および鉄釘(39-1~6・8~11)が出土した。

これらの堆積層より下位の、18・19・20層には、古墳築造期より新しい遺物は混入しないようで、須恵器高杯(21-3)・鉄鎌(38-2・6~8・10~14・17・20~25)・銀製釵子(38-31)・銀製空玉(38-32)・鉄釘(39-7)が検出された。

また、須恵器器台(21-8)・土師器高杯(22-9)・同甕(22-12)は、これらの比較的下層から中世以降の堆積層までの各層から破片が出土し、それぞれが接合できた資料である。なお、図示していない出土土器に、古墳時代に属するとみられる土師器壺の肩部付近の破片がある。この他、鉄鎌(38-19)・ミニチュア鋤先(38-29・30)は、石室外に掻きだされた土に混じって出土したものである。

このような遺物の出土状態から、石室は、築造後数度にわたる攪乱を受けており、中世以降も盗掘目的で床面に及ぶ掘削が行われたと考えられる。なお、天井石などの石材が抜き取られた時期は明確ではないが、当地周辺では、近代においても、水田造成などに伴う石垣の材料として比較的大きな石室材が採取されており、本墳天井石などもそのような石材として利用された可能性もある。

さて、以上の攪乱層出土遺物に対して、玄室の袖石付近の床面上で馬具が一括で出土した。玄室の床面は、地山上に3~4cmの厚みで、赤褐色細砂の置土があり、遺物はこの直上に折り重なるよ

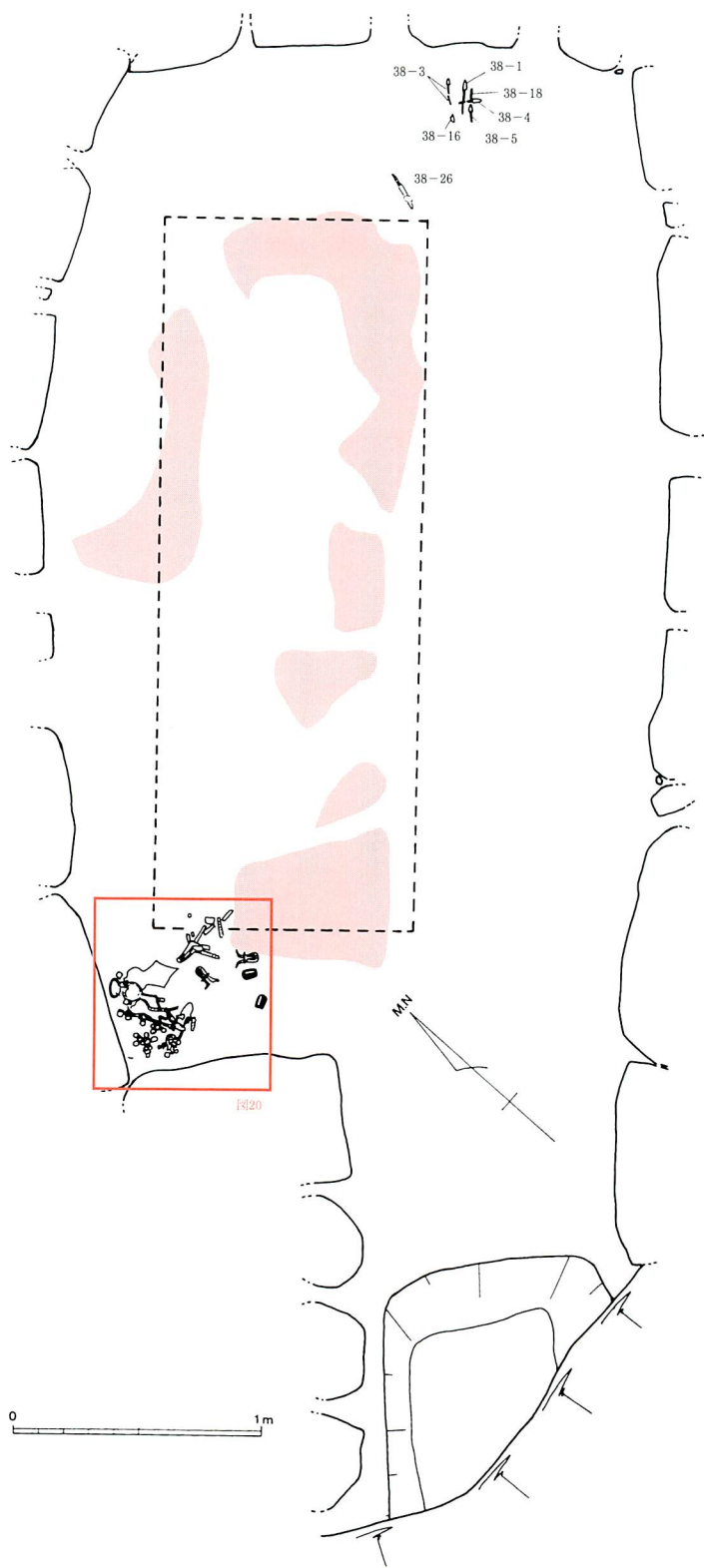


図19 巨勢山75号墳 石室床面の遺物 (S. = 1/30)

うにして出土した。玄室の袖石付近のコーナー部分に無造作に1セット分の馬具を置いたという状態であった。玄室の隅という副葬位置が幸いして、偶然にも盗掘による攪乱の手を免れて、副葬時の原位置を保った状態で出土したものである。その状態は、図20に示した。

最も上位で出土したのは轡であった。板状の鏡板(24-1・2)が近接して出土した。鏡板(24-1)は倒立した状態になっており、この2個体の鏡板を連結している銜は途中で折れていた。鏡板(24-1)につながる引手も同様に折れていたが、いずれもその先がその場に残っていたので、本来、完形で副葬されたものが、その後の劣化によって折れたことが判る。鏡板の立間には鉤金具が装着された状態で、鉤舌は鏡板に銹着しており、鉤金具の本体は折れていたが、それぞれ近辺で出土した。

轡の西側の、袖石との間に当たる地点で、辻金具は(35-29)~(36-34)の合計6個体分が出土した。辻金具は、中央の方形板・その四方の爪形の脚金具および責金具から成っており、それぞれは別造りのものである。しかし、(35-30)・(36-31)はそれらが使用時の状態のまま銹着しており、(36-32)と(36-33)は形は崩れていたが基本的にはその近辺に集まって出土した。ただし、(29)と(34)については、その近辺で出土した方形板・脚金具・責金具だけでは1個体に満たないものであった。しかし、図20の平面図に示したように、方形板から20cm程離れた地点から脚金具が出土しており、それらを補って接合できる状態であった。元々、共造りの製品ではないため、その接合の根拠は薄いですが、銹着した責金具の数が合致することや、銹着後に再び分離したものはその錯の状態から、それぞれ接合すると判断できたものである。

轡の周囲ではこのほかに、鏡板(24-1)につながる引手の下位から、具(37-35)が、刺金を開いた状態で出土した。また、図20には表現していないが、杏葉(26-3)の下に隠れて具(37-36)が置かれていた。

以上の辻金具および具は、轡の周囲から出土していることから、面繫に用いられたものと考えられよう。

杏葉は、一部轡に重なって、その下位から出土した。3個体が折り重なるように置かれていた。上位から(26-3)・(27-4)・(28-5)の順で検出された。杏葉(28-5)のみが裏面を上に向けていた。杏葉の立間には鉤金具が装着された状態で、その向きは、3個体とも石室の西側壁の方向を向いている。そしてそこには、環状雲珠の円環部(34-20)があった。雲珠の脚金具は別造りのもので、それぞればらばらになっていたが、いずれもこの円環部の周囲で6個体が出土した。脚金具にはほとんどの場合、責金具が銹着していた。

以上の杏葉と雲珠の出土状態から、尻繫となる革ベルトによって杏葉が雲珠に装着された状態であったことが想定できる。雲珠の円環部が、図20の立面図に示したように、不自然に起き上がった状態であるのは、副葬時においては、革ベルトに引っ張られて、立位状態であったのであろう。その後の土砂の堆積と有機質の腐食によって出土状態のようになったものと理解できる。

これらの北東部で鐙が出土した。木心鉄板張杓子形壺鐙で、壺部は多くの破片に分かれて周辺か

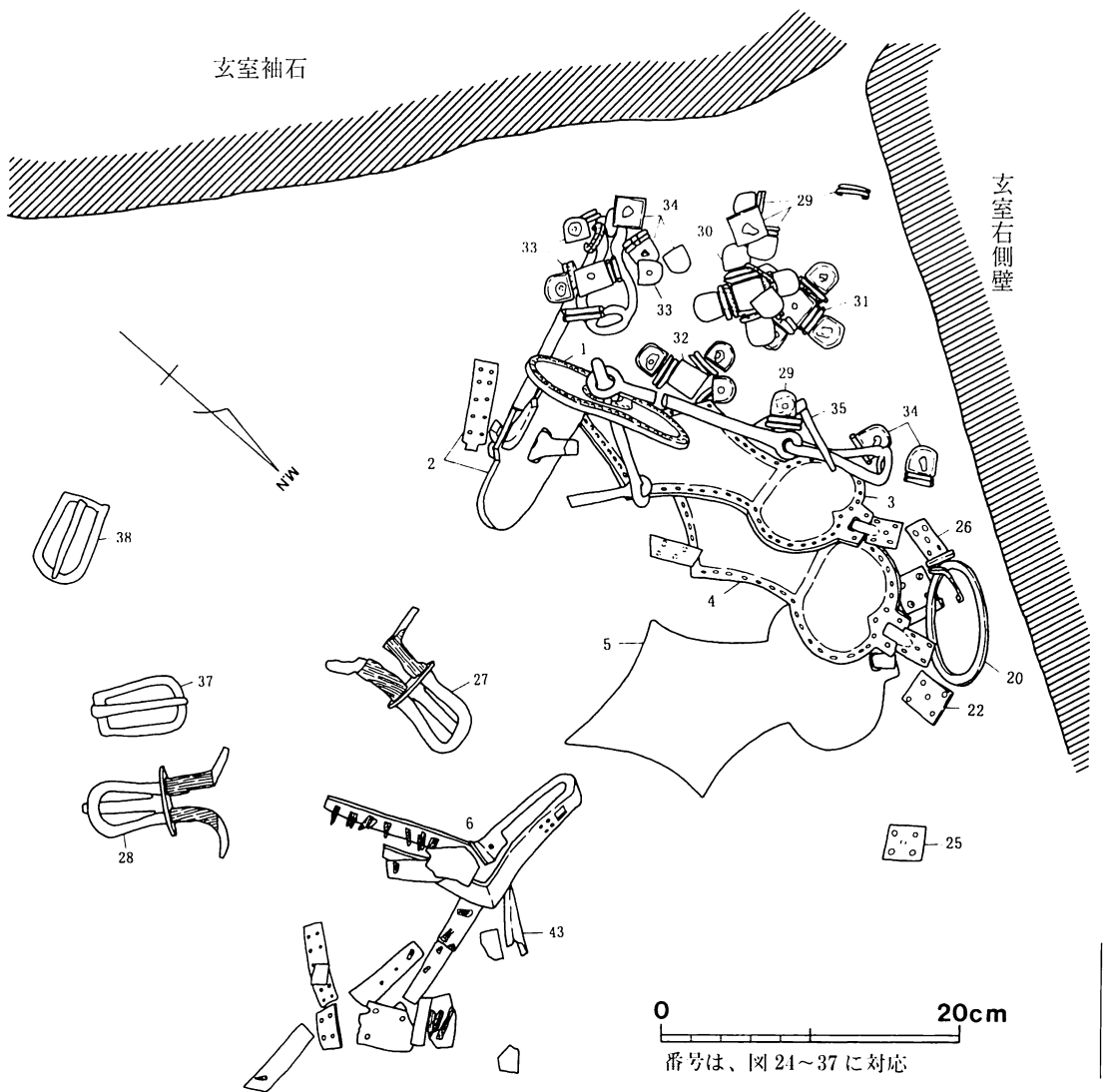
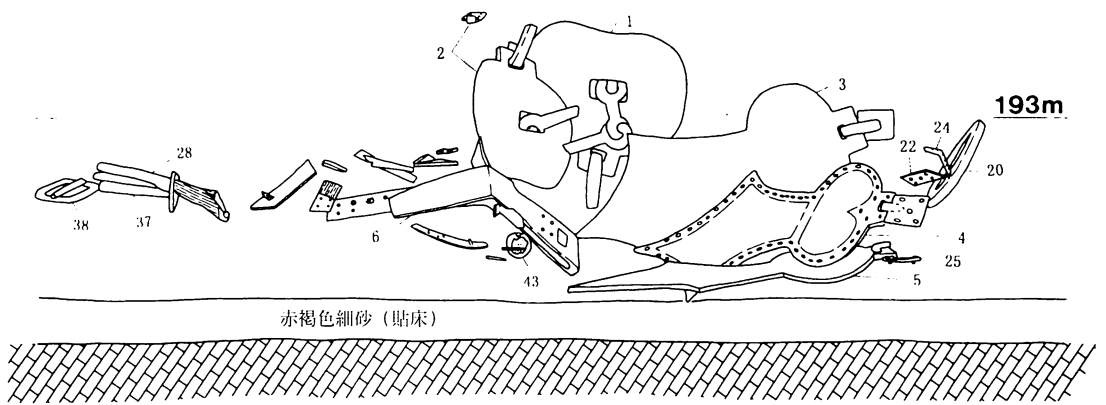


図 20 巨勢山 75号墳 玄室馬具出土状態 (S. = 1 / 5)

ら出土したが、柄部は遺存状態も良好で、一連のものとして検出された。ただ、調査時の不手際で、(29-7)として示した鐙柄部は、出土状態の凶化前に原位置を動いてしまったので、図20の平・立面図には示していない。その出土位置は、(35-28)・具(37-37)の東側で、鐙(29-6)からは約40cm離れた位置であった。出土層位についてもその他の馬具と同様で、一括資料であることは間違いない。

壺鐙(29-6)の下位から銅製飾金具(37-43)が出土した。この飾金具の内面には木質が残っているので、木の棒の先端に装着されていたことが想定できるが、その木の棒自体は、金具の内側に残る以外は残存していなかった。

壺鐙の南側で2個体の(35-27・28)が出土した。ここから袖石までの間には、具2個体が出土したのみで、空間がある。この部分に木製の鞍が置かれていたものと推測できる。鞍にかかわる痕跡は、このがあるのみで、その他の飾金具や漆膜の痕跡などまったく認められなかった。鞍は白木のそれが用いられたと想定できる。

さて、2個体出土したの座金具間の距離は、約18cmであった。はこれら以外にはなかったもので、通例のようにこれが鞍の後輪の磯に取付けられていたとすれば、それを元に鞍のおおよその大きさを推定することも可能かもしれない。また、2個体のの中間点と上記の雲珠との距離は、約42cmであった。と雲珠が革ベルトで繋がれたまま副葬されたと考えても無理のない数値と思えるが、の構造からベルトは脱着可能であるから、外されていた可能性もある。

の南側で出土した2個体の具(37-37・38)は、上記のようにこの部分に鞍の存在を想定すると、鞍の下に置かれていたことになる。そうであれば、鞍を馬に固定するための胸繫に用いられたか、鞍と鐙を連結するための鐙鞆に用いられたかのいずれかであろう。2個体という数からすれば後者である可能性が高いと考えるが、明確ではない。

第5節 出土遺物

1. 土器

巨勢山75号墳から出土した土器は、すべて石室内の攪乱層出土のもので、原位置を保ったものはなかった。図21・22には古墳時代のものを示し、図23は中世以降の遺物を掲げた。詳細は表4の土器観察表(89～93頁)に記したので、ここでは特徴的な事柄について記述する。

(21-1～8)は、須恵器である。(21-1)は杯蓋である。天井部のヘラケズリはその約1/2に及ぶ。天井部の内面には同心円状のあて具の痕跡が残っている(図版31)。

杯身(21-2)は、法量・胎土・焼成・色調からみて、この杯蓋(21-1)とセットになるものと思われる。ヘラケズリは底部の全体に及ぶが、削り方自体が粗く、丁寧さにかける印象を受ける。底部

内面中央部に同心円状のあて具痕跡が残っている（図版31）。

(21-3)は、高杯の杯部で、杯部は口径の割に比較的深い。杯部全体の1/5程の破片から復原図化した。杯底部と口縁部の境界には極めて鈍い稜になっているつまみ出し凸帯が巡っているが、それ以外の波状文などの文様は施されていない。

(21-4)の は、1/2以下の残存部分から復原図化した。頸部は体部最大径の割りに比較的太い。頸部外面は櫛描波状文が施され、口縁部外面は1条のヘラ描波状文で飾られている。体部は比較的明瞭に肩部をつくっている。底部はヘラケズリによって丸く成形し、その後、比較的丁寧なヨコナデによって調整している。肩部には、2条の凹線文が巡るが、極浅いもので、凹線の上辺・下辺とも極めて不明瞭である。この凹線の直下で、体部中央に当たる位置は櫛描列点文の文様帯がある。検出した破片は円孔のない部分であったが、おそらくこの文様帯の上から円孔を穿つものであろう。

また、器壁には、黒色釉および緑色釉がみられる。頸部の外面にみられる黒色釉は、体部の一部にも同様の色調のものがあるが、肩部にはみられない。頸部と体部の境界をもって明確に分かれているので、頸部外面の黒色釉は意識的に施された可能性も考えられる。なお、内面には、頸部の上半および体部の底に緑色釉がみられるが、その位置は、降灰などの付着しやすい位置なので、自然釉の可能性が高いだろう。

(21-5~7)は短頸壺およびその蓋である。蓋(21-5)は、3/4以上の破片が残っていたものであるが、残存部分からも、焼成までの間に歪があったことが明らかで、口縁部の平面形が円にならない。天井部はやや扁平で、ほぼ全面にヘラケズリが及んでいる。口縁部は、本来的にはほぼ垂直に下方にのびるものと思われるが、歪が生じているために、実測図の断面に示したようにやや内側に入っている。口縁端部は面をなし、端面の中央は強いヨコナデによって窪んでいる。

短頸壺のうち、(21-6)は全体の2/3弱からの、(21-7)は口縁部の僅かな破片からの反転復原をしたものである。(21-7)は残存部分自体が少ないが、同一型式とみなせるものであろう。比較的全体の形状が明らかな(21-6)によって、形態の特徴をみると、口縁部は、わずかに内傾して直線的に立つ短いものである。体部はその上位に肩部を持ち、その張りはやや強い。底部の外面は比較的丁寧なヘラケズリによって形成されている。体部の内外面および底部内面は、ヨコナデで仕上げられている。

(22-8)は器台脚部である。杯部を全く欠損しており、その破片も検出されていない。残存した脚部はばらばらに割れていたが、接合することによってほぼ脚部全体を復原することができた。

脚部は、直線的に裾へ広がっている。高さの割に裾部径が比較的小さいので、ややスリムな印象を受ける。脚部の成形および調整は、まず、全体に横方向のカキメを施している。この後、3条のつまみ出し凸帯によって、柱状部を4段に画している。さらに、柱状部と裾部の境界には別のつまみ出し凸帯を巡らしている。柱状部の外面はこの後、各段を櫛描波状文で飾り、裾部外面にはヘラ

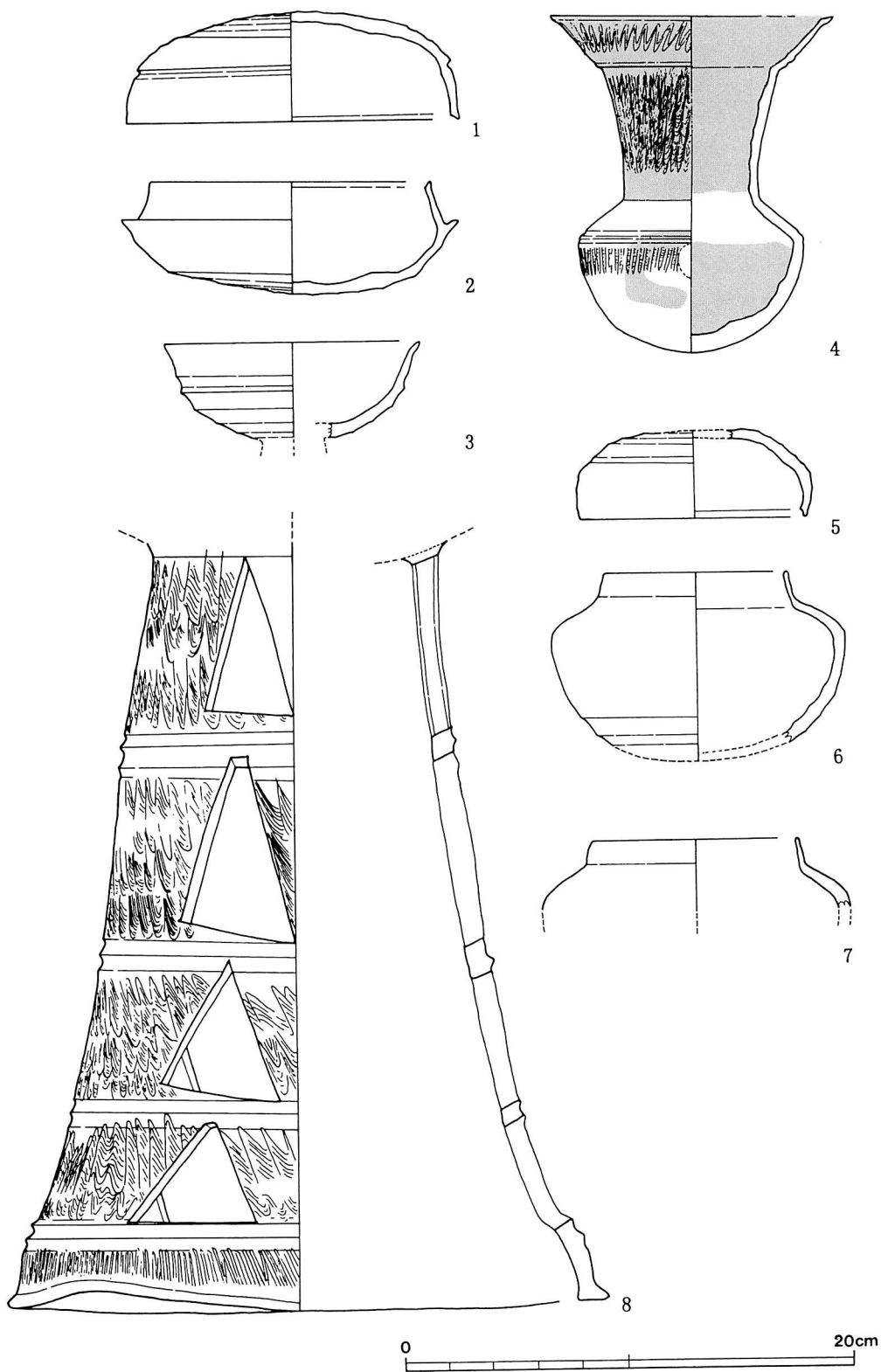


図21 巨勢山75号墳 出土土器(その1) (S. = 1/3)

描波状文を施している。そして柱状部の各段に、三角形スカシを3方に配している。このスカシの側面を観察すると、土器の内面側に粘土がはみ出した様子を見ることができる。この痕跡から、スカシは外面から刀子などの工具を当てて切り取ったものとみられる。ただしその粘土のはみ出しは、最上段の2箇所のスカシについては面取り風に処理をして、これを削り取っている。

裾端部は、強いヨコナデによって外方につまみ出されて肥厚して裾端面の幅が厚くなっている。立位状態での安定感が増しているが、裾部付近に焼成前の歪みが生じており、このため、実測図にも示したように、一部が浮き上がって地面に接していない箇所がある。

(22-9~12)は土師器である。なお、図示していないが、石室内堆積層出土の土師器として、これらの他、古墳時代に属するとみられる壺の肩部付近の破片がある。

(22-9)は、土師器高杯である。杯部・脚部とも一部を欠くが、全体の9割ほどが残存しており、完形近くに復原することができた。比較的深い杯部に、長脚の脚部がつく。脚部には、1段の方形スカシが4方に配されている。杯部中位に、つまみ出し凸帯を巡らしているが、杯底部との境界に

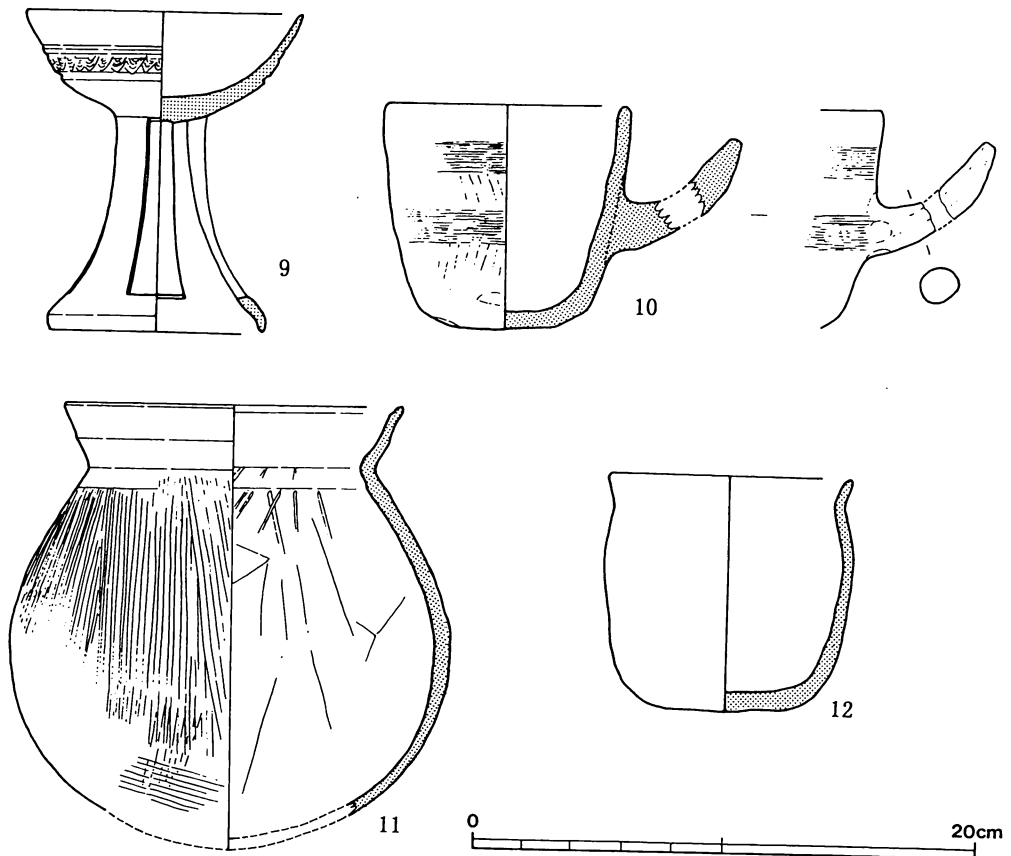


図22 巨勢山75号墳 出土土器(その2) (S. = 1/3)

も、やや弱いながら同様の手法で稜をつけている。さらにこの凸帯間に櫛描波状文を施して装飾している。

このような製作の手法および形態は、須恵器高杯と同様のものである。しかし、その色調は赤褐色を呈し、土器自体も軟質で水にも溶け出すような現状である。須恵器の製作工程によって作られたもので、焼成のみが土師器と同様に成されたものと考えられるものである。

(22-10)は、土師器把手付椀である。全体の1/4程の破片から復原した。平底の底部から外上方にのびる体部は、直線的に口縁部に至る。把手は中途で欠損しており、先端部との接点をもたないが、図化状態より極端に長くなるものではないだろう。

(22-11・12)は、土師器甕である。(22-11)は、同一個体とみられる破片を集めると全体の1/2程になると思われるが、実際に接合復原できたのは1/4以下である。体部は球形を呈し、その最大径もほぼ中央にある。外面を縦方向のハケで成形し、内面は、ヘラケズリによって器壁を掻き取っている。しかしその仕上げは粗く、器壁も薄くない。口縁部は、外上方に開く。口縁端部は強いヨコナデによって段を成している。

(22-12)は、全体の2/3程度が残存している。平底の底部から、体部は直線的に上方に立ち上がる。口縁部は外上方に屈曲して広がる、極短いものである。全体を指頭による押圧によって形成している。

以上のほか、石室内堆積土の12・14・15・17層から、中・近世の遺物が出土したので、図23に示した。(23-13~15)は瓦器椀である。(23-13)・(23-14)の口縁部は、いずれも、僅かに外反して、端部は内傾する面をなす。端面には浅い凹線が巡っている。外面の口縁部付近には粗いヘラミガキが施されている。底部には、逆三角形の高台を貼り付けているが、(23-13)は底部がそれより突出して接地している。(23-15)は、和泉型瓦器椀で、口縁端部は丸く収め、高台には断面が半円形に近いものを粗雑に貼り付けている。

(23-16~18)は小形の土師皿である。口縁部が内彎状に丸みをもって立ち上がるもの(23-16・17)と外上方に直線的に立ち上がるもの(23-18)がある。

(23-19)は、器形も明確でないが、残存部分の口縁部と下端部と思しき部分が円弧を描くので、回転復元した。全体の1/8が残存していた。下端径に対して口縁部径が小さいので安定感がある。内面全体に煤が付着しているので、この上に鍋などを据えて使用する支脚と考えられよう。外面の2箇所に、墨書したとみられる直線文が残っている。元は器壁を完周したものである。

さて、以上に述べた出土土器の編年的な位置については、まず、図21・22に示した古墳時代のもののうち、須恵器杯身(21-1)・同杯蓋(21-2)は、上に述べた特徴から、陶邑MT15型式に相当するものである。須恵器については、この他、高杯(21-3)・(21-4)・器台(21-8)もまた当該期に当たるものであるし、単体では編年的位置づけのやや難しい、短頸壺およびその蓋(21-5~7)も該期のものとみられる。また、土師器高杯(22-9)は、須恵器の製作技法で造られている。

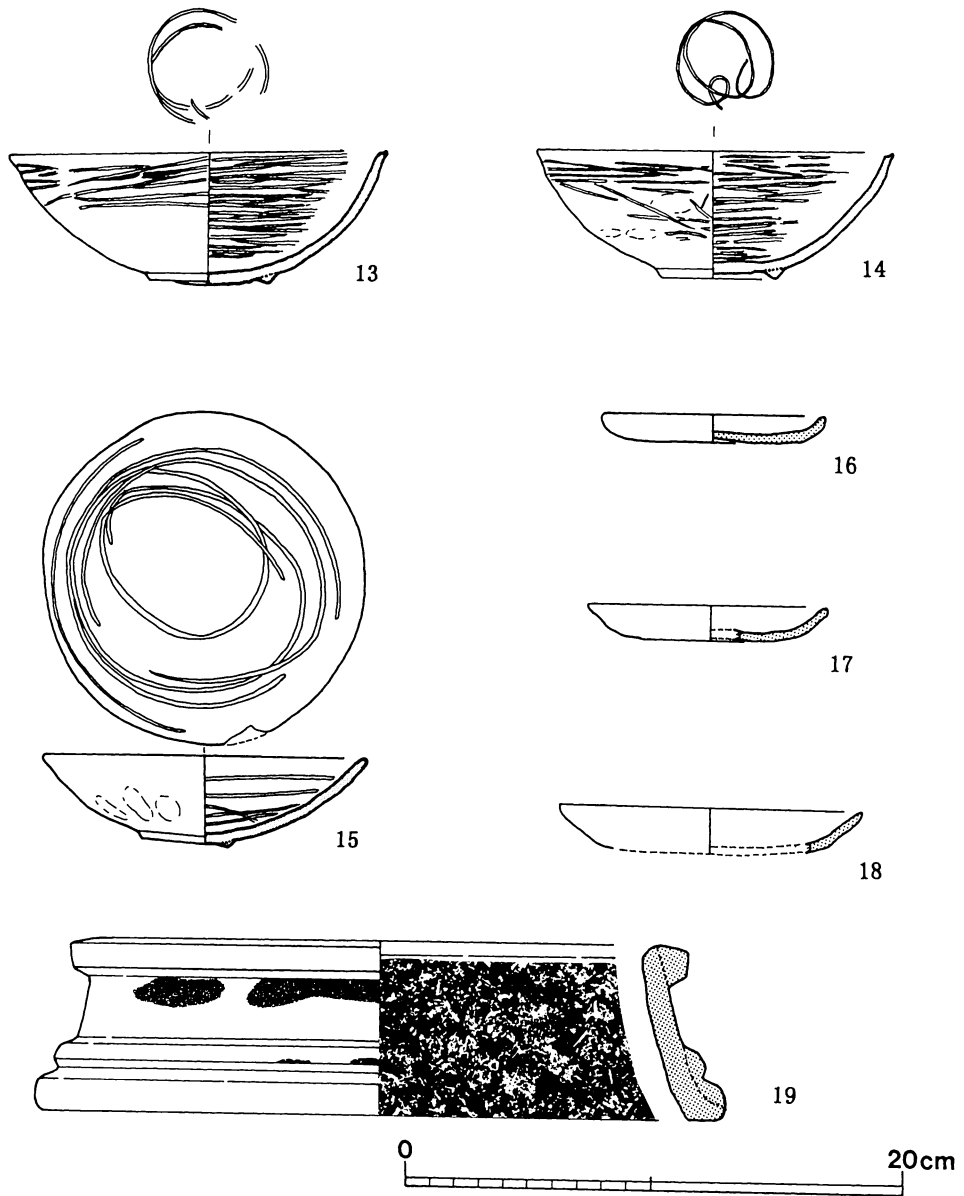


図23 巨勢山75号墳 出土土器(その3) (S. = 1/3)

そしてそれを須恵器編年にあてはめてみれば、やはりMT15型式に相当する。土師器把手付椀(22-10)や甕(22-11・12)は、個々の型式編年自体難しい場合があるが、いずれも近隣遺跡での出土例の共伴関係を見れば、当該期のものと考えても矛盾はない。

このようにみると、巨勢山75号墳出土土器のうち古墳時代に属するものは、MT15型式期の、単一時期のものに限られるとみなすことができる。

これらに対して、図23に掲げた土器は、古墳の攪乱時期または再利用の時期などを示すものである。瓦器椀は、『十六面・薬王寺遺跡』(松本1988)で瓦器椀(23-13・14)および小形瓦器椀(23-

15)と分類されたものである。同書で提示された編年に照らせば、(23-13・14)は、12世紀後葉から13世紀中葉の「井戸-20期」に相当する。また、小形瓦器椀は、13世紀後葉から14世紀前葉に盛行するとされ、(23-13・14)と(23-15)には時期差がある。小形の土師器皿(23-16~18)は、時期比定が難しいが、やはり、12世紀から14世紀と考えても矛盾はない。(23-19)の支脚と考えたものは、類例に乏しくさらに時期比定が困難である。上の瓦器椀の時期には併行しないと思われ、近世のものであろうか。

このように、石室内堆積層の出土遺物については、時期差が認められ、本墳に対する攪乱が数度にわたって行われたことが判る。

2. 馬具

図24~37に出土馬具の実測図を示した。出土遺物は、銹化による表面の劣化の著しいものもあったが、肉眼およびX線写真によって観察した。

また、特に雲珠脚金具や辻金具の裏面には革などの有機質の痕跡がみられ、それが明瞭に残っている場合も少なくなかった。その残存範囲などは図中に示すべきとの考えもあるが、雲珠や辻金具の裏面には革などの痕跡が残るのはむしろ当然のことであるので、本書では煩雑になることを避けてそのような有機質の範囲は図に表現していない。また、雲珠などの脚金具を装飾する金銅板は、鉄地板の裏面で金銅板の端を折返して留めているが、この有機質の痕跡のために、その折返し部分や、鉾脚そのものも観察できない場合もしばしばであった。このような観察できない部分については、推定ラインを破線で補った。

残存した有機質としてはこのほか、鐙などに残る木質および鐙表面の黒漆の痕跡があった。木質については、使用材の木取りの方法が判る場合があるので、残存範囲を示した上で、木目方向を示した。黒漆に関しては、塗布されている面に網目をかけて示した。

また、後述するように、鏡板・杏葉・雲珠および辻金具の脚金具は鉄地板に金銅装が施され、そのそれぞれに用いられる鉾の鉾頭や、雲珠などの責金具には銀箔が被せられている。それらは、実測図中の断面図にやや模式的に細い線で示し、金銅装・銀装の区別は、本文中で説明した。

個別具体的な各部の数値は、本文中に記述したほか、一部計測表を設けたものもある。また各部の名称は、最も一般的と思われるものを採用した。

なお、以下に報告する出土馬具のうち、轡・杏葉・雲珠・鞍・辻金具のうち2個体(34-22・23)・銅製飾金具については既に保存処理を施しており、残りの遺物についても順次処理を行っていく予定である。

a. 金銅装楕円形鏡板付轡(図24・25) 図24に鏡板それぞれの実測図を提示し、図25にそれが組み合った状態の轡を復元的に示した。すでに「遺物出土状態」の項で触れたように、鏡板(24-1)は、銜・引手および鉤金具と連結した状態であった。ただし銜の鉄棒は途中で折れていた。鏡板

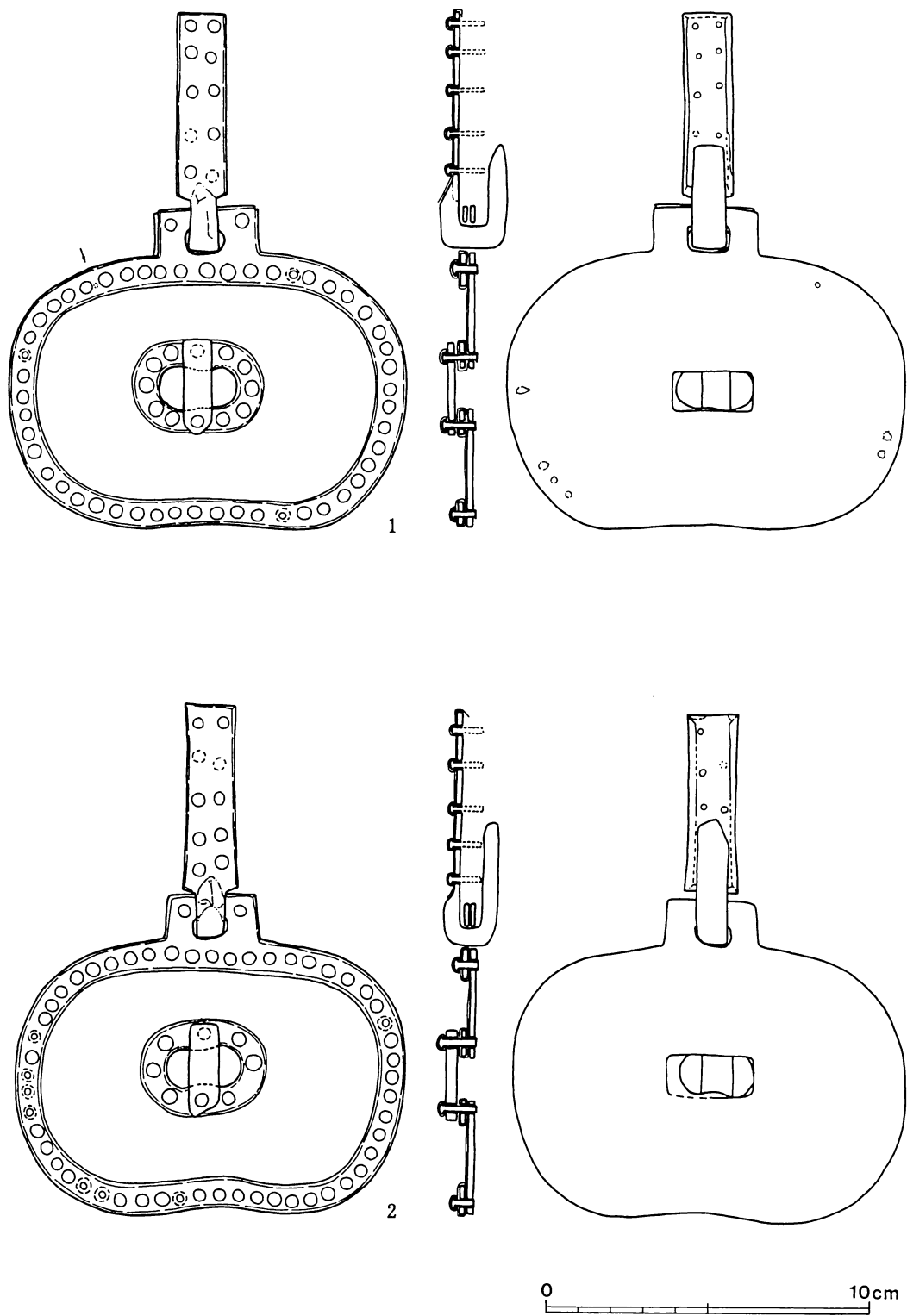
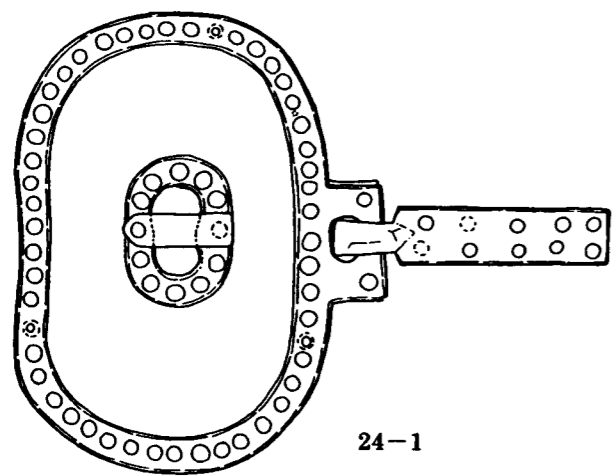
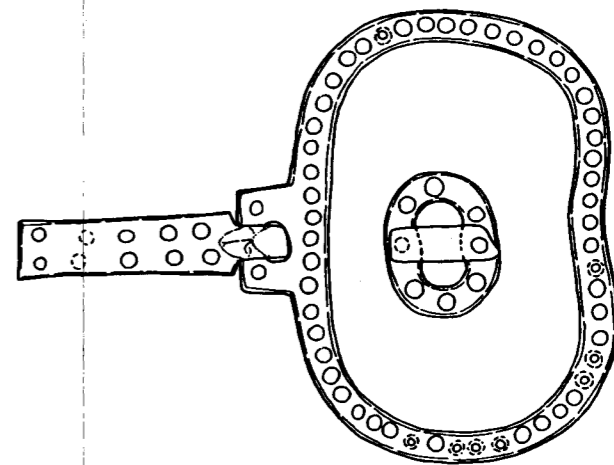
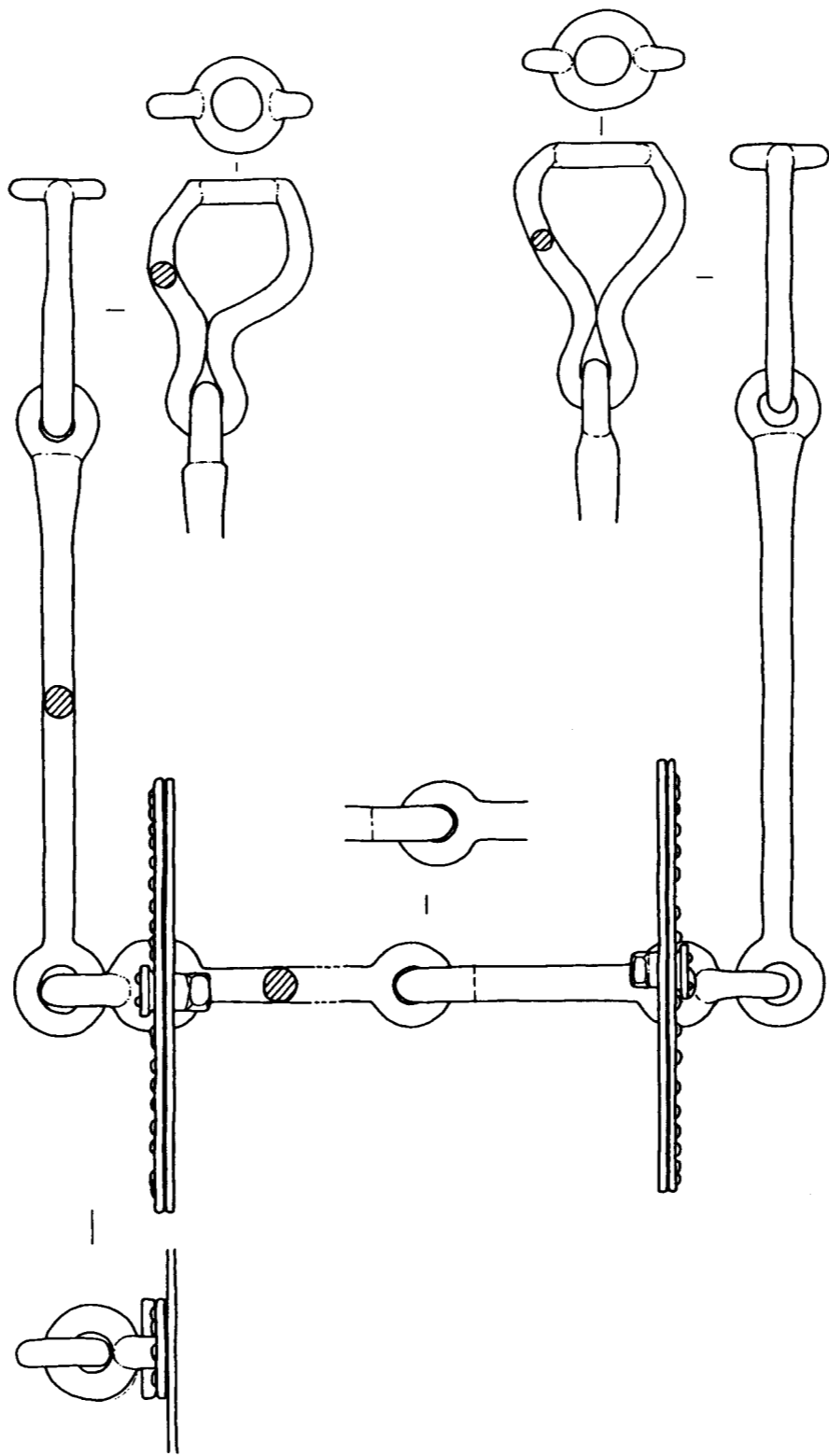


图 24 巨勢山 75 号墳 玄室出土馬具（鏡板）（S. = 1 / 2）



24-1



24-2

0 10cm

图 25 巨勢山 75号墳 玄室出土馬具 (轡) (S. = 1 / 2)

(24-2)も、同様に、銜・引手・鉤金具と連結した状態で出土し、銜の喰金は、他方の喰金と連結していた。この先は、(24-1)に連結している銜の鉄棒に本来は接合するはずであるが、これとの接点はなかった。酸化による腐食によって減っていると考えられる。図25は、残存した銜の長さを参考にして復原して描いた。また、引手はいずれも別造りの引手壺が連結した状態で出土した。

鏡板(24-1・2)はいずれも、下縁部が緩やかに挟り込まれた楕円形を呈する。挟りこみの度合いは、(24-2)の方が深く、(24-1)の方がより直線に近い。いずれも上辺に方形の立聞が取り付く。

(24-1)は、鏡板下端から立聞下端までの長さ(鏡板本体の縦方向長さ)8.5cmを測り、横方向の幅は12.3cmを測る。この本体部分に縦方向長さ2.3cm、横方向幅3.1cmの立聞が取り付く。(24-2)は、同じく長さ8.4cm、幅12.1cmの本体部分に、長さ1.5cm、幅2.8cmの立聞が取り付く。

いずれも本体部分と立聞は、一枚の鉄板から切り出して形づくるものである。立聞の中央には、鉤舌を通すために、それぞれ縦0.8cm横1.2cm程度の不整長方形の孔を穿っている。また、鏡板本体の中央に、銜通し孔として、鉄地板に、(24-1)は縦1.2cm、横2.5cmの、(24-2)は縦1.8cm、横2.6cmの方形の孔を穿つ。ただし、外面では、縁金具を取り付けるために、後述するように、外観上、銜通し孔は上下が内彎した瓢形を呈するとみられる。

地板の鉄板は厚さ約2mmで、この鉄地板の上に、まず地板と同様の形状に切った金銅板を被せている。この上から、これとは別に鉄地板に金銅板を張ってつくった厚さ約2mm程の縁金具を、鏡板の外周および銜通し孔の周囲に被せて、鋳を撃打して留めている。このとき、縁金具に張った金銅板の端部は、縁金具の裏面に折返し、縁金具と鉄地板に張った金銅板との間に挟むことで処理している。

縁金具の幅は0.9cm程度である。鋳は、頭部に銀を被せたものである。鋳頭径は約4mmを測る。鋳の数は、外周の縁金具部分に、(24-1)は52個、(24-2)は55個を用いる。なお、(24-1)の図示状態の左上部に、矢印および破線で示した位置に、縁金具に貫通しない、鉄地板に穿たれた小孔がX線写真によって観察された。鏡板の製作過程またはその方法を示唆するものである。

銜通し孔の周囲の縁金具の形状は、外周は、実測図に示したような楕円形であるが、内周のラインは、錆膨れの影響と銜通し孔に渡された鉄棒のために肉眼観察では判然としない。X線写真によれば、内周の上下線がやや内側に湾曲して狭まっており、瓢形の形状が看取できる。

また、この銜通し孔周囲の縁金具には、錆のために観察が難しいが、(24-1)は12個、(24-2)は8個の鋳が用いられているとみられる。

なお、鏡板の外周および銜通し孔周囲に打たれた鋳に関しては、鏡板の裏面では、貫通した鋳脚を基本的には潰しているのので、これを観察することはできないが、(24-1)では6箇所であらゆる鋳脚の先端が完全に潰し切れていない状況を認めることができた。

鉤金具は、いずれも長さ5.8cm、幅1.5cmの長方形板である本体部分の先端に、「J」字形に屈曲させた鉄棒を鉤舌として鍛接している。この鉤舌を鏡板立聞の孔に通して、鏡板と面繫とを連結さ

せる。鉤金具の本体部分である長方形板は、鉄地板に金銅板を被せ、鉄地板の裏面側で金銅板の端約2～3mmを折り曲げて留めている。さらにこの金銅板の上から銀被鉸を打ち、面繫となる革ベルトと共に留めるものである。鉸は合計10個を2列に配列して打っている。鉸頭径は約4mmである。

図25には、轡が組み合った状態を示した。

銜は2連式である。銜先環は、2重になっており、内側の輪に直交して外側の輪が鍛接されている。鏡板との連結は、まず内側の環に鉄棒を通し、この鉄棒を鏡板の外側で、銜通し孔周囲の縁金の上から鉸留して固定している。引手とは外側の環で連結している。

銜の鉄棒の断面形は径10mmの円形で、喰金外径は2.4cm、銜先環の外径は、内側の環2.5～2.7cm、外側の環2.6cmを測る。銜の、環状部分を含めた全長は、鏡板(24-2)に連結する方が11.2cmであるが、他方は前記のように途中で欠損しているため、長さが判らない。残存部分を参考にして考えると、銜先環の内側の環で鏡板と連結した場合、両鏡板間に約13cm程の空間ができるものとみられる。

銜先環と鏡板の連結部分は、出土時は、銜先環や引手元環などが錆化のために一塊になっていた程である。取り上げ後、錆を落とし保存処理を施したが、銜先環の内側の環を通して鏡板と銜とを連結する鉄棒については、十分に観察できない状態である。都合2個体あるこの鉄棒をそれぞれ比較し、相互補完的に見ると、概ね長さ3.0cm、幅1.0cm、厚み0.5cm程のものと判断できる。その平面的な形状は単に長方形を呈するのではなく、下端部を斜めにカットしてやや装飾性を持たせているようである。また、この鉄棒を固定するための鉸は、肉眼は元よりX線写真によっても観察し難い。下端部の鉸はかろうじて見えるが上端はよく判らない。おそらく上下の2鉸によって固定されているものと思われ、図25には破線で補って示している。

引手は、銜先環の外側の環に連結する。他方の端部の円環には別造りの引手壺が取り付けられている。引手の、円環部を含めた長さは、それぞれ18.7cm・18.8cmで、ほぼ同寸法のものである。鉄棒部分は断面の径約0.9cmの円形である。引手壺に連結する円環側の端部近くで太くなり、最大径1.4cmを測る。鉄棒と両端部に付く円環との接合は定かではないが、特に引手壺に連結する側の円環は、このような鉄棒の先端部の太さの状況から、別に造った円環を鍛接しているとみられる。なお、鉄棒両端の円環の方向は、互いに直交するのではなく、同一の方向を向く。

引手壺は、断面径0.8cm程の鉄棒を屈曲させて瓢形に造りだしている。先端部は、この鉄棒とは別に造った、手綱を取り付けるための円環を鍛接している。引手壺の全長は、図25で左側に示したものは7.3cm、右側に示したものは7.6cmである。最大幅は、同じく左側は4.6cm、右側は4.9cmを測る。先端部の円環は、いずれも外径約2.8cmである。わずかな寸法の違いがあるが、基本的には同一規格に基づく製作である。

なお、銜と引手の連結に際して、上述したような2重の銜先環を用いる例は、管見に触れた限りでは、鑣轡以外では、金銅装楯円形鏡板に連結するものとして長野県北本城古墳出土例(小林1989)

があり、f字鏡板に連結するものとして、愛知県大須二子山古墳出土例（伊藤1978・寺西1983）・静岡県石ノ形古墳出土例（白澤編1999）が知られている。

b. 鉄地金銅装剣菱形杏葉(図26～28) (26-3)～(28-5)は、鉄地金銅装剣菱形杏葉で、基本的に同工・同大の製品である。また、いずれも立聞孔に鉤金具が装着された状態で出土した。

杏葉は、まず、厚さ約2mmの鉄地板をつくる。鉄地板は、楕円部・剣菱部および方形の立聞を一枚の鉄板から切り出して形づくっている。立聞の下辺部中央付近には立聞孔を穿つ。縁金具は、これとは別に、厚さ約2mmのものをつくっている。楕円部と剣菱部の境界部にあたる幅約8mmのブリッジ状の鉄棒を共造りにし、楕円部の上辺は逆三角形の突出が垂下される形態の縁金具である。鉄地板の上にこの縁金具を載せ、さらにその上から、金銅板で全体を覆っている。このとき外周や立聞孔の部分で余分な金銅板の端を、縁金具の裏面に巻き込んで地板と縁金具の間に挟み、縁金具部分の上面から銀被鋏を繫打して、これらを留めるものである。このとき、杏葉裏面に貫通した鋏脚は鏡板と同様に潰すが、総じて鏡板に比べてその処理が甘く、(26-3)で8箇所、(27-4)で33箇所、(28-5)で17箇所、その痕跡を肉眼でも観察できた。

また、このように、鉄地板と縁金具を一体のものとして一枚の金銅板で覆う構造は、地板と縁金具に別々に金銅装を施している鏡板とは異なっており、注意される。

鉤金具は、2.5cm四方の鉄地板を本体とする。この本体部分の下半部中央に、「U」字形に屈曲させた幅約1.0cm、厚み約0.4cmの鉄棒の一端を鍛接して鉤舌としている。本体の方形板は鉄地板の上に金銅板を載せ、裏面で金銅板の端約2mmを折返して固定している。この上から、銀被鋏を打って、尻繫となる革ベルトと共に留める。鋏の数は方形板の四隅および中央に配される計5鋏である。方形板の上から被せる金銅板は、その下端が鉤舌の外面上部の一部に及んでいるのであろうが、銹化のためによく判らない。

(26-3)は、立聞上端から剣菱部先端までの長さ23.3cm、楕円部幅10.4cm、剣菱部幅12.5cm、立聞孔は縦方向長さ0.5cm、横方向幅1.0cm、縁金具は立聞部分以外で幅0.8～1.0cm程度を、それぞれ測る。縁金具部分の上面から打たれている鋏の数は、合計67個である。

(27-4)は、立聞上端から剣菱部先端までの長さ22.7cm、楕円部幅10.5cm、剣菱部幅12.2cm、立聞孔は縦方向長さ0.6cm、横方向幅1.0cm、縁金具は立聞部分以外で幅0.8～1.0cm程度を、それぞれ測る。縁金具部分の上面から打たれている鋏の数は、合計61個である。

(28-5)は、立聞上端から剣菱部先端までの長さ23.0cm、楕円部幅10.6cm、剣菱部幅12.3cm、立聞孔は縦方向長さ0.8cm、横方向幅1.2cm、縁金具は立聞部分以外で幅0.8～1.0cm程度を、それぞれ測る。縁金具部分の上面から打たれている鋏の数は、合計68個である。

なお、この(28-5)の立聞は、正置したときの左側辺が右側辺に比べて約4mm長い。これは製作時の不手際で、このため縁金具を載せたときに、地板と縁金具が完全には重なり合わない。多少縁金具をずらすことで、齟齬を解消しようとしているが、表面から見たときに最大2mmが、鉄地板が

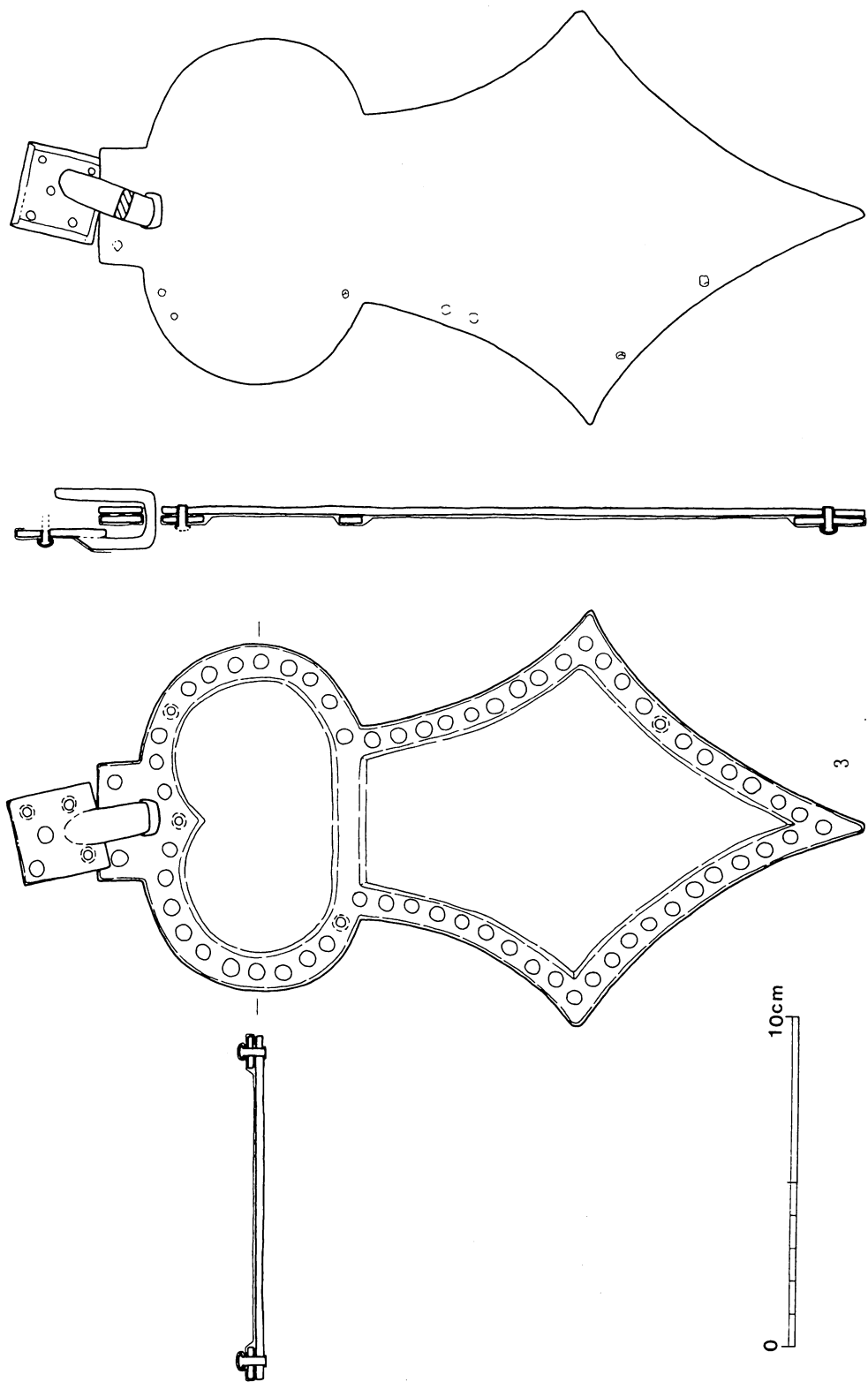


图26 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その1）（S. = 1/2）

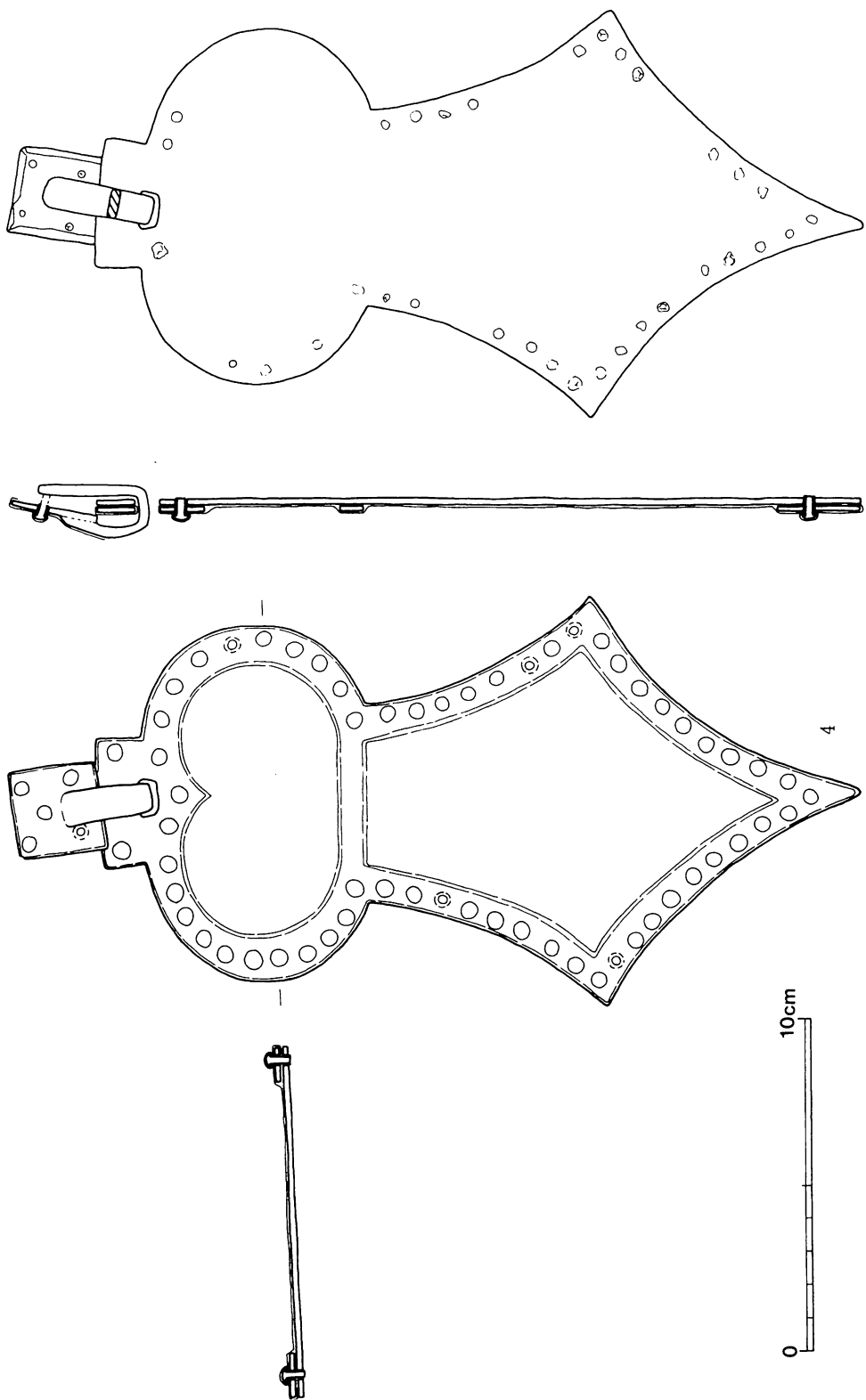


图 27 巨勢山 75 号墳 玄室出土馬具 (杏葉その 2) (S. = 1 / 2)

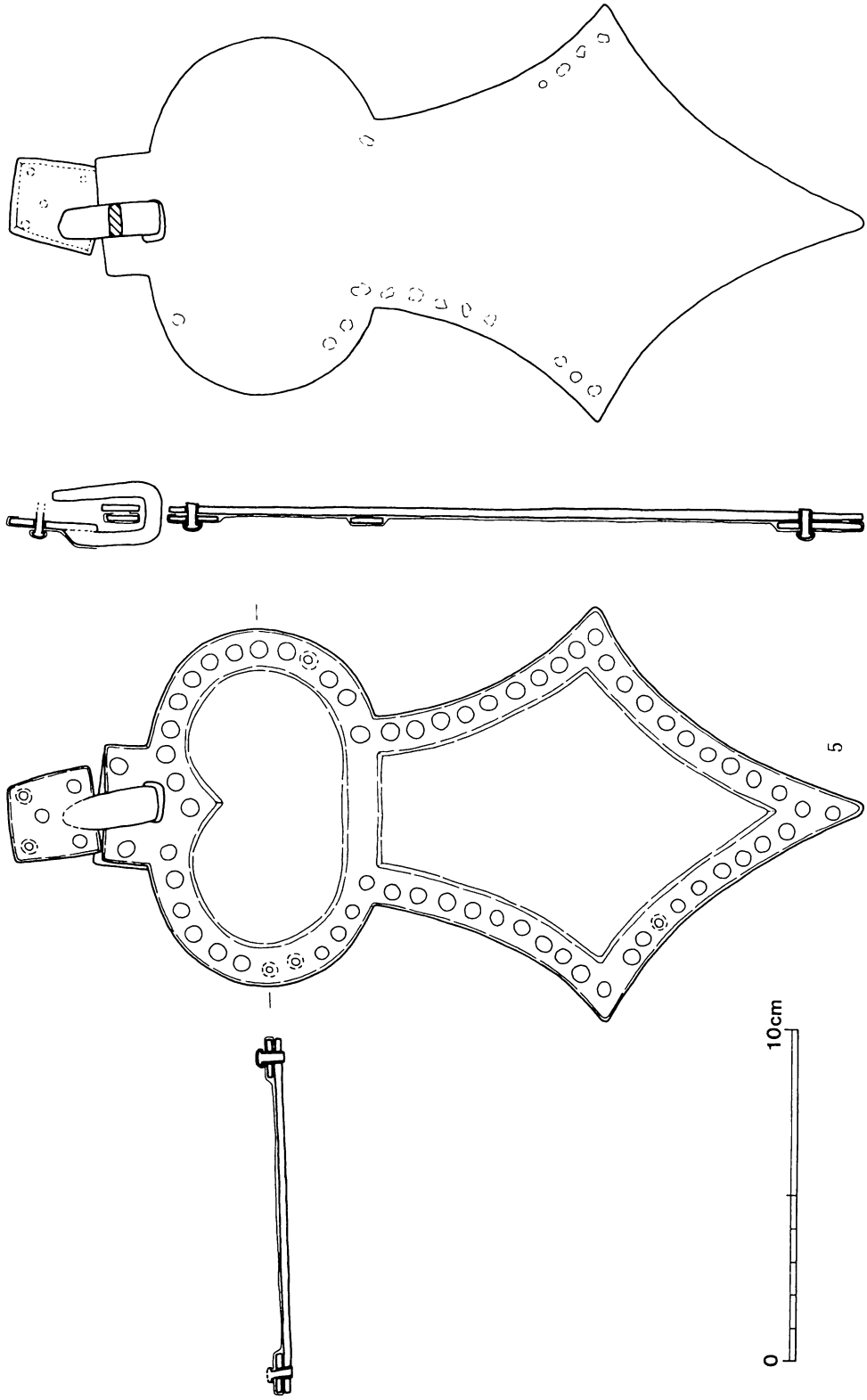


図28 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(杏葉その3) (S.=1/2)

縁金具からはみ出している。

c. 木心鉄板張杓子形壺鐙(図29~33) 鐙は、2個体分が出土した。それらは、特に壺部を構成する鉄板の帯が、幅が狭くて薄いために、ばらばらの破片と化して出土している。しかし柄部は比較的良好な状態で出土し、この数から、鐙は2個体あったことが判る。またこの2個体とも、柄部およびそこからつながる鳩胸金具や壺口側面の鉄板の外面に、黒漆が塗布されている。破片になった鉄板は、接合が可能な場合もあったが、酸化による腐食のために、接合できないものも多い。後述するように、それらから原形を想定復原することも可能であるが、そうした場合欠損している部分も少なくない。それでも、この黒漆を指標とし、鋳の使用法を、柄部につながって残存した部分と比較検討すれば、それらの破片が鐙の一部であることは容易に判った。このようにして、鐙と識別できた破片を図化したものが、図29~31である。

ところで、2個体分出土した鐙は、柄部につながって残存した金具だけからも、それらが共に木心鉄板張杓子形壺鐙であることが判る。当然、一対をなすものであるだろうが、やや細かくそれを見ると、製作工程や最終的な外観も互いに異なっている。まず、残存状態が良好であった柄部を中心に個別に記述する。

(29-6)は、柄部およびそれにつながる鳩胸金具・壺口部側面の金具などである。このうち、柄部前後面および頭部・柄部側面の一部・鳩胸金具・壺口部側面のうち片側の金具・壺部内面の上部を補強する金具は、計画的に切り出して形づくった一枚の鉄板を折り曲げることで形成している。鉄板の厚みは約2mmである。

柄部の前後面は、頭部で屈曲して一連のものとしてつくられている。柄部高8.2cm、柄頭部幅3.1cm、柄基部幅2.6cm、柄部厚み約2.0cmを測る。

前後面の鉄板と木心とは、前後面からそれぞれ打たれる鋳で留められている。外面の漆のために観察しづらい部分もあるが、おそらく図示したように、前後6個ずつの鋳が使用されたと思われる。鋳頭の径は4~5mm程で、全体に同様のものが使用されている。鐙軛受けの孔は、前後面に穿たれている。前面の孔は縦方向長さ1.1cm・横方向幅1.4cm、後面の孔は縦方向長さ1.0cm・横方向幅1.3cmをそれぞれ測る。

柄部の側面の上半は、前後面の鉄板の端をそれぞれ0.5cm程度折り返している。柄部の厚みは約2.0cmあるので、側面のこの部分は、中央に約1cmの間があいて、木質部が露出していたとも考えられる。しかし、(29-6)の柄部には、その断面(見通)図および側面図に示したように、側面から打たれた鋳脚が残存している。このような方向の鋳脚で残存したものはこの1個体のみであったが、本来は柄部側面となる別の鉄板などがこのように鋳によって留められていたとも考えられる。ただ、そのような側面に相当するとみられる鉄板の破片がまったく残っていない。そうであれば、この部分は革などの有機質のものが鋳で留められていた可能性も考えられよう。

壺口面から見たときの壺口部左側面は、柄部の側面からつながる鉄板を屈曲させてつくられてい

る。こちら側の柄部側面下半は、柄部後面から折返す鉄板が幅約1.8cmと広くなり、壺口部側面では、3.3cmとさらに幅を広げている。両側辺に沿って2列に鉋を配して木心に留めている。

他方の壺口部側面は、柄部につながる鉄板とは別造りの鉄板を使用している。上端部から2cmのところを折り曲げて柄部側面の下端とし、これに連続するものとして壺口部側面をつくっている。柄部の側面となった部分の端部は山形にカットされている。使用する鉄板の厚みは約2mmで他の部分と同様である。幅は約1.5cmを測る。鉋は、基本的には1列に配して木心に留めている。ただし必ずしもその中央を整然と鉋が並ぶのではなく、列が乱れている。

壺部の両側面に使用された鉄板を比較すると、上に述べたように、一方は幅3.3cm、他方は幅1.5cmとなって、アンバランスな感じがする。鐙を馬に装着したときに、障泥などに接触する側の強度を重視して幅広の鉄板を使用したとすれば、この個体は、壺口面から見たときに左側の鉄板幅が広いので、騎手の右足用に製作された鐙であるといえるかもしれない。

さて、鳩胸金具は、柄部後面の鉄板をその基部で外側に屈曲させて連続したものとしてつくられている。屈曲の角度は現状では約105度で、その屈曲点、すなわち柄部との境界から10.7cmの長さで端部になる。幅は2.0cmを測る。鉋は、鳩胸金具の側辺に沿って2列に配されるが、やはり整然とした列ではない。16個の鉋が観察できる。

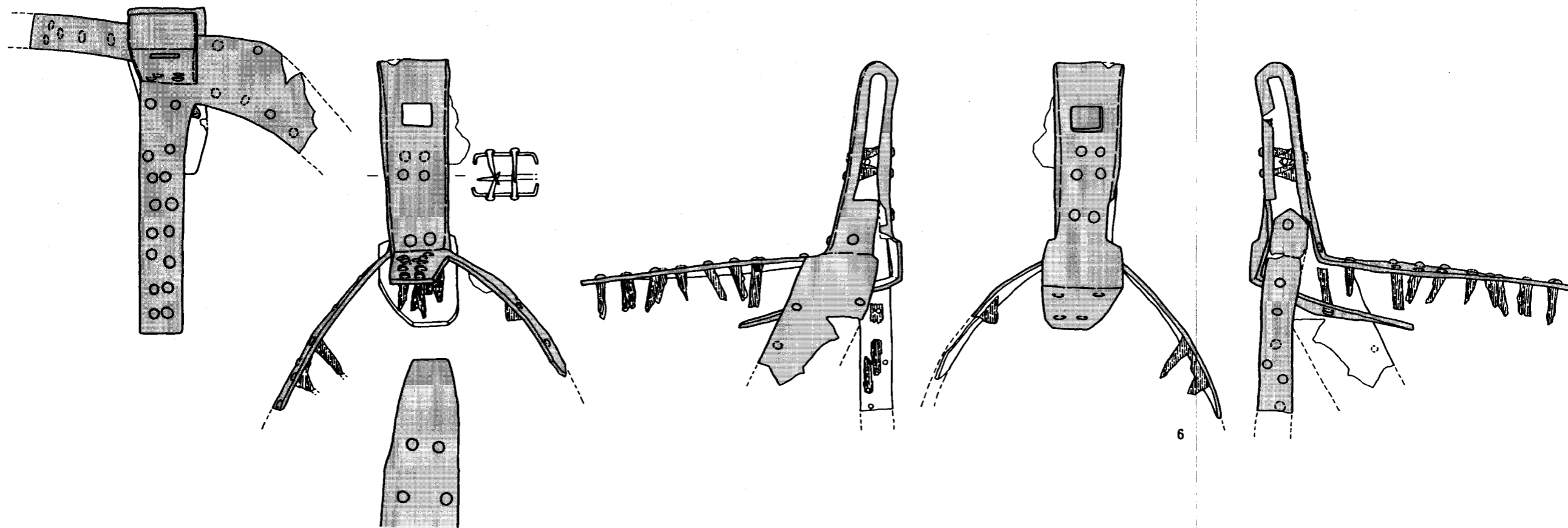
柄部前面の下端は、幅3.5cmに広がり、さらに壺部内面に向けて折り曲げている。すなわち壺部内面の上部を補強する金具となっている。壺口部から7.3cmで端部になる。幅は、壺口部で3.5cmであるが、先端部は1.5cmと狭めている。内面から上に向けて、鉋を打ち木心に留めている。鉋は側辺に沿って2列に配する。

(29-7)は他方の壺鐙の柄部・鳩胸金具の一部・壺口部両側面の金具の一部である。

柄部高8.5cm、柄頭部幅3.0cm、柄基部幅2.5cm、柄部厚み約1.8cmを測る。鉄板の厚みは約2mmである。また、使用される鉋の鉋頭径は約4mmで、いずれも全体を通じて同様のものが使用されている。

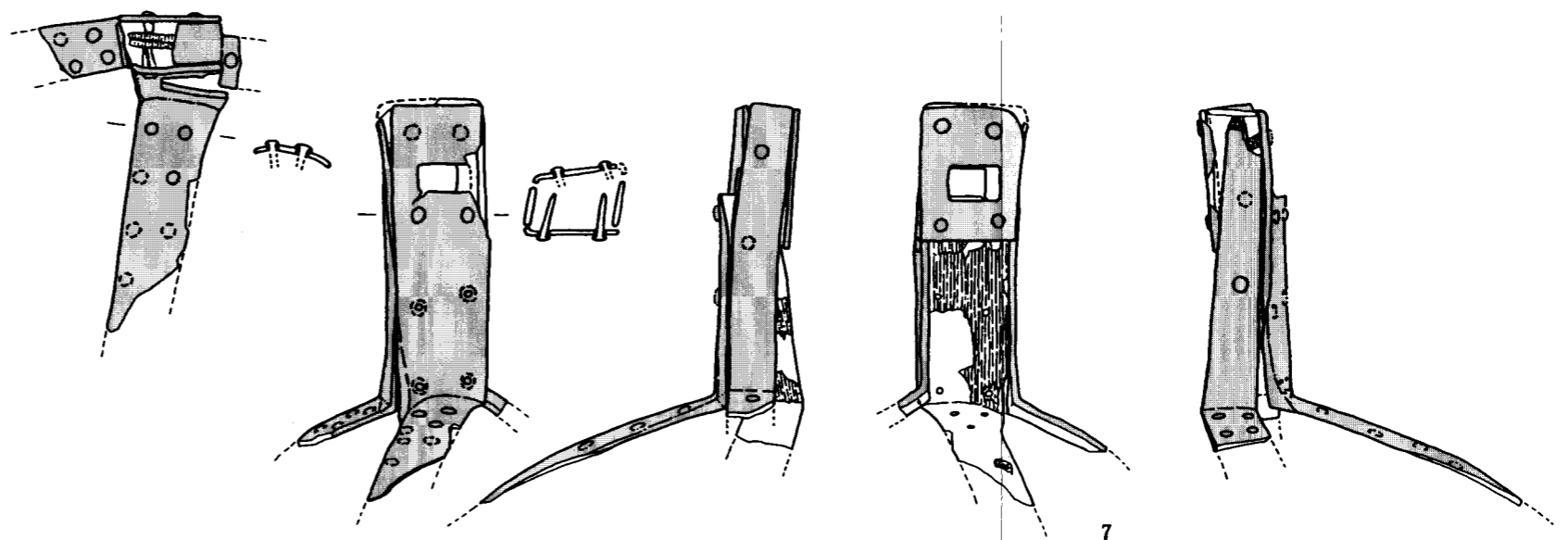
柄部前面は、鐙鞆受けの孔の周囲のみに鉄板が使われており、下半部は、木心が露出する状態になっている。鉄板は長さ3.9cm、幅3.0cmを測る。向かって左側の側辺は明確ではないが、右側の側辺は端部を3.5~4.0mmほど柄側面側に折り曲げている。鉄板の中央やや下に、縦方向の長さ1.0cm、横方向の幅1.5cmの、方形の孔を穿ち、鐙鞆を受ける。この孔の上部には1.0cm四方ほどの範囲に革の痕跡が付着している。木心には、四隅に打った鉋で留めている。

柄部後面は、全体を一枚の鉄板で覆っている。この鉄板は、柄の基部で外側に屈曲して、鳩胸金具につながる構造になっている。柄部後面の両側辺の端部は、中央より下で柄の側面側に折り曲げられている。上位では2~3mm程であるが、柄の基部付近では最大5mm程を折返している。その結果として、柄基部の幅が頭部の幅より0.5cm程小さくなっている。前面の鐙鞆受けの孔に対向する位置に、同じく方形の孔を穿っている。縦方向の長さ0.8cmを測る。横方向は欠損部分があって明



6

0 10cm



7

图 29 巨勢山 75号墳 玄室出土馬具（鏡その1）（S. = 1 / 2）

確ではないが残存部から1.3cm程になると判断できる。柄部後面には、木心に留めるために、縦方向に2列に配した計8個の鉾が打たれたとみられるが、鉾頭を欠損しているものもある上に、外面に塗布された漆のために明確ではない。

柄部側面は、柄の頭部をつくり出しつつ屈曲させて、両側面を連続する一枚の鉄板でつくっている。

側面下端では、柄の基部を境に外側に曲げて、壺口部側面の金具に連続させている。つまり、柄部側面・柄頭部・壺口部側面の金具は、幅1.9cm程の細長い帯状の板を屈曲させることで、一枚のものからつくり出している。柄部側面に打たれる鉾は、中央に1列に配されたものとみられるが、やはり、外面に塗布された漆などのために明確ではない。2個体ずつが認められ、側面図に示した。

壺口部側面の金具は、壺口面から見たときに左側のそれは長さ0.8cmが残存し、右側は2.8cmが残存していた。鉾について、左側の金具は裏面の中央に鉾脚が観察でき、その位置から本来は中央に1列に打たれたものと思われる。右側の金具は2列に配置して打たれる様子が窺えた。

鳩胸金具は、上記のように、柄部後面の鉄板を柄基部で外側に屈曲させて一連のものとしてつくっている。柄部からの屈曲の角度は、現状で約115度で、(29-6)のそれよりやや角度が大きい。鳩胸金具の幅は、柄部との境界付近では、2.2cmであるが、残存部の先端では、1.8cm程になって、やや狭くなる。細長い帯状を呈する金具であるが、図29中の鳩胸金具断面図に示しているように、その断面形は、浅い「U」字形になっていることが特徴的である。

さて、(30-8)～(31-19)は、本来、上記した柄部につながるとみられる、鐙の破片である。すでに述べたように、外面にいずれも黒漆が塗布されており、ほとんどのものの内面には木質が残っている。そのことから、鐙の破片であることが容易に判った。以下に個々の形状などを記述する。

(30-8)は、厚み約2mm、幅1.5cmを測る細長い鉄板で、緩やかに湾曲して全体に弧を描く。内面に木質の痕跡があるが、全体に残っているものではない。鉾は内外面とも観察しがたいが、内面で鉾脚が残るものがある。また鉾脚が折れた痕跡もわずかに観察できるものがある。残存する鉾脚には、脚方向に平行に木目を残す木質が付着して残っている。内面で観察できた鉾の位置はいずれも中央から鉄板の側辺の方にややずれているので、本来、鉾は2列に配置されて打たれたものと考えられる。

(30-9)は、厚み2mm、幅1.4cmを測る。長さは5.2cmが残存した。図示状態で左側は端部である。鉾は3個が残存している。鉄板の縦方向の中央に1列に配して打たれている。鉾頭径は、6～7mmとやや大きい。鉾脚部には木質が残っている。木質の木目方向は、脚方向に平行している。

(30-10)は、厚み約2mm、幅3.0cmを測る。長さは約6cmが残存した。図示状態で右側は端部である。鉄板の各長側辺に沿って、2列に鉾を配している。6個が残っていた。鉾頭径は4～5mmを測る。裏面の鉾脚の残存状況は悪いが、最大6mmの長さで残っているものがあった。また、裏面全体の木質もほとんど残っていないが、わずかに痕跡が残っている。鉾脚部に残る木質の木目方向は、

脚方向に対して幾分斜めに交差する方向のようであるが、必ずしも明確ではない。

(30-11)は、厚み約2mm、幅1.3cmを測る。長さは約3cmが残存した。屈曲して縦断面が緩やかな弧を描くことが見て取れる。鋳は特に観察しがたいが、内面にわずかに脚部の痕跡を認めることができる。それによれば、鋳は各長側辺に沿って2列に配されている。内面の木質はほとんど残っておらず、木目は見られない。

(30-12・13)は、いずれも図示状態で下端部は直線的に延びた後、大きく屈曲して、従断面が弧を描く部分につながっている。幅1.5ないし1.6cmを測る。厚みは約2mmであるが、直線部分はやや厚みを増す。鋳は、図示状態上部の弧状をなす部分と下端の直線的な部分では、用いられ方が異なっている。上部は、基本的に長側辺に沿って2列に打たれている。各鋳の間隔は約1cmとやや狭い。下端の直線的な部分の鋳は、(30-12)では確認できないが、(30-13)で縦方向の中央に1列に配して打たれている様子が観察できる。各鋳の間隔は約1.4cmである。内面には僅かに木質が残っている。鋳脚部に残る木質の木目方向は、図示状態で縦方向である。

(31-14)は、厚み約2cm、幅1.3cmを測る。長さ約4cmが残存する。両端が欠損しているため、明確ではないが、両側辺が緩やかな弧を描いている。図示状態で上側辺に、縦方向0.4cm、横方向1.7cmの方形の突出部がある。鋳は、本体部分の中央に1列に配されている。鋳頭径は、7～8mmとやや大きい。内面の木質は、鋳脚部分に残るものも含めて、図示状態で縦方向に木目が残っている。

(31-15～18)は、いずれも厚み約2mm、幅1.4～1.6cmを測り、横断面形が浅いU字形を呈する。鋳は、原則的に両長側辺にそって2列に配列されて打たれている。ただし、(31-18)に限っては、3個残る鋳のうち1個は、縦方向のほぼ中央に打たれるもので、用いられ方が異なる。鋳頭についても、両側辺に沿って打たれるものが、いずれも径4mmほどであるのに対して、中央に打たれる鋳の鋳頭径は7mmを測る。内面の木質は、必ずしも明瞭ではないが、残存している場合の木目方向は鉄板の縦方向になる。

(31-19)は、厚み約2mm、幅1.2～1.5cmを測る。図示状態で左端は鉄板の端部である。端部の幅を狭くつくっている。鋳は2個が残っている。縦方向の中央に1列に打たれている。鋳頭径は、6～7mm程を測るやや大きいものを使っている。内面の鋳脚部の周囲に木質が残っている。木目方向は鋳脚の方向に平行する方向である。

以上が、鐙の各部の破片とみられるものの詳細である。柄部は2個体分が出土しているので、(30-8)～(31-19)の各部が、いずれの柄部につながるものかを検討することで、全体の復原をすることも可能である。結果的に想定し得た鐙の復原図を図32・33に示した。

想定復原を行うに際して、まず、柄部(29-6)につながる金具から検討する。(29-6)につながって残存している鳩胸金具は残存部分で端部が見えているので、鳩胸金具はこの部分で止まり、壺部の下端までは至らないものとみなすことができる。また、壺口部側面の一方の金具は、幅約3.3cm

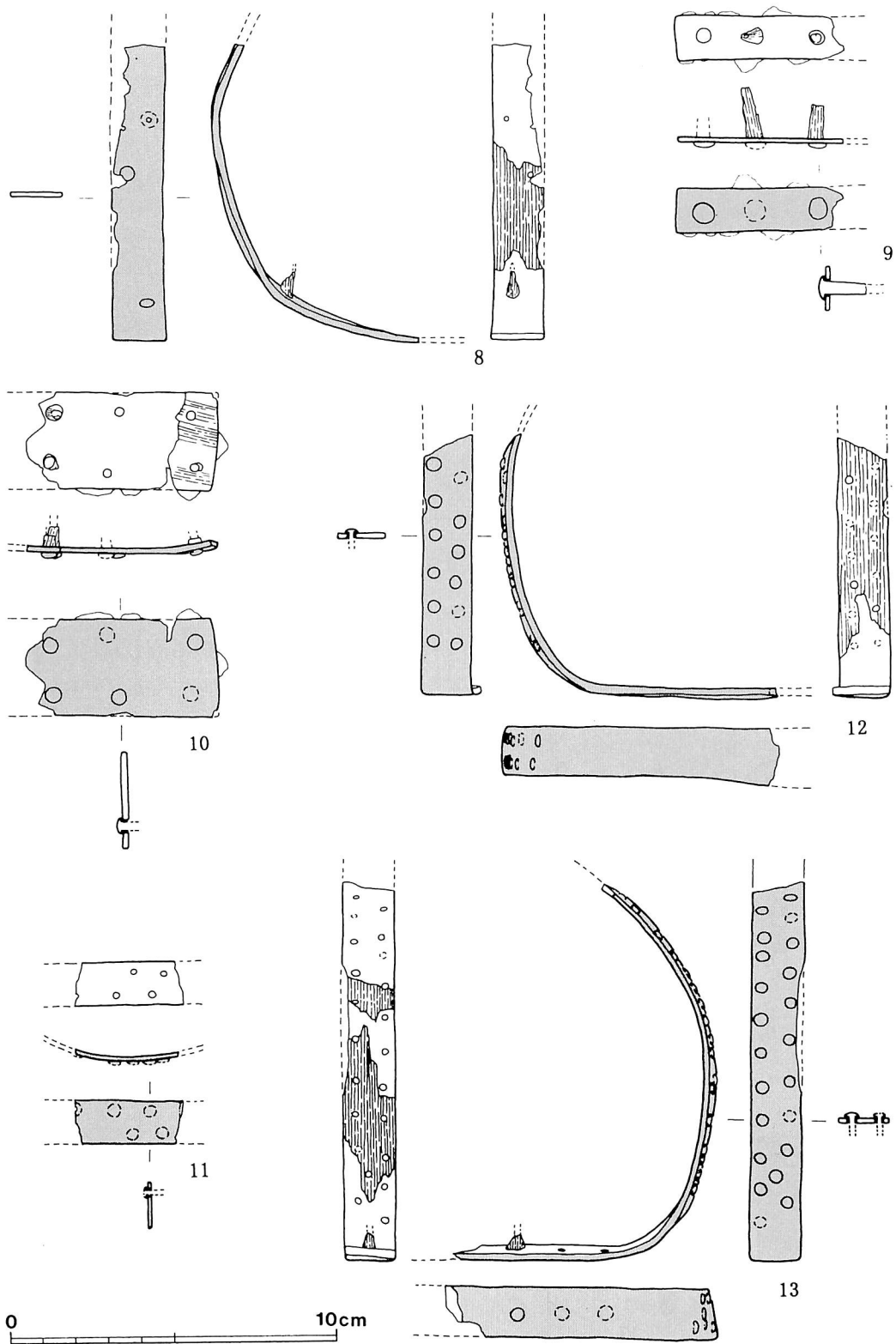


図30 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鐙その2）（S. = 1/2）

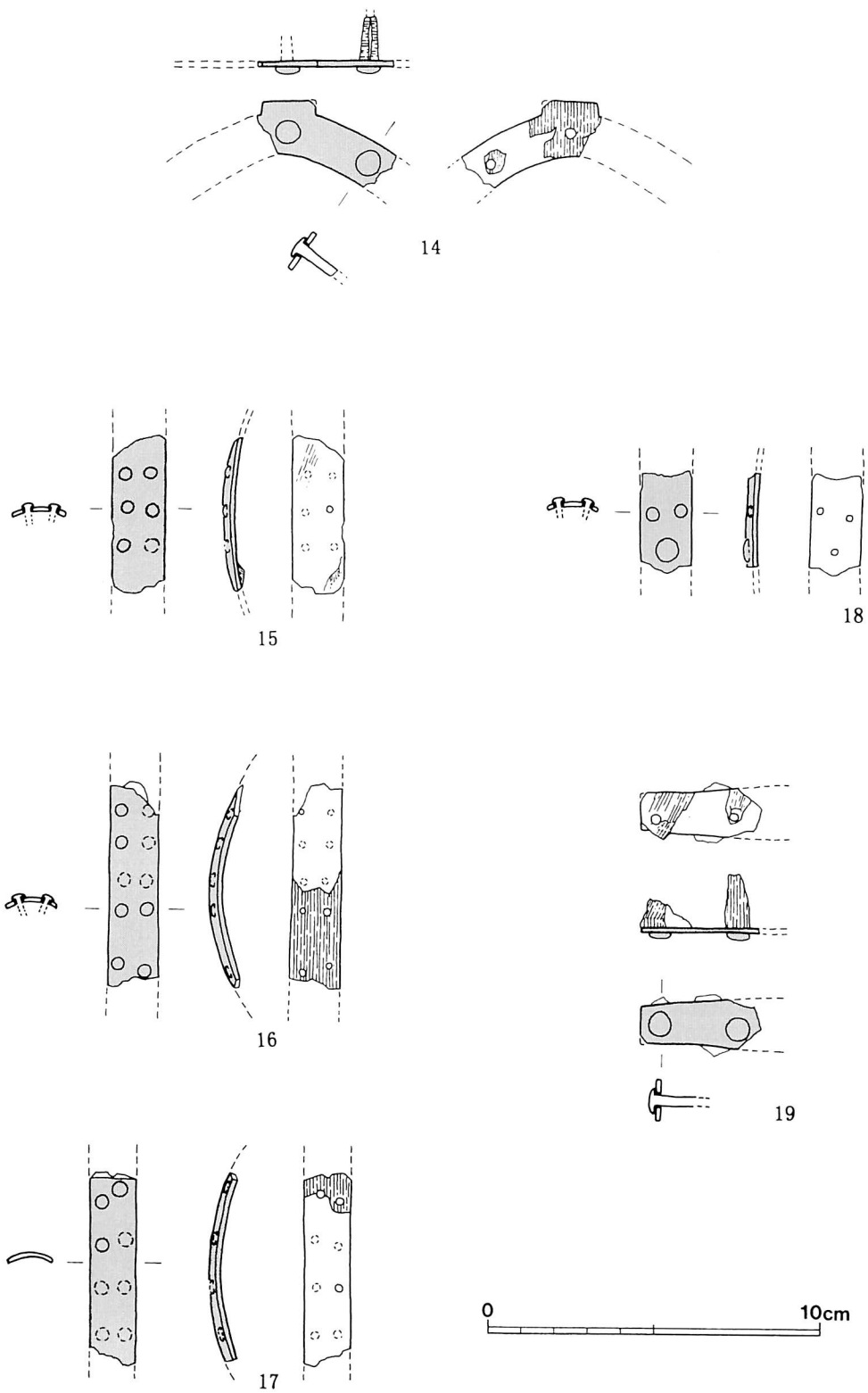


図31 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鐙その3）（S. = 1/2）

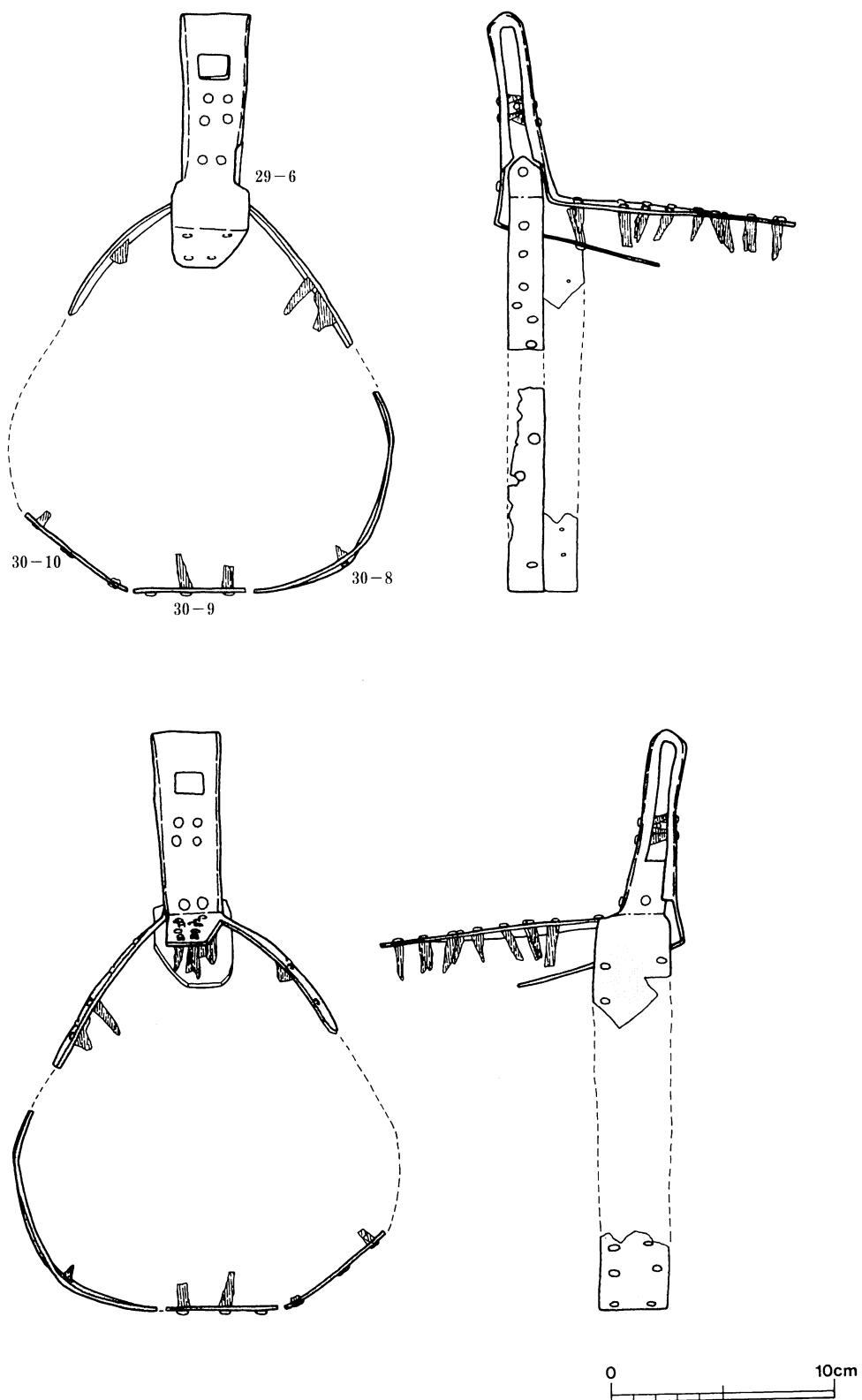


図32 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鑑復元図その1）（S. = 1 / 3）

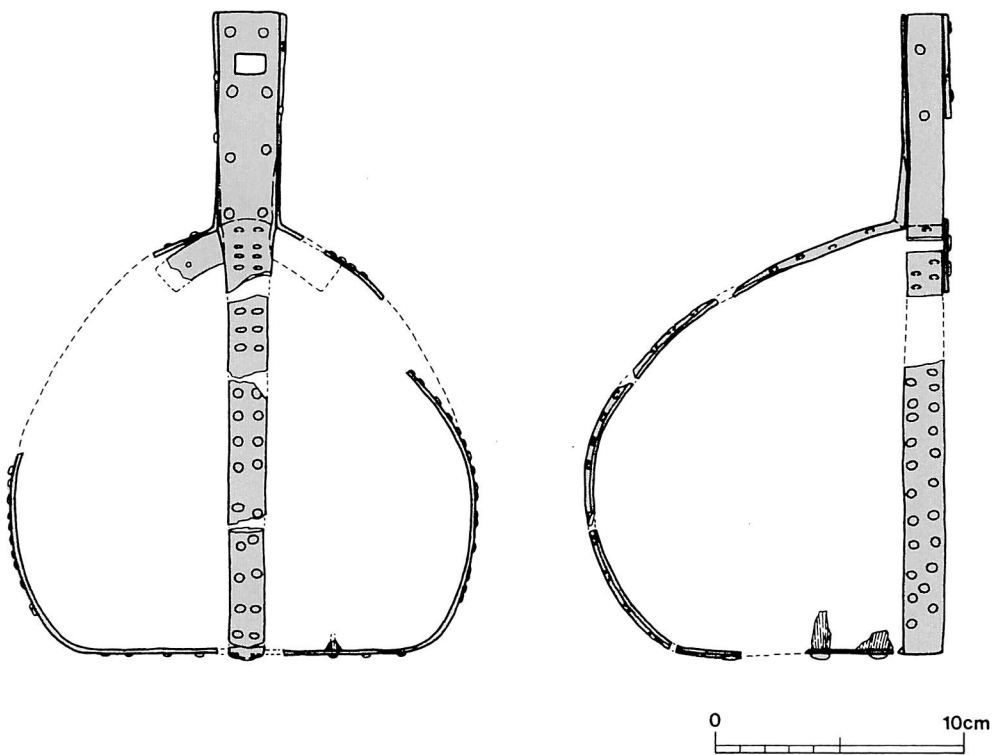
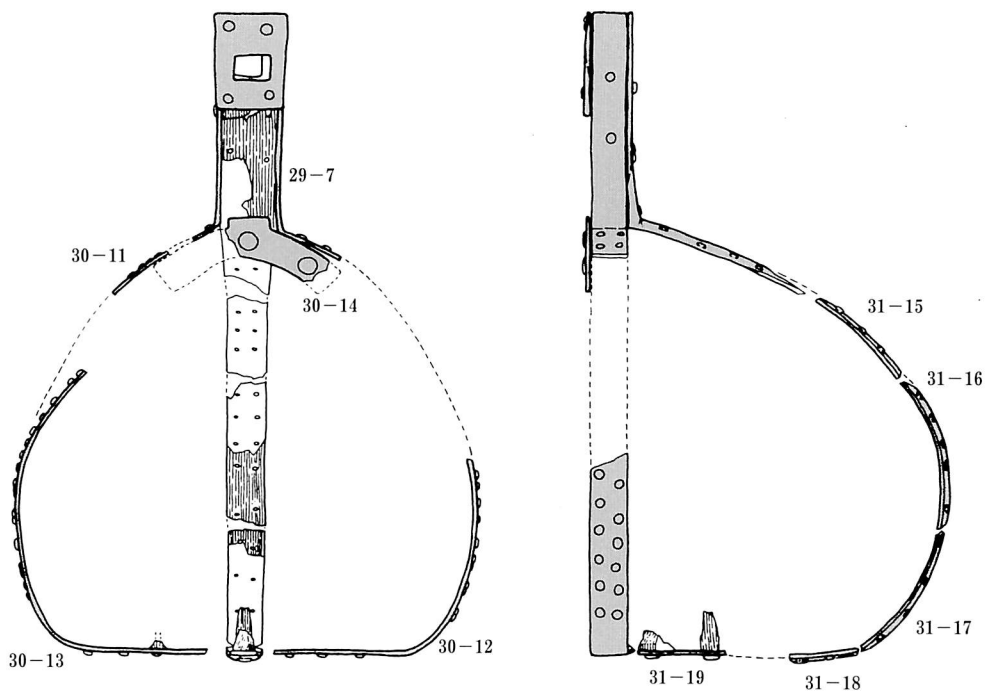


図33 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鑑復元図その2）（S. = 1 / 3）

と幅の広い鉄板を使用しており、特徴的である。

(30-10)は幅3.0cmであるので、この壺口部側面につながるものとみられ、さらにこの(30-10)には短側辺の端部も認められるので、金具が壺口部側面を巡っていたとすれば、下端に近い位置にあたるものであろう。他方の壺口部側面の金具は、幅約1.5cmで全体に湾曲して弧状を呈するものが想定される。そのような形状の破片としては、(30-8)・(30-12)・(30-13)および(31-15~18)がある。しかし(31-15~18)は、横断面形が浅い「U」字形を呈するので、柄部(29-7)につながる鳩胸金具の一部であるとみられる。残る3つの破片のうち、(30-12)・(30-13)は、下端が直線状を呈していることから、壺口部両側面から踏込にかけての金具であると考えるのが妥当であろう。そうであれば、柄部(29-6)につながる一方の壺口部側面の金具は幅3cmのものであるので、この(30-12)・(30-13)は柄部(29-7)につながるものと考えられよう。このようにして、残る(30-8)が、柄部(29-6)につながる壺口部側面の一方の金具とみることができ。さらに、踏込部は、直線状をなすと思われるので、(30-9)をその部位に当てた。

次に、柄部(29-7)につながる金具は、上のように、鳩胸金具として(31-15~18)の金具を、壺口部側面から踏込部にあたる金具として(30-12・13)を想定することができる。これらとは別に、(31-14)は両側辺が湾曲して弧状を呈して方形の小さな突出部がつくという形状から、柄部と壺部の境界付近を補強する金具とみられる。柄部(29-6)は、柄部前面の鉄板を折り曲げることでこの部分をつくり出しているので、(31-14)は柄部(29-7)のこの部分に使われたものと考えられる。また、鳩胸金具からつながる壺部の下端は、直線状を呈すると考えられるので、(31-19)をその部分に当てた。なお、この鳩胸金具に使用される鋳は、鋳頭4mm程のものを2列に配して打たれるが、(31-19)の鋳は、鋳頭径6~7mmとやや大きいものを中央に1列に配して打つものであって、一見矛盾する。しかし、(31-18)にはその両者の鋳が使用されており、小さい鋳は両側辺に偏って、大きい鋳は中央に打たれている。つまり、この(31-18)を境にして、それより上位と下位で鋳の用いられ方が異なっていると考えれば、(31-19)をこの部位に当てることはむしろ合理的である。

このようにして、出土した2個体の鐙について、図32・33のように復原想定した。壺部の幅は、実用に必要な幅であることと、金具の湾曲の度合いを考慮して17~18cm程度を想定したものである。

また、壺鐙に使用された金具の復原を上記のように行った場合、木心として使用された木材の木取りについても、一定程度の復原が可能である。

金具に残された木質の木目の方向は、確実なものとして、2個体の柄部およびそれにつながって残存した金具の、内面および鋳脚部の木質から観察することができる。それによれば、木目はいずれも、鐙を正置した状態で縦方向であることが判る。また踏込部と目される金具に残る木質の木目も同様の縦方向であることが判る。これらのことから、木心として使用された木材は、縦方向に木目が走る一木を、杓子形に削り出して、柄部および壺部を形成した後、壺部内面を削りこんだもの

と考えられる。

d. 円環状雲珠(図34) 雲珠は、1個体の円環部分と6個体の脚金具および責金具からなる。

円環部(34-20)は、幅約1.0cm、厚み約0.5cmの鉄棒を曲げて環をつくるものである。接合部は鍛接によると考えられるが、観察できない。外径8.5cmを測る。

(34-21~26)として、方形の脚金具と責金具を示した。それぞれのセット関係は、錆着した状態で出土したものもあり、そうでない場合でも互いの出土地点や錆化の状態から判断した。また、それぞれの脚金具と責金具は、寸法のうえで僅かな違いがある場合があるが、基本的には同工、同大の製品である。

方形の脚金具は、いずれも2.6ないし2.7cm四方で、ほぼ同様の大きさである。そのなかで、(34-24)は縦方向長さ2.4cm、横方向幅2.5cmとやや小さく、(34-25)は、横方向幅2.8cmとやや大きい。

方形板は、このような寸法の鉄地板を金銅板で覆っている。裏面の状況は、革の痕跡が残っているために、観察しがたい部分も多いが、金銅板の4辺を裏面に折返して留めている。表面から四隅および中央の計5釘を打って、革ベルトと固定している。釘頭は銀被せで、その径は約5mmを測る。釘脚は、すべて途中で折れているために、その長さや先端部の処理の状況は不明である。雲珠脚金具および革ベルトを貫通して、先端は屈曲させるか潰して固定していたものと思われる。

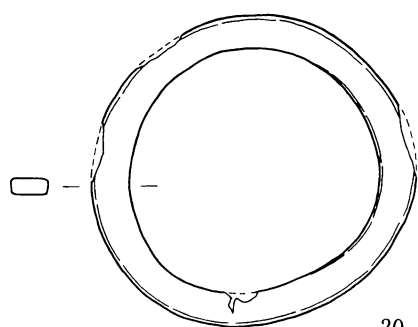
責金具は、幅0.7cmを測る。鉄地板の中央部に一条の条線を入れ、両側辺には、互いに斜交する方向に刻目を入れている。さらにその後銀箔を被せている。(34-26)は、表面の劣化のためにその刻目が観察しがたいが、元は他の個体と同様であったのであろう。

以上が出土した雲珠に付属する各部の詳細である。これらは、尻繫となる革ベルトによって連結していたものであるから、出土時においては個々がばらばらになっていたので、実際に円環部にどのような配置で脚金具が装着されていたのか、不明である。そこで、次にこの雲珠の原形復原について検討する。

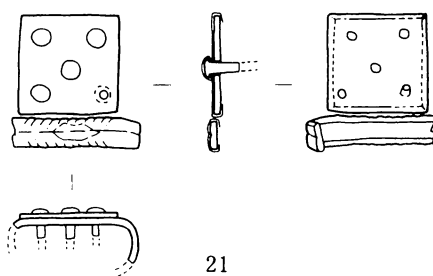
雲珠の脚部の配置についての復原を行うには、伏鉢状雲珠などで、中央部と脚が共造りになっているものを参考にすると都合がよい。

宮代栄一氏によれば、そのような「半球状」の雲珠や辻金具は、脚の配置や脚数などによる分類が可能で、配置に関しては、「点对称で等間隔に配置するもの」と「左右対称に不均等に偏配置するもの」に分けられ、6脚の雲珠についてもこの2者があるという(宮代1986)。

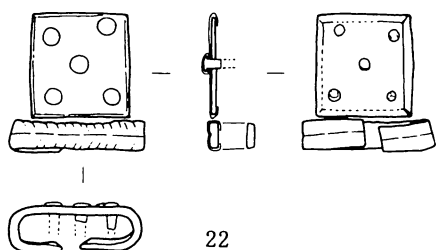
いま、この2者の機能的な差異または装着状態の差異は、にわかには断じがたい。しかし、例えば、「扁平偏在6脚系雲珠」の初現になるとされる、福岡県寿命王塚古墳出土例の脚に注目してみると、伏鉢部外周の、十字に直交して対向する位置に4脚が配置され、そのうち、3脚を2釘の方形脚とし、1脚を4釘の先端部切込釘としている。合計6脚のうち、残る2脚も4釘の先端部切込釘で、方形脚に両端を挟まれる位置に配置されている。つまり、3個の方形脚は、伏鉢部外周の、T字形



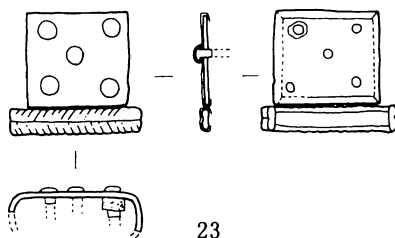
20



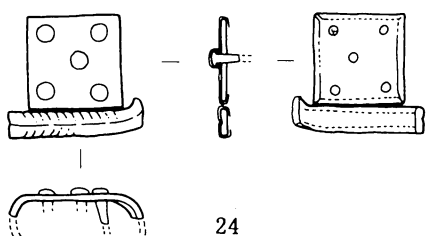
21



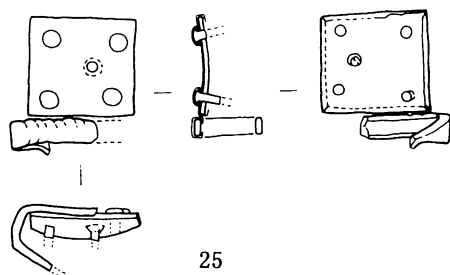
22



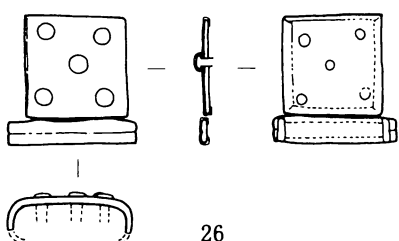
23



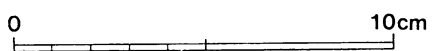
24



25



26



雲珠想定復元図

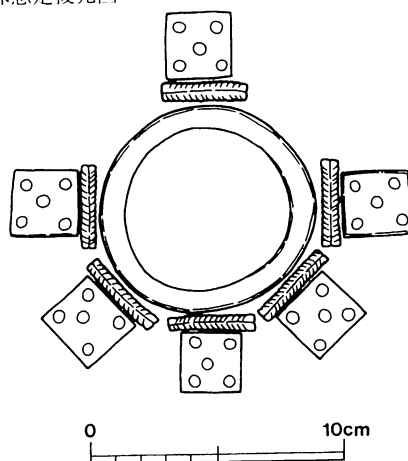


図34 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(雲珠・雲珠復元図) (S. = 1/2・復元図はS. = 1/3)

に交差する位置に配置されている。この配置は、まさに3個の杏葉を各々装着すべき位置にあたる。そして、杏葉を装着する目的であれば、革ベルトを留めるに際して、比較的強度を必要としないと考えられるので、この方形脚が2鋳であることも符合する。このように考えると、残る3脚を尻繫に装着して、馬の体に固定していたとみられるのである。

巨勢山75号墳出土の雲珠においても、寿命王塚古墳出土の「扁平偏在6脚系雲珠」と同様に、3個体の杏葉を繋ぎ留める必要があるので、この偏在6脚系雲珠の脚金具と同様に脚金具を配置していたとみてよいだろう。そのような想定によって図34右下に復原図を示した。

ただ、そうした場合、残る3個の脚金具がどのように尻繫に装着されていたかを考えておく必要がある。

まず、この3個の脚金具につながる繫は、一方は鞍の鞆から伸びてきたものと、他方は馬の尻部分を回して馬の体に固定するものとであったと想定できる。この場合、後述するように、ここでは2個体の鞆が出土しており、通例のようにその2個体とも鞍の後輪に着けられたとすれば、おのおのに装着されて伸びてきた革ベルトが、雲珠の2個の脚金具につながると想定するのは自然であるかもしれない。しかし、そうすると、残る1個体の脚金具で固定された革ベルトが馬の体を回った後、同じ脚金具で雲珠に固定されるとみなければならない。想定される雲珠の位置および革ベルトの方向から、これにはやや無理があると考えられる。

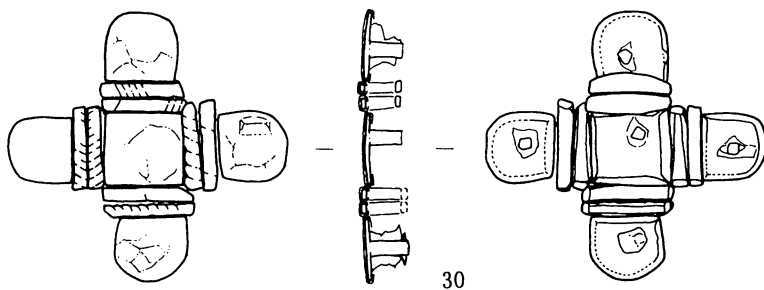
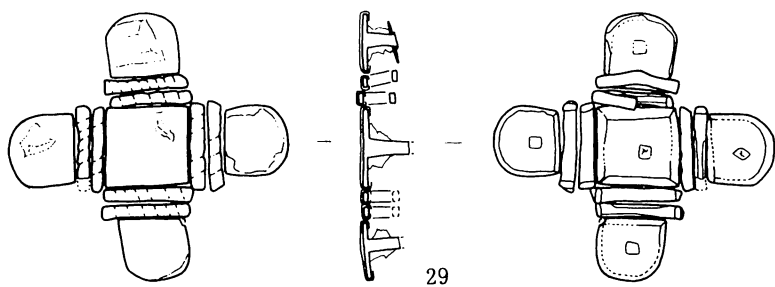
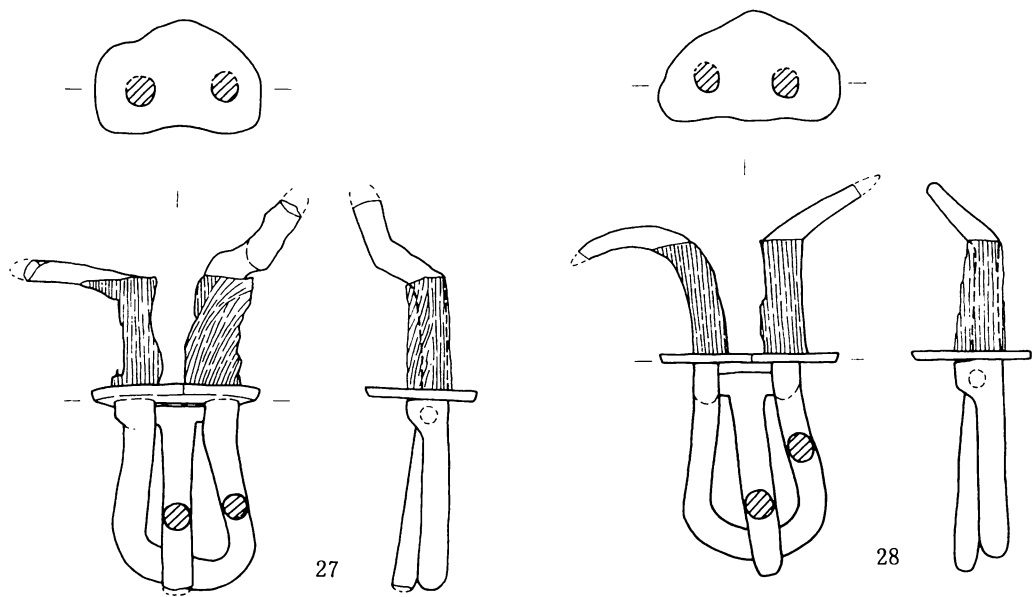
そこで、復原案では、図34の復原図の図示状態で上端に位置する脚金具は、2個体の鞆から伸びてくる革ベルトを束ねて1つにして雲珠に固定したものと考えた。また、図示状態で下斜め方向に取り付く2個体の金具には、馬の体を回る革ベルトの両端がそれぞれ固定されていたと考えたものである。

e. 鞆(図35-27・28) 2個体が出土している。鞆に関しては、宮代栄一氏の詳細な分類がある(宮代1996)ので、細部の形状などはそれに従って記述する。

出土した鞆は、双方とも脚と輪金を一体造りにする。座金具を貫通した脚は木質部に打ちこまれ、先端を左右に曲げて固定される。脚部にはその木質が明瞭に残存している。木目の方向は、脚の方向に平行である。また木質の残存している長さは、いずれも3.0cmを測る。なお、この場合、この長さは鞍の後輪の厚みを示すものと考えられる。

座金具は板状のもので、平面形は栗実形を呈する。(35-27)の座金具は栗実形の下部が少し内側に刳り込まれて曲線を描くが、(35-28)のその部分は直線的である。

刺金はT字形のものをを用いている。輪金の幅を座金具付近で広くし、この部分に刺金の基部を刺しこむことで固定している。輪金の外側に貫通したその端部の処理は、表面の錆化のために判然としない。おそらく、この部分を軸にしての回転方向の動きが可能な程度に余裕を持たせたうえで、先端部を潰すことで固定しているものと思われる。また、この部分の輪金の幅を広げることは、結果的に座金具も固定することになっている。刺金・輪金とも、その断面は円形である。



0 10cm

图35 巨勢山75号墳 玄室出土馬具(鞍・辻金具その1) (S. = 1/2)

(35-27)は、輪金部の長さ5.0cm、同最大幅3.8cm、断面径0.7cmを測る。刺金は、先端部を欠損しているが、長さ5.0cm程と推定できる。断面径は0.7cmを測る。座金具は、縦方向の長さ3.0cm、横方向の幅4.4cmを測る。脚部は6cm程の長さのものを、木質に打ちこんだ後曲げている。厚みは3.0cmである。

(35-28)は、輪金部の長さ5.2cm、同最大幅3.7cm、断面径0.7cmを測る。刺金は、長さ5.4cm、断面径0.8cmを測る。座金具は、縦方向の長さ3.0cm、横方向の幅4.8cmを測る。脚はやはり6cm程のものを木質に打ちこんで(35-27)と同様の処理をしている。

f 辻金具(図35・36-29~34) 辻金具は6個体を検出した。いずれも、中央の方形板、四方の爪形の脚部、その各々の間にある革ベルトを留める責金具からなる。それぞれは別造りの部品を組み合わせて辻金具としているもので、その連結は結果的に有機質の革ベルトに依っている。そのため各部品はばらばらになりやすく、当初はどのような組み合わせで用いられたのか判らなくなっていることも多い。しかし、本墳の場合、(35-30・31)は、実測図に示した状態で出土し、(34-32)は本来の形状は崩れていたものの、まとまって1箇所出土したので同一の辻金具であったことが容易に判った。(35-29)は多くの部品が1箇所出土したが、それだけでは1個体の辻金具にはならず、(36-33・34)については、2個体が1箇所ではばらばらになっていたうえ、やはりそれだけでは、辻金具2個体分に満たないものであった。しかし、それら不足する部分についても、約20cm程離れた地点で出土した脚金具などをもって補うことが可能であると判断される状況であった。そして、多くの場合、責金具や錆の状態からも元の接合関係の復原も可能であると判断できた。ただし、(36-33)と(36-34)の各部については、若干入れ替わっている場合があるかもしれない。

辻金具の各部の構造・形状は、いずれの個体も同様であるので、以下に一括して述べる。

中央の方形板、および四方の爪形の脚部は、鉄地板に金銅板を張るものである。金銅板の端部は約2mmを裏面に折返して留めている。

鉸脚は、それぞれの中央に1鉸が認められる。鉸頭は、脚金具の表面に出していない。この場合、鉄地板の表面から鉸を打って、その後金銅板で鉸頭上から覆い隠すことも考えられるが、金銅板が剥脱して鉄地板の表面が見えている部分のある、(35-29)・(36-33)の観察によっても、鉸が貫通した痕跡などまったく見出せない。また、この報告までに(35-29)・(35-30)についてはX線写真を撮影することができたが、この写真からも鉸頭を明確に見出すことができなかった。これらのことから、鉸脚は、方形板および爪形の脚部の裏面中央に鍛接されているものと考えられる。

また、これら辻金具の裏面には、鉸脚と共に革の痕跡がよく残っているが、鉸脚先端に、径1.0~1.2cm程の不整形な円形を呈する、厚み1mm以下の鉄板が残存している。鉸脚すべてに残存している訳ではないが、(35-30)は2箇所、(36-31)は3箇所、(36-32)は4箇所、(36-33)は3箇所、(36-34)は1箇所認められた。これは辻金具から革ベルトが脱離することを防ぐために、鉸脚を、革ベルトを貫通させた後、その先端部に座金とする小鉄板を当て、鉸脚先端を潰して固定したもの

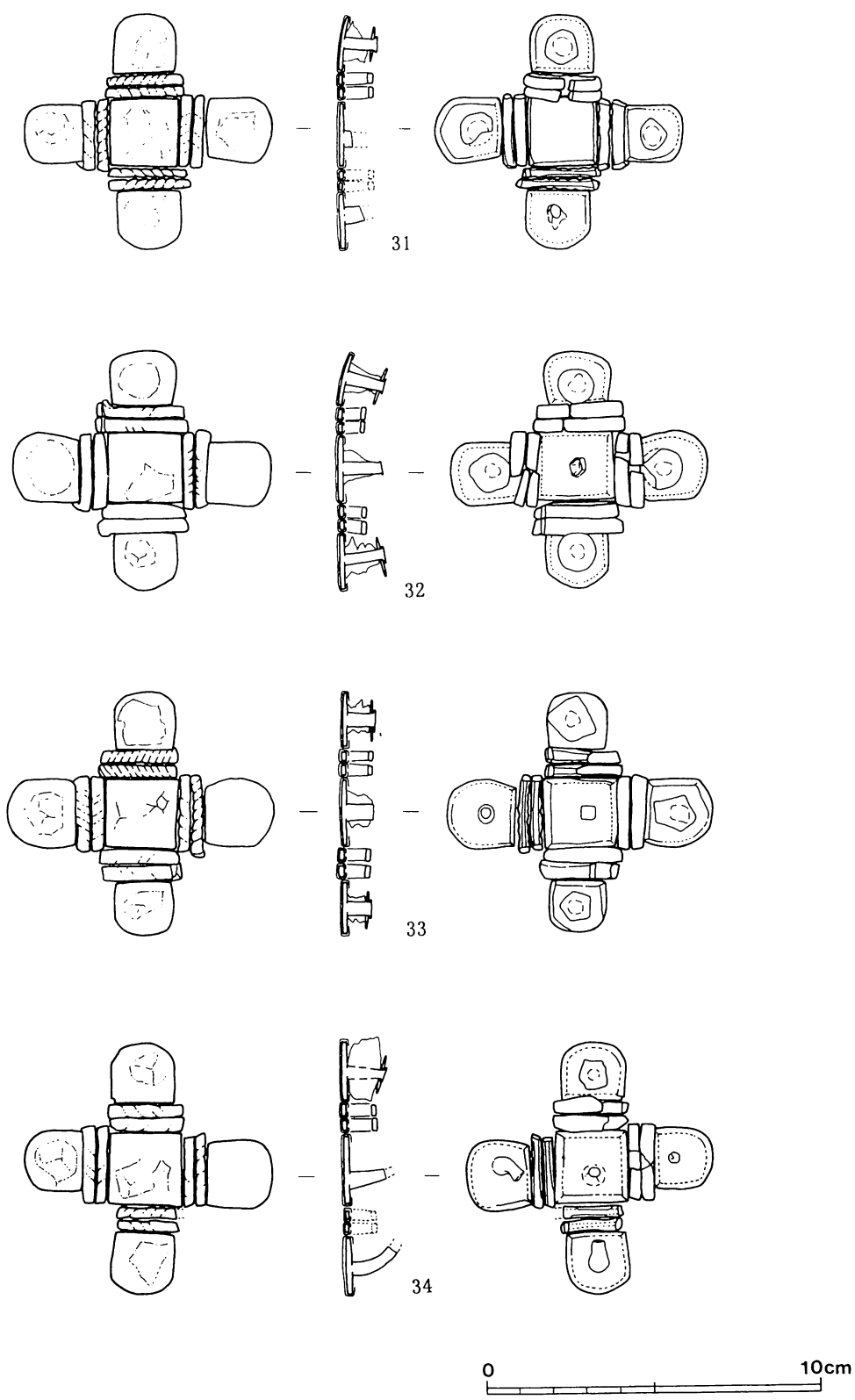


図 36 巨勢山 75号墳 玄室出土馬具（辻金具その 2）（S. = 1 / 2）

であろう。鋸が途中で折れている場合は認められないので、基本的にはすべての鋸の先端に施されたものと考えられる。

責金具は、幅約4mmのもの2個体を1セットとして用いる。鉄地に刻目を斜めに入れた後に銀箔を被せている。銀箔は両端を裏面に折返して留めている。2個体の刻目の方向は、互いに交差する方向とするようであるが、必ずしもその原則が貫徹している訳でもないらしい。表面の劣化のために判別しにくい場合も多いが、(35-29)・(35-30)では、肉眼のほかX線写真でもセットを成す責金具の刻目の方向が平行するものがあることが確認できた。

中央の方形板およびその脚の計測値は表3にまとめた。脚部は、図示状態で上に配置したものを脚1とし、図上右回りに脚2～4とした。

計測表に示したように、方形版の大きさは、2.1ないし2.2cm程で、概ね同大のものといえよう。脚金具も、長さ・幅とも2.0cm弱で、概ね大きさが揃っている。あえていえば、(36-32)・(36-33)などは、図示状態で上下に対向する位置に配されている2個の脚金具が、ほかの2個より小さく、その他の辻金具にも4個のうち1個だけが小さい脚金具を使っている場合がある。しかし、その差は約2mm前後法量が小さいだけで、全体の形状は同じであるから、そのことが何らかの機能差を反映しているとは考えにくい。

表3 巨勢山75号墳 出土辻金具 方形板・脚金具計測表(単位;cm)

	方形板		脚1		脚2		脚3		脚4	
	縦	横	長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅
35-29	2.1	2.2	1.7	2.0	1.9	1.7	1.7	1.8	1.7	2.0
35-30	2.0	2.1	1.9	1.9	1.8	1.9	1.7	2.0	1.7	1.8
36-31	2.0	2.1	1.8	1.9	2.0	2.0	1.8	1.9	1.8	1.8
36-32	2.0	2.3	1.6	2.0	1.9	2.0	1.8	1.9	2.0	2.1
36-33	2.1	2.2	1.7	1.9	2.1	2.1	1.6	1.8	2.0	2.1
36-34	2.2	2.2	1.9	1.9	2.0	2.1	1.9	1.9	1.8	1.9

g 鋳具(図37-35~38) 鋳具は4個体が出土した。輪金の形状と構造の違いによって2型式に分けられる。

一方は、輪金の中央部付近で屈曲して左右に広げるもので、(37-35・36)がこれに当たる。基部は別造りの鉄棒を渡している。鉄棒の両端を輪金に貫通させた後潰して固定するものである。輪金のこの部分は、幅をやや広くしており、その分厚みが薄い。また、(37-35)では貫通した横棒の痕跡からみると、横棒の両端部を特に細くしているようである。刺金は、その下端を曲げて、この横棒に巻きつけて固定している。

他方は、(37-37・38)で、一本の鉄棒を屈曲させることで輪金をつくっている。平面的な形状は、(37-35・36)のように左右に広げないで、円頭形にする。輪金の基部は、図示状態で左端部で鍛接して接合している。刺金は、その下端を曲げて、輪金の基部に巻きつけて固定している。

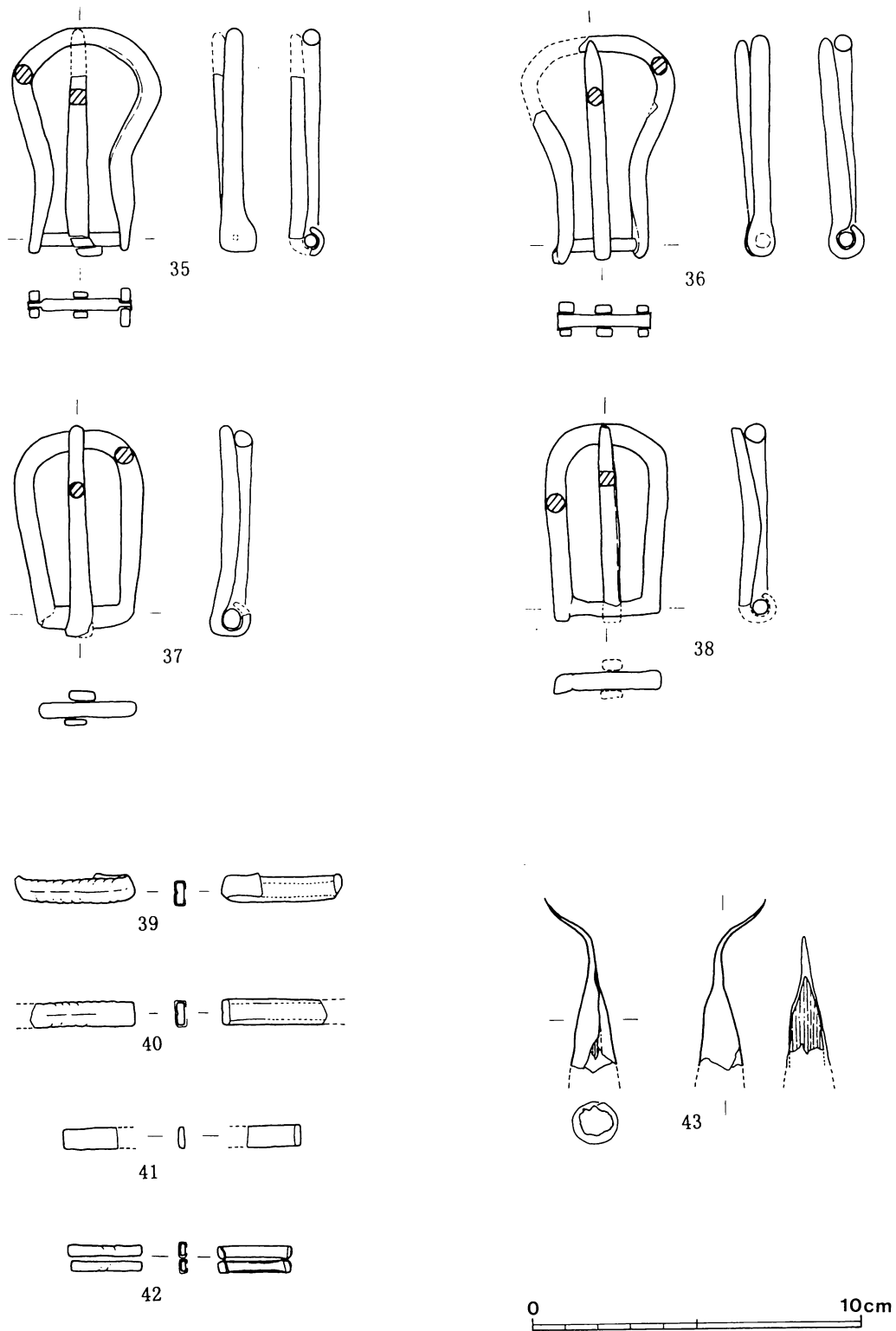


图37 巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鉸具・貴金具・銅製飾金具）（S. = 1 / 2）

(37-35)は、縦方向の長さ6.9cm、最大幅4.6cmを測る。輪金の断面形は円形で径0.6cmを測る。刺金の断面径は方形で、一辺0.7~0.5cm程を測るが、輪金の基部に巻きつける下端部は潰して、厚みの薄いものになっている。

(37-36)は、縦方向の長さ7.0cmを測る。最大幅は、輪金の一部を欠損しているために不明であるが、残存部分から、4.7cm程になると推定できる。輪金と刺金の断面形は、いずれも円形で径0.5cm程である。刺金の下端は、(37-35)と同様に、輪金の基部に巻きつけやすいように、厚みの薄いものになっている。

(37-37)は、縦方向の長さ6.1cm、最大幅3.9cmを測る。刺金と輪金の断面形はいずれも円形である。輪金の断面径は0.6cmを測る。刺金は下端から先端にかけて細くなっているが、中央付近の断面径は0.5cm程である。刺金の下端は、厚みを薄くして輪金に巻きつけている。

(37-38)は、縦方向の長さ6.0cm、最大幅3.8cmを測る。輪金の断面形は円形で径0.6cmを測る。刺金の断面径は、方形で一辺0.5cm程である。刺金の下端は欠損しているため、詳細は不明だが、輪金の構造から(37-37)と同様に、輪金の基部に巻きつけて固定したものであろう。

h 責金具(図37-39~42) 責金具は、既述の雲珠・辻金具に組み合うもののほか、単独に出土したものととして4個体を図化することができた。

(37-39)・(37-40)は、幅0.7~0.8cm、厚み約0.2cmを測る。外面の錆化が著しいために明確ではないが、いずれも鉄地板に銀箔を被せている様子がわずかに観取できる。鉄地板は両側辺に刻目を入れている。中央部の条線は、特に(37-39)では明確ではないが、それぞれ1条の条線を刻んでみるとみられる。以上のような、寸法および意匠は、すでに述べた(34-21~26)の雲珠脚金具に用いられた責金具とほぼ同様である。

(37-41)は、幅0.7cm、厚み約0.2cmを測るもので、上の(37-39・40)と同様の大きさである。ただし、外面の条線・刻目および銀装などがまったく観察できない。表面の劣化が進行しており、わずかな残存部分でしかないために明確ではないが、革帯金具として、このような装飾性に乏しいものも同時に使用されたのであろう。

(37-42)は、2個の金具が錆着している。幅0.3~0.4cm、厚み約0.1cmのものが2個体で1セットになる。この個体も表面の劣化が著しいために明確ではないが、鉄地に刻目を入れた後、銀箔を被せているようである。(35-29)~(36-34)の辻金具に用いられた責金具に類似するものである。

i 銅製飾金具(図37-43) (37-43)は、銅製の飾金具である。使用された部位は不明であるが、「遺物出土状態」で述べたように、その他の馬具と一括で出土したので、馬の飾金具として用いられたものであろう。極めて脆弱な造りである。なお、外面などにも渡金の痕跡はまったく認められなかった。

全体の形状は、平面が二等辺三角形の1枚の銅版を巻き込みつつ、円錐形の袋状の筒をつくりだしている。先端部は、鋭く尖らせて細く長い棒状の部分をつくり、ごく緩やかな螺旋形を描くよう

に曲げて装飾性を持たせている。袋状になった部分の下端が欠損しているが、現状より極端に長くなるとは思えない。現状で長さ5.5cm、下端部の最大幅1.5cmを測る。

袋状部の内部には、木製の棒の先端部分が残っていた。木の棒は、この金具の内面の形状に合わせて、削って尖らせている。このように、この金具は、木の棒の先端に装着されて、その部分を装飾するものである。

3. 鉄器・銀製品

巨勢山75号墳から出土した鉄鏃は、鏃身部で16個体分が確認され、そのすべてを図化して、図38に示した。また、茎部を中心とする部位では、その先端部で10個体分を数えることができ、うち9個体分を同図に掲げた。これは、鏃身部などの破片として図化したものと、本来は同一個体であった可能性がある。「遺物出土状態」で述べたように、鉄鏃は、石室内堆積層の、各層から出土しており、中近世の遺物に混じって出土するものもあるので、本来の副葬数は、鏃身部として確認できた16個体を上回るものであったとみられる。

鉄鏃は、いずれも基本的には同工の長頸鏃である。鏃身は長三角形で逆刺を有する。片丸造を基本とするが、(38-12)のみ両丸造となっている。篋被部の関は台形関で、前後左右の全面に段を有する。

全長が判るものは、(38-1)のみで15.7cmを測る。鋒と茎の先端が欠損している(38-2)は現存長13.7cmを測り、やはり元は(38-1)と同程度の長さであったとみられる。篋被の長さが判るものは、(38-1)が5.7cm、(38-2)が5.4cm、(38-3)が4.8cm、(38-4)が5.2cm、(38-5)が5.7cm、(38-6)が4.7cmである。鏃身の最大幅は、1.7cmないし1.8cmを測り、やや大きいものに1.9cmの(38-10・23)と2.0cmの(38-16)がある。やや小さいものとしては、1.6cmの(38-10)と1.5cmの(38-6)がある。鏃身部の厚みは4～5mmである。重量は、完形に近い(38-1)で18.6gである。

なお、(38-2・4・9・13)の鏃身などの一部に、やや光沢のある漆状の黒色固形物が付着している。漆であるとするれば、漆が塗布された何からの有機質の物品がこれら鉄鏃に接する位置にあって、腐朽の過程で鉄鏃に漆のみが付着したなどと考えられるかもしれない。そうであれば、有機質の胡籜などを想定することができるだろう。

刀子(38-26・27)のうち、(38-26)は、刃部の一部を欠損するがほぼ完形に近い。茎に木質が残っている。錆およびこの木質のために観察しがたい部分もあるが、両関で各々約3mm程の直角の段がつく。全長16.3cm、関部での幅2.0cm、背厚4mmを測る。重量は、現状で31.5gである。

(38-27)は、(38-26)よりやや大形の刀子であろうか。鋒付近の破片とみられ、現状での最大幅1.5cm、背厚5mmを測る。

直刀(38-28)は、平造りによるもので、刃部幅2.4cm、背厚8mmを測る。外面に、鞘の痕跡とみられる木質が残っている。

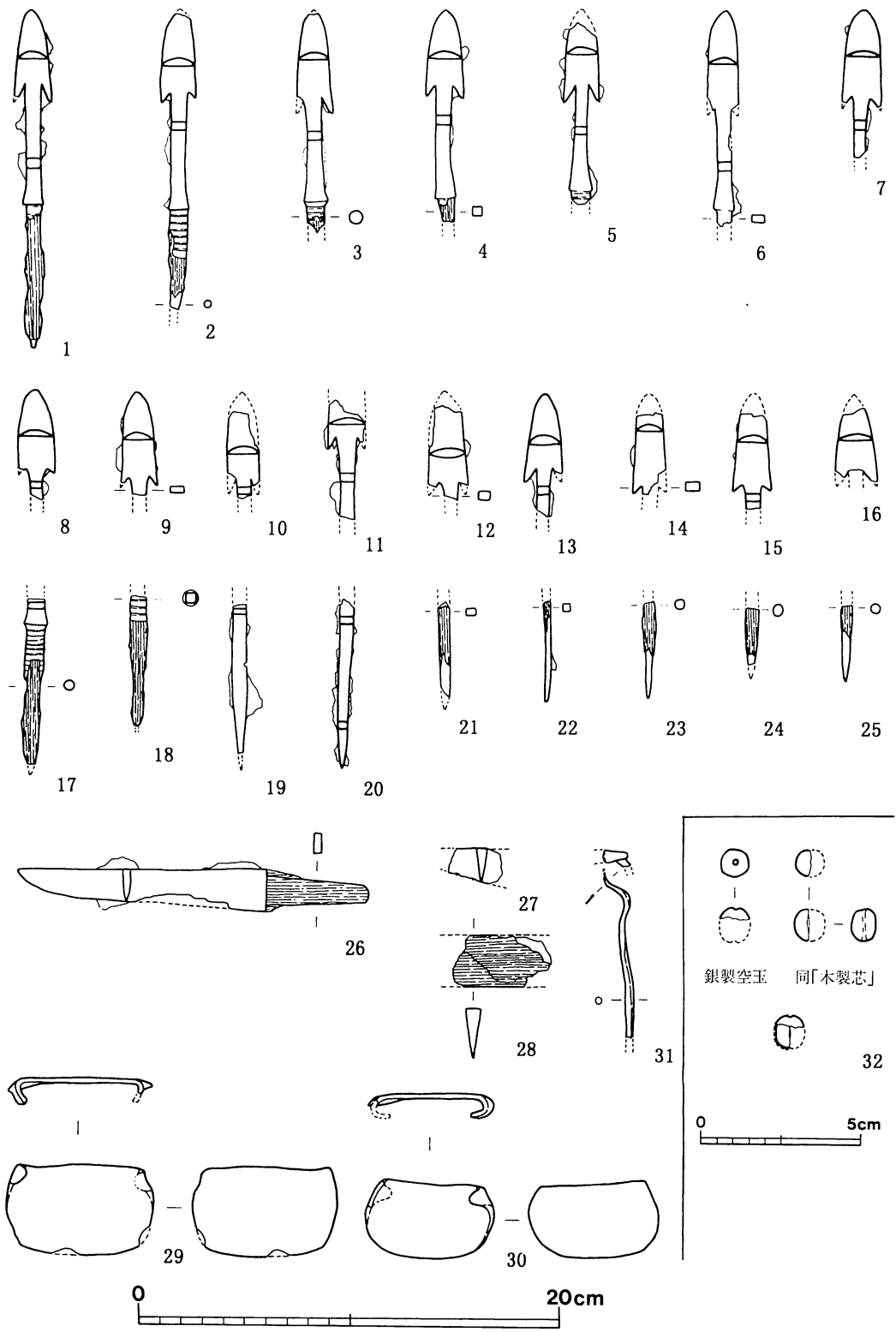


図38 巨勢山75号墳 出土鉄器・銀製品 (S. = 1 / 3 · 32は1 / 2)

ミニチュア鋤先は、2個体が出土した。(38-29)・(38-30)共に、長方板の一方の長辺が揺るやかな弧状をなし、これとは反対側の長辺の両端にある突起を折返して木部を固定する小さな空間をつくっている。その部分の厚みは5～7mmを測るが、木質は遺存していない。(38-29)は、長軸最大6.8cm、短軸最大4.2cmを測る。重量は現状で34.7gである。(38-30)は、長軸最大6.2cm、短軸最大3.5cmを測る。重量は現状で29.4gである。

(38-31)は、銀製釵子の一部とみられる。断面の直径が4mmの銀の棒の一方が細くなっており、さらに幅6mm、厚さ1mmの板状に変形させつつ、大きく屈曲している。板状になった部分の端部が、

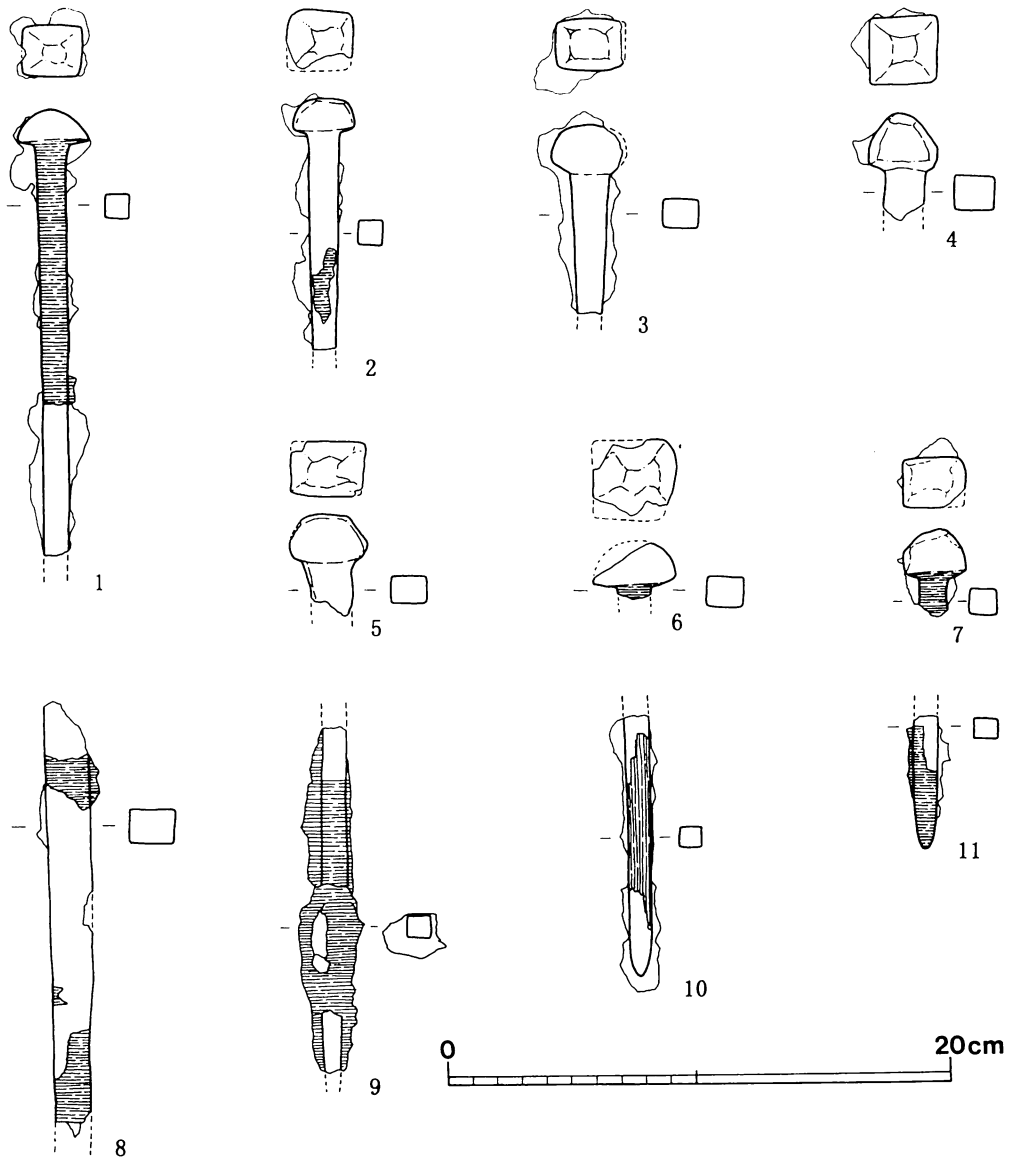


図39 巨勢山75号墳 出土鉄釘 (S. = 1 / 3)

現状では図示状態で上方に屈曲しているのは、この方向に大きな力が加わってこれより先が折れて分離したことを示しており、元は、棒状の部分から板状の部分にかけて、ほぼ直角に屈曲していたものとみられる。なお、棒状部分の断面形は、単なる円形ではなく、面取りされているかにも見えるが、現状では表面の劣化のために明確ではない。

(38-32)は、銀製空玉とその「木製芯」である。これらは、床面直上の堆積層から出土したもので、副葬時の原位置や状態を保っていたのではなかったが、両者が極めて近接した地点で出土したこと、図上右に示した「芯」の外径と空玉の内径がよく合致すること、半裁された状態になっているとみられる「芯」の中央に浅い溝状の窪みが認められることから、両者を空玉とその芯と考えたものである。

銀製空玉は、1個体の約1/2が残存しており、現状から元の直径は10mm程であったことがわかる。残存部分の中央に、径1.5mmの円孔が開いている。木製芯としたものは、現状では炭化したように黒くなっている。長径10mm、短径9mmを測り、元は完全な球形ではなかったらしい。半裁された状態で検出され、破断面に残る溝状の痕跡から、内径1mm程の穿孔があったことが判る。

図39には、木棺に使用されたとみられる鉄釘を示した。遺物出土状態で述べたように、これらは、石室内の堆積層から出土したもので、玄室の床面上で検出したものはない。細片化しているものも多いが、頭部を数えると7個体分を認めることができた。本来はより多くの釘が使用されていたのであろうが、数量的にみて2棺分以上もの鉄釘があったとも思われない。出土した鉄釘の型式にばらつきが無いことから、石室内に安置された木棺が1棺のみであったとの想定と矛盾しない。

鉄釘はいずれも身部の断面形が方形で、多くは約1cm角である。ただし、(39-8)はやや太く長辺1.8cm、短辺1.5cmを測る。(39-3)・(39-4)・(39-5)・(39-6)は、頭部付近のために太くなっており、一辺1.2~1.6cmを測る。頭部の平面形もいずれも方形で、一辺2.4cm~3.4cmを測る。身部との境界は前後左右に段をなしている。

表4 巨勢山75号墳 出土土器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
21-1 須恵器 杯蓋 75号墳石室内掘 乱層	口径 15.1cm (残存4/5程度) 器高 5.0cm 口縁部は僅かに外反して下方にのびる。口縁端部は内傾する面をなし、端面は極浅く窪む。口縁部と天井部の境界は、凹線となるが、その上辺はやや鋭く突出気味になる。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部2/3はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。直径0.5mm以下のチャートを僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	天井部内面に同心円状のあて具痕跡が残っている。
21-2 須恵器 杯身 75号墳石室内掘 乱層	口径 12.7cm 器高 5.1cm たちあがりは内傾した後、中位で極僅かに屈曲して上方にのびる。口縁端部は、内傾する面をなす。端面の上端辺は丸みを帯び、下端辺はやや鋭い稜線になる。端面中央は凹線状に浅く窪む。受部は外上方にのび、先端部はやや尖り気味になる。底部は扁平な感じで膨らまない。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ。同心円状のあて具痕跡が僅かに残る。	直径2mm大の石英を若干含む。0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	底部内面中央に同心円状のあて具痕跡が僅かに残っている。
21-3 須恵器 高杯 75号墳石室内掘 乱層	口径 11.5cm (残存1/5から回転復元) 器高 4.2cm (杯部高さ) 口縁部は、外上方にのび、端部近くで強いヨコナデによって僅かに外反して開く。端部は丸く収めている。口縁部と杯底部の境界は、つまみ出し凸帯が巡る。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ後ヨコナデ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ ・欠損	直径2mm大の石英を若干含む。0.5mm以下の石英・長石をかなり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	
21-4 須恵器 甕 75号墳石室内掘 乱層	口径 12.6cm (残存1/4から回転復元) 器高 15.4cm 頸部は、体部最大径の割りに比較的太く、外上方にやや長くのびる。頸部と口縁部の境界は上下からのヨコナデによる凸帯風の段になる。口縁部はこの段を境に傾斜角度を変えて外側に開き、端部はさらに外反して開く。体部は比較的明瞭に肩部をつくり、底部は丸い。 ・外面 ヨコナデのうち、口縁部は1条のヘラ描波状文、頸部は8条/cmの櫛描波状文。 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデのうち、肩部は2条の凹線文、体部上半には櫛描列点文。 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 極めて粗雑なナデ	直径2mm以下の石英を含む。0.5mm以下の石英・長石・角閃石をかなり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・暗赤紫色	口頸部および体部外面の一部に黒色釉。口頸部内面および体部内面の下半に緑色釉。 残存した破片に円孔はなかったが、元は櫛描列点文の文様帯の上から円孔を穿っていたと思われる。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
21-5 須恵器 短頸壺 蓋 75号墳石室内掘 乱層	口径 10.0cm (残存3/4程度) 器高 4.0cm 口縁部は内彎しつつ下方にのび、端部は内 傾する面をなす。端面の中央は強いヨコナデ により凹線状に窪む。体部は丸みをもって膨 らむが、天井頂部は平らになる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび2/3以上をヘラケ ズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の 石英・長石・角閃石 を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	焼成前の器形 の歪みが生じて おり、平面形が 円にならない。 口縁部が内彎し て下方にのびる はこの歪みのた めである。 21-6の身と セットになると 見られる。
21-6 須恵器 短頸壺 75号墳石室内掘 乱層	口径 8.2cm (残存2/3程度) 口縁部は短く、内上方に直線的にのびる。 端部は丸く収める。肩部は丸みがあり、残存 部分から丸みをもって下方にやや膨らむもの とみられる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径2mm以下の石 英を含む。0.5mm以 下の石英・長石をか なり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	蓋を被せた状 態で焼成された 痕跡が残ってい る。 21-5の蓋と セットになると みられる。
21-7 須恵器 短頸壺 75号墳石室内掘 乱層	口径 9.2cm (残存1/10からの回転復元) 口縁部は短く、極僅かに内彎しながら内上 方にのびる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・欠損	直径2mm以下の石 英をふくむ。0.5mm 以下の石英・長石を 含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・暗赤紫色	
21-8 須恵器 器台 75号墳石室内掘 乱層	裾部径 27.3cm 脚部高 34.4cm 脚部は直線的に裾へ広がっている。高さの 割りに裾部径が小さいので、ややスリムな印 象を受け。裾部は屈曲して鉛直方向により 近くなっており、裾端部は、強いヨコナデに よって外方につまみ出されて肥厚している。 裾端面の幅が厚くなっているため、立位状 態での安定感が増している。柱状部はつまみ出 し凸帯によって4段に分ける。最上段の凸帯 は2条1単位を基本としながらも、完周した 際に上下に重なる凸帯があつて部位によつて は3条以上に見える箇所もある。下2条の凸 帯は、1条1単位としている。また凸帯の上 下端は強いヨコナデにより、凹線となってい る。柱状部と裾部の境界にも2条1単位の凸 帯が巡る。 ・欠損 ・欠損 ・外面 柱状部はカキメ調整の後、各段に、 櫛描波状文(10条1単位、原体幅2 cm)を2ないし3段に分けて施す。 その後三角形スカシを3方に穿孔す る。裾部には1条のヘラ描波状文を 施す。 ・内面 下半はヨコナデ、上半は不定方向の ナデ。外面からスカシ穿孔を行うた め、粘土のはみ出しが残る。ただし、 最上段の2箇所は、面取り風の処理 をして、削りとっている。	直径4mm以下の石 英をふくむ。0.5mm 以下の石英・長石を かなり含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	裾部付近に、 焼成前の歪みが 生じており、こ のため、一部が 浮き上がって地 面に接していな い箇所がある。

図-遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
22-9 土師器 高杯 75号墳石室内掘 乱層	口径 11.0cm (残存 4/5 からの回転復元) 器高 12.6cm 杯部は、口径の割りに比較的深い。口縁部は外上方に直線的にのび、端部は丸く収めている。杯部口縁部外面の中位に、低く断面が丸いつまみ出し凸帯が1条巡る。口縁部と底部の境界もやや弱いながら同様の手法で稜をつけている。 長脚の脚部は、柱状部から裾分かけてラッパ上に開き、裾部は下方に屈曲して端部は丸く収めている。スカシは、1段の方形スカシを4方に配置している。 ・外面 ヨコナデ後、下半に櫛描波状文 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ナデ ・外面 ヨコナデ。スカシ穿孔後面取り風に切り口を削り取る。 内面 ヨコナデ	直径5mm大の石英・チャートを含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。雲母を僅かに含む。	ややあまい。	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	形態・調整は、須恵器のそれと同様であるが、還元炎焼成ではない。
22-10 土師器 把手付 椀 75号墳石室内掘 乱層	口径 9.8cm (残存 2/3 からの回転復元) 器高 8.9cm 口縁部は外上方に開きながら直線的にのび、端部は丸く収めている。体部中位の一箇所に、彎曲しながら外上方にのびる把手がつく。体部は直線的で、体部と底部の境界は、残存部分が少ないが、緩やかに屈曲するらしい。底部は平らである。 ・外面 ヨコナデ方向ハケ後ナデ 内面 ナデ ・外面 タテ方向ハケ後ヨコ方向ハケ後ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。0.5mm以下の角閃石を含む。	良好	・淡黄灰色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色	
21-11 土師器 甕 75号墳石室内掘 乱層	口径 13.5cm (残存 1/4 からの回転復元) 器高 16.2cm以上 口縁部は、外上方に広がり、中位で上方にやや屈曲する。端部は丸く収めるが、端部内面は強いヨコナデで凹線状の弱い段になっている。体部の形態は、やや扁平な球形を呈する。最大径はほぼ中央にある。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 タテ方向ハケ 内面 ヘラケズリ ・欠損	直径0.5mm以下の角閃石を含む。0.5mm以下の石英・長石を若干含む。0.5mm以下の雲母を僅かに含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	体部内面に工具が当たった痕跡が残っており、調整がやや粗雑であるとの感を受ける。
22-12 土師器 甕 75号墳石室内掘 乱層	口径 9.7cm (残存 2/3 からの回転復元) 器高 9.4cm 短い口縁部は、体部から屈曲して外上方に開く。端部は丸く収める。体部の最大径は肩部付近にあり、下位の径が小さい。体部の底部の境界は極めて緩やかに屈曲して、平底の底部につながっている。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデおよび指頭押圧 内面 ナデおよび指頭押圧	直径0.5mm以下の角閃石・石英・チャートを若干含む。	良好	・淡黄灰色 ・淡黄灰色 ・淡黄灰色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	色調 ・外面 ・内面 ・断面	備 考
23-13 瓦器 椀 75号墳石室内掘 乱層	口径 15.2cm 器高 5.5cm 口縁部は、内彎しつつ外上方にのびる。端部は僅かに外反して端部内面に凹線が巡る。体部から底部にかけての形態は丸みをもって膨らみ、底部外面には低い逆三角形の高台がつくが、底部が高台より突出して接地している。 ・外面 ヨコナデ後ヘラミガキ 内面 ヨコナデ後やや粗いヘラミガキ ・外面 ヨコナデ後やや粗いヘラミガキ。底部外面は未調整。 内面 横方向の密なヘラミガキ。底部内面は同心円状暗文。 ・外面 ヨコナデ	緻密。直径0.1mm以下の角閃石・長石・雲母を含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・白灰色	
23-14 瓦器 椀 75号墳石室内掘 乱層	口径 14.2cm 器高 5.0cm 口縁部は、内彎しつつ外上方にのびる。端部は僅かに外反して、内傾する面をなす。端面には凹線が巡る。体部から底部にかけての形態は丸みをもって膨らむが、底部は平らに近い。底部外面には断面逆三角形の高台がつく。底部は高台より突出しない。 ・外面 ヨコナデ後ヘラミガキ 内面 ヨコナデ後やや粗いヘラミガキ ・外面 ヨコナデ後粗いヘラミガキ。底部外面は未調整。 内面 ヨコナデ後、やや粗いヘラミガキ。 底部内面は同心円状暗文。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	緻密。直径0.1mm以下の角閃石・長石・雲母を含む。	ややあまい	・濃白灰色 ・濃灰色 ・白灰色	
23-15 瓦器 椀 75号墳石室内掘 乱層	口径 12.9cm 器高 3.6cm 口縁部はほぼ直線的に外上方にのびる。端部は丸く収める。体部から底部にかけての形態は浅く扁平な感を受ける。底部外面には断面が半円に近い高台を極めて粗雑に貼り付けている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ。底部は未調整。 内面 ヨコナデ後、極めて粗い暗文状のヘラミガキ ・外面 粗いナデ	直径0.1mm以下の長石・石英・角閃石をかなり含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・白灰色	体部外面の一部および口縁部内面の一部に燻しのかかっていない白色部が局部的に残っている。
23-16 土師器 皿 75号墳石室内掘 乱層	口径 8.6cm 器高 1.1cm 口縁部は内彎状に丸みをもって立ち上がり、端部はそれに従って丸く収める。底部は中央部付近で僅かに盛上がり、上げ底状になる。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ	直径1mmほどの石僅かに含む。0.5mm以下の雲母を含む。0.1mm以下の長石・角閃石をかなり含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	器壁の内外面にヘラ状工具が当たった痕跡がある。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	・外面 色調 ・内面 ・断面	備 考
23-17 土師器 皿 75号墳石室内掘 乱層	口径 9.7cm (残存1/4からの回転復元) 器高 1.3cm 口縁部は外傾状に直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。底部の中央部を欠損しているが、残存部分から、中央付近で僅かに盛上がり、上げ底状になることが判る。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ	直径0.5mmほどのチャートを僅かに含む。0.1mm以下の角閃石・長石・雲母をかなり含む。0.1mm以下のチャートを含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
23-18 土師器 皿 75号墳石室内掘 乱層	口径 12.0cm (残存1/7からの回転復元) 器高 1.6cm 口縁部は外形状に直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ ・欠損	直径0.5mm以下の角閃石をかなり含む。赤色斑粒を含む。0.1mm以下の雲母・石英・長石を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
23-19 土師器 支脚 75号墳石室内掘 乱層	口径 24.8cm (残存1/8からの回転復元) 器高 7.0cm 元の形態は、下端部径に対して口縁部径が小さい、筒状を呈すると見られる。口縁部および下端部は、ある程度成形した後、外面に断面方形の貼付凸帯を巡らしている。下端部の凸帯の上位には、断面がやや丸みをもった同様の貼付凸帯を巡らして装飾している。口縁部の凸帯の上部は外傾する面をなすが、この面から内面にかけては、丸みをもった曲面になる。下端部の凸帯は、接地部分が平らな面をなし、正置したときの安定感を増している。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 タテ方向の粗いハケ(3条/cm)の後、ヨコハケ。 ・ -	直径0.5mm以下の雲母を多量に含む。0.1mm以下の角閃石をかなり含む。長石・石英を含む。	良好	・暗赤褐色 ・暗赤灰褐色 ・暗赤灰褐色	口縁部凸帯の下端および、下端部の2条の凸帯の中間部に、墨書と見られる直線文を施している。 内面全体に煤が付着している。

第4章 その他の遺構

第1節 土坑1

主体部1の南西コーナー付近からさらに西側にかけて、後に掘り込まれた土坑である。南北は最大で1.6m、東西2.4～2.7m、深さは東側で0.9m、西側で0.5mである。西側はほぼV字形の断面形を呈する。中位の深さで獣骨が2箇所にとままって出土した。奈良国立文化財研究所 松井 章氏の鑑定によると、牛の成獣の左肩甲骨と第(3)・4・5・6・(7)頸椎などで、部位ごとに解体された後に投棄されたものであろうという。

所属する時期を確定できる遺物はないが、先述の75号墳でも、石室内の中世再利用面から多くの獣骨が出土しており、これとの関係を想定するのが妥当であろう。

第2節 墓道

74号墳から75号墳に至るには、74号墳からひとたび西へ斜面を下り鞍部となった後、再び尾根はわずかな高まりとなり、そこに75号墳が所在するわけであるが、墓道とみられるこの遺構は、その鞍部の最も低い位置に、谷地形をそのまま用いて設けられている。地山を掘削したもので、南側から北側へ上る形となり、現状で0.5mほど北側のほうが高い。

検出できた全長は4.4m、上辺の幅は最大で1.2m、下辺幅は0.3m程度である。地山を削り残して設けられた、階段とみられる平坦面を7段検出できた。埋土は暗黄褐色砂質土である。遺物は検出できなかったが、おそらく古墳時代後期のものとみられる。

第3節 土坑2

墓道の西に接した位置に掘られた土坑で、長径2.0m、短径0.7mの長楕円形を呈する。深さは0.5mである。埋土は上から黒褐色粘質土、暗褐色粘質土で、おそらく75号墳石室の中世期の再利用や土坑1に関連した時期に掘削されたものとみられる。

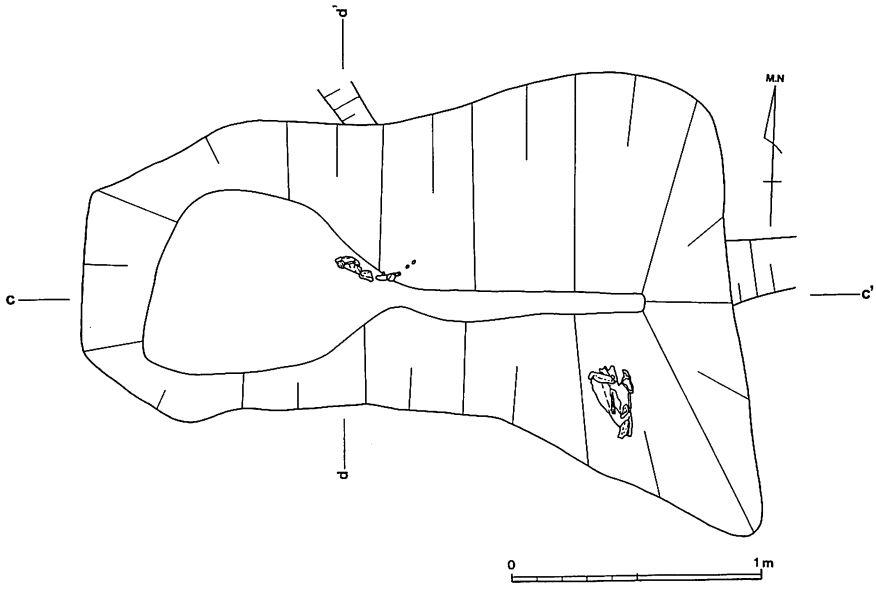


图 40 土坑 1 平面图 (S. = 1/30)

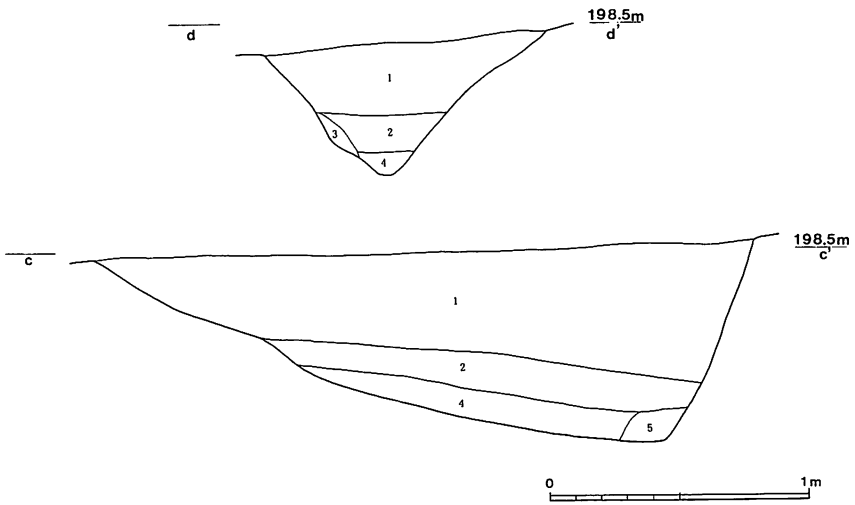


图 41 土坑 1 土层断面图 (S. = 1/30)

第5章 まとめ

今回の調査では、巨勢山古墳群の南西端に位置する尾根上に立地する巨勢山74号墳・75号墳の2基の古墳の発掘調査を行った。

巨勢山74号墳は、調査前に既に墳丘の北端が崖面となって崩落していたが、現状部分から一辺16m程の方墳であったとみられる。

主体部は墳頂部に2基を検出した。いずれも木棺直葬で、初葬棺である主体部1は、墳頂のほぼ中央に位置していた。主体部1の刳拔式舟形木棺は、検出面での長さ3.5m、幅1.9mを測り、棺の主軸はN-17度30分-Wに向けていた。出土遺物は、棺上から落ち込んだ状態の須恵器杯蓋2点・杯身4点・刀子3点・鉄鏝の茎とみられる小破片1点を検出した。このほか、棺の補修に用いたとみられる鉄釘1点が出土した。また、墓壙内には、棺を納める前に北西コーナー付近を中心に赤色顔料を散布した痕跡が認められた。さらに、墳丘西側の流出土から出土した須恵器杯蓋1点・杯身3点・高杯1点・甕1点および甕の破片は、元は、乱掘の著しかった南西コーナーの棺上に置かれていたものと考えられた。出土須恵器の型式から、主体部1の構築時期、すなわち古墳の築造期はTK47型式期と考えられる。

主体部2は、主体部1の墓壙東辺の一部を切って設けられたもので、主体部1と同様に刳拔式舟形木棺が直葬されたものである。棺の検出面での長さ3.5m、幅1.7mを測り、主軸はN-14度30分-Wに向けている。出土遺物は、棺の南西コーナーの棺上で、須恵器杯身1・無蓋高杯杯部1が検出された。両者は口縁部を上に向けて重ねて置かれていた。また棺上から落ち込んだ状態の鉄鏝が検出された。棺中軸よりやや西の鏝身部破片1点のほか、棺の南半中軸上で5本ほどがまとまって出土している。主体部2は、出土須恵器からMT15型式期の構築と考えられる。

巨勢山75号墳は、直径11mの円墳である。主体部は、主軸をN-49度-Eに向ける横穴式石室である。玄室の全長4.1m、奥壁幅2.0m、最大幅2.5m、玄門幅1.18mを測る。

玄室内床面には、棺の内面に塗布されたとみられる赤色顔料の堆積があった。棺は、石室内堆積層から出土した鉄釘から組合式木棺であることが判り、その大きさは赤色顔料の分布する範囲から、長さ2.8m、幅1.0mと復元することができる。なお、堆積層出土の鉄釘には個々の型式差が見られ数もあまり多くないこと、赤色顔料の分布範囲、羨道と閉塞石の状況、および石室内から出土した古墳時代の土器に年代幅が無いことから、本墳は単次葬であり、追葬は無かったと考えられた。

出土遺物は、原位置を保っていたものとして、玄室袖部の馬具がある。馬具は、金銅装楯円形鏡板付轡1・金銅装劔菱形杏葉3・木心鉄板張杓子形壺鐙2・円環状雲珠1・鞍2・辻金具6・鉸具4・銅製飾金具1が、良好なセット関係を保って出土した。この他、石室内の堆積層から、古墳時

代のものとして須恵器（杯蓋1・杯身1・高杯1・甕1・短頸壺2・同蓋1・器台1）・土師器（高杯1・把手付碗1・甕2・壺1）・鉄鏃16以上・刀子2・鉄刀片・銀製釵子片・銀製空玉片・鉄釘7以上が出土した。石室外に掻き出された土からはミニチュア鋤先2が出土した。なお、石室内堆積土中には中世以降の遺物も含まれていた。

以上、2基の古墳のほかに、74号墳と75号墳の中間的な位置に当たる鞍部で、階段状の7段の平坦面を伴う遺構を検出した。墓道の一部とみられるものである。また、時期不詳ながら、75号墳石室が中世に再利用された際の関連遺構かとみられる、土坑1・2が検出された。

さて、以上のように今次発掘調査によって多くのことが明らかになったが、特に75号墳では比較的豊富な出土遺物を検出した。中でも75号墳の調査で、比較的遺存状態が良好な横穴式石室から、副葬時の状態を保った馬具の1セットが検出されたのは特筆すべきことである。

それらは当時における馬具の、様式としてのセット関係を検証しうる材料になることは元より、75号墳の古墳としての歴史学的評価を視野に入れながら検討していけば、当時の社会の階層構造などを解明するための手掛かりとなる場合もあろう。このことについては第6章で改めて述べる。

ここでは、75号墳におけるその他の出土遺物のうち、銀製釵子片について見ておきたい。この釵子片は、本文中の「遺物出土状態」でも報告したとおり、玄室床面にのる攪乱層から出土したものであり、同様の層から、同じく銀製の空玉も出土している。ここで特にこの遺物を取り上げるのは、この種の銀製釵子は、渡来系遺物として注目される（関川1988）ものであり、そうであれば、75号墳被葬者の出自を示唆する可能性のある遺物と考えられるからである。

ところで、本書第6章の考察で、永井正浩氏は、巨勢山古墳群中のMT15型式期の横穴式石室として、75号墳のほか、408号墳・407号墳・431号墳・432号墳・71号墳を挙げられている。永井氏によれば、それぞれの石室は、多少の新古の差はあるがいずれも片袖式・胴張りなど形態的な特徴が類似した、同一の「石室系譜の一群である」という。

このような各石室が同一系譜上に繋がりに、なおかつ、それらが比較的短期間に相次いで築造されたことを踏まえた上で、各古墳から出土した副葬品を改めて見ると、渡来系の遺物とされる、銀製指輪や、ミニチュア竈形土器などが散見され、興味深い。

まず、71(4-16)号墳(田中1984a)は、75号墳の至近の距離にあって、尾根鞍部を挟む北側に所在した。石室内は攪乱が著しく、馬具・須恵器・土師器などの副葬品が石室内堆積土中に散在したという。そのような攪乱層から、刻目のある銀製指輪が2点検出されている。その他、ガラス製粟玉・金製空玉の出土が報告されている。

また、71号墳の墳丘裾部で、須恵器杯身5個体が伏せられた状態で検出されており、「一種の墓前祭祀であろう」と考えられた。そして、このような須恵器の使用法は、407号墳(木許1998)の墳丘裾部でもみられた。407号墳では、5個体の杯身のうち4個体が伏せられており、1個体は口縁部を上に向けていたが、そのあり方は、71号墳のそれと酷似していた。407号墳は、巨勢山古墳群

の北西斜面に位置する古墳で、75号墳や71号墳の立地点からは直線距離で850mほど離れている。それでも、この2古墳の墳丘裾部で検出された須恵器の出土状況は、これらの古墳における祭祀行為の共通性を示すものと考えられる。407号墳の石室内は後世の攪乱が著しく、初葬時の副葬品の詳細は不明であるが、このように、墳丘裾部にみられた須恵器のあり方が、石室系譜の共通性ととも、古墳被葬者間の関連性を強く示唆している。

408号墳（木許1998）はこの407号墳に隣接して存在した古墳である。408号墳の石室内は、やはり攪乱が及んでいたが、床面の一部は当初の状況を保っていた。そして奥壁付近からは、須恵器器台・広口壺・短頸壺・蓋杯のほか、複環式鏡板付轡などが出土し、側壁の玄門に近い位置からはミニチュア甕形土器が出土している。

431号墳（境谷8号墳）・432号墳（境谷9号墳）の2基（久野・中井1974）は、407・408号墳に程近い尾根上に位置していた。432号墳は攪乱のため出土遺物が乏しいため不明な点が多いが、431号墳では、墳丘の裾から鉄滓が出土している（千賀1988）。また、近隣の尾根上に所在し、同時に調査された木棺直葬墳である436号墳（境谷4号墳）では、鉄槌・鉄鉗など鍛冶関連遺物などが出土している。436号墳の築造年代は、出土土器から6世紀代とされる（久野・中井1974）。

これらの横穴式石室墳はいずれも後期前半のうちに築造されたものであるが、後期後葉になると、407・408号墳や431号墳などが所在する地点に近接する尾根上にある一群の古墳に、鉄滓の副葬が目立つ。そして、それらの古墳や、鉄滓の副葬が明確でない場合でも同一支群と認識できる古墳には、ミニチュア甕形土器ほかの渡来系の要素が散見されることが明らかにされている（藤田編2002）。374・414・415・418・420・421号墳がそれである。

後期後葉への集団としての系譜は、藤田氏が指摘するように（藤田2002）、単純には連続しないかもしれないが、少なくとも75号墳の築造期である後期前半の状況だけを見ても、上に掲げた古墳から渡来系の要素やそれに関連する鍛冶に携わる技術者集団の存在が浮かびあがってくる。

このように、75号墳の被葬者像として、出土した一片の銀製釵子だけでなく、同一石室系譜上にあるとみられる一群およびその周辺を見ることによって、いわゆる渡来人や鍛冶に携わった技術者集団と強い関係があることが想定できるだろう。

ところで、今回の調査では、75号墳に隣接する74号墳の築造期および追葬の時期が明らかになった。74号墳と75号墳のように、同一の尾根上に隣接して存在して立地している場合、一般に「単位集団」による造墓と考えられることが多い。もし、本例においてもそのように考えてよいとすれば、ここにまさに継続的な造墓活動を想定できる。既述のように、74号墳はTK47型式期に、75号墳はMT15型式期に築造され、74号墳の第2主体部は、75号墳の築造期に当るMT15型式期に構築されたことが判明した。つまり、74号墳第2主体部と、75号墳はほぼ同期に相前後して造られたとみられるので、これらの被葬者は、すでにある古墳に追葬された者と、新たな古墳を築造できた者の差を示していることになり、両者の関係を想像すると興味深い。

しかしながら、上述のように、75号墳の被葬者像を、渡来系の集団との深い関わりの中で理解しようとした時、74号墳はどのように位置付けられるのだろうか。

74号墳は、須恵器と若干の鉄器類を出土する木棺直葬墳であった。そのあり方は群集墳中の一古墳として一般的であり、突出する点は全く認識できず、渡来系の要素などを窺うこともできない。

こうした場合、仮に渡来系の人々の墳墓であっても、そこにその痕跡を全く残さない場合も多分にあったことを想定しておく必要もあろう。実際、一般に、小古墳において渡来系の要素を認識する場合、それが一個の銀製指輪であったり、一片の竈形土器である場合も多い。逆にいえば、それらの物品がたまたま副葬されなかったか、攪乱などの影響で検出されなかった場合には、そこから渡来系の要素を窺うことが全くできないこともありうるだろう。

それと共に、一つの尾根上に隣接するという立地条件の観点からのみ、支群や小支群・単位群などのグループ分けを行ない、しかもその支群などの背景に被葬者集団が系譜的に繋がることを想定するとすれば、そうしたグルーピング自体が危うい場合もあると思われる。古墳個々の関連性を復元するためには主体部構造や副葬品内容などからの、各種の検証が必要であるが、現状では、どのような条件によって古墳がその場所を占地したのか、墓域の賜与との考えも含めてなお検証しがたい問題が多く横たわっている。

さて、74号墳と75号墳の場合、隣接する立地条件から一つの単位群とみるのが常識的であろうが、主体部の構造が全く異なることや、副葬品内容に系譜的に繋がるものを見出せないことがある。それらは例えば時期差で説明できるかもしれないが、系譜の違いを反映している可能性も完全には否定できない。今次調査地の場合、74号墳と75号墳の中間的な地点で断続的な墓道が検出されたが、仮にこれが両墳を繋ぐ状態で検出されたとしても、そこにも様々な解釈が成り立つ可能性があるだろう。

以上のように、今次調査で明らかになったことも多いが、新たに派生するなお解明するべき課題も多く見出せる。それらは、群集墳一般の問題として、資料の総合化の方法と共に今後委ねざるを得ない。

文献註

- 網干善教 1960 「小殿古墳」【奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）】第3集
1961 「御所市 小殿2号墳」【奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）】第4集
- 伊藤秋男 1978 「名古屋市大須二子山古墳調査報告」【小林知生教授退職記念 考古学論集】
- 入倉徳裕 1990 「御所市 戸毛向井6・7号墳発掘調査概報」【奈良県遺跡調査概報1989年度（第2分冊）】
- 河上邦彦 1977 「大和の群集墳概観」【横田健一先生還暦記念 日本史論叢】
- 木許 守 1998 「巨勢山407・408号墳」【大和を掘る】16（橿原考古学研究所附属博物館）
- 久野邦雄・中井一夫 1974 「大和 巨勢山古墳群（境谷支群）－昭和48年度発掘調査概報－」（奈良県教育委員会）
- 御所市教育委員会 1987 「工業団地開発に伴う巨勢山古墳群第Ⅰ次・第Ⅱ次発掘調査現地説明会資料」
1989 「ゴルフ場開発事業に伴う第1回巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」
1990 「ゴルフ場開発事業に伴う第2回巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」
- 小林正春 1989 「長野県における横穴式石室の受容（伊那谷）」【第10回 二県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容】（千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所）
- 白石太一郎 1973 「大型古墳と群集墳－群集墳の形成と同属系譜の成立－」【橿原考古学研究所紀要 考古学論攷】第2冊
1974 「吐田平古墳群」【奈良県の主要古墳Ⅱ 緑地保全と古墳保護に関する調査報告2】（奈良県教育委員会）
- 白澤 崇 編 1999 「石ノ形古墳」（袋井市教育委員会）
- 関川尚功 1988 「古墳時代の渡来人－大和・河内地域を中心として－」【橿原考古学研究所論集】第九（吉川弘文館）
- 田中一廣 1984 a 「御所市 巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報」【奈良県遺跡調査概報1983年度（第2分冊）】
1984 b 「奈良県御所市 巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」【奈良県遺跡調査概報1983年度（第2分冊）】
- 田辺昭三 1996 「陶邑古窯址群Ⅰ」（『平安学園研究論集』第10号）
- 千賀 久 1988 「寺口忍海古墳群の位置づけ」【寺口忍海古墳群】（『新庄町文化財調査報告』第1冊）
- 千賀 久・田中一廣 1983 「御所市 巨勢山古墳群ミノヤマ支群発掘調査概報」【奈良県遺跡調査概報1982年度（第2分冊）】
- 寺西典子 1983 「南山大学所蔵の馬具について」【南山大学人類学博物館官報】第11号
- 奈良県教育委員会 1998 「改訂 奈良県遺跡地図」第3分冊
- 服部聡志 1985 「群集墳の成立過程に関する一考察－大和を中心に－」【『ヒストリア』第105号】
- 藤田和尊 1985 「奈良県御所市室 境谷10号墳発掘調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第4集）
2002 「古墳時代の遺構・遺物に関するまとめ」【巨勢山古墳群Ⅲ】（御所市文化財調査報告第25集）
- 藤田和尊編 1987 「巨勢山古墳群Ⅱ」（『御所市文化財調査報告書』第6集）
2002 「巨勢山古墳群Ⅲ」（『御所市文化財調査報告書』第25集）
- 松本洋明 1988 「十六面・薬王寺遺跡の中・近世土器に関する考察」【十六面・薬王寺遺跡】（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第54冊）
- 宮代栄一 1986 「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」【日本古代文化研究】第3号（古墳文化研究会PHALANX）
1996 「古墳時代の金属装鞍の研究－鉄地金銅装鞍を中心に－」【日本考古学】第3号（日本考古学協会）

第6章 考察

奥田 尚

巨勢山75号墳の石室材について

永井 正浩

巨勢山75号墳の横穴式石室について

木許 守

出土馬具からみた巨勢山75号墳の階層的位置

巨勢山75号墳の石室材について

奥 田 尚

古墳の石室に使用されている石材を裸眼で観察した。使用されている石種は黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母石英閃緑岩A、角閃石黒雲母石英閃緑岩B、ポーフィロイド様圧砕岩である。奥壁と玄室の右側壁（西側壁）には黒雲母花崗岩が主として使用され、羨道部の右側壁（西側壁）と石室の左側壁（東側壁）には主として角閃石黒雲母石英閃緑岩Bが使用されている。石種の特徴について述べる。

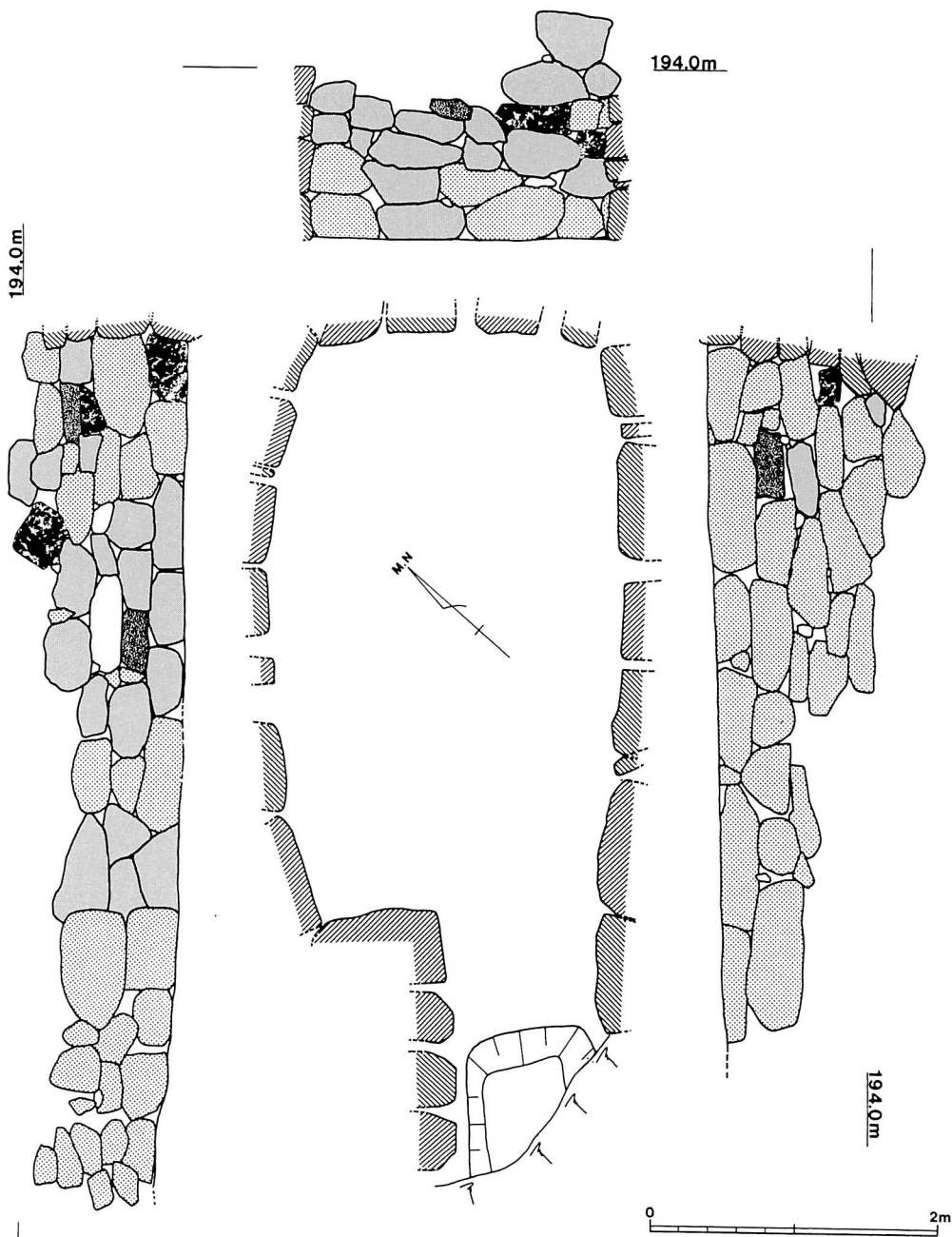
黒雲母花崗岩：色は灰白色で、黒色の捕獲岩を含むものもある。捕獲岩は暗灰色、変斑糲岩質であり、長径が15cmに及ぶ。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が中である。長石はごく僅かであるが斑状を示すものがある。斑晶の長径は1cmである。長石は灰白色、粒径が1～7mm、量が多い。黒雲母は黒色板状で、粒径が2～5mm、量が中である。

角閃石黒雲母石英閃緑岩A：色は暗灰色で、黒雲母が球状、粗粒であり、石英、長石、角閃石は細粒である。石英は無色透明、粒径が0.5～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5～5mm、量が多い。黒雲母は黒色、球状で、粒径が2～6mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状、粒径が0.5～1.5mm、量が多い。






角閃石黒雲母石英閃緑岩B：色は灰白色で、球状の黒雲母が散在する。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～7mm、量が多い。黒雲母は黒色、球状、粒径が2～6mm、量が中である。角閃石は暗緑色～黒色、柱状で、粒径が1～7mm、量が僅かである。

ポーフィロイド様圧砕岩：色は灰緑色で、花崗岩質岩の圧砕岩である。構成粒は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が中である。長石は青灰色、粒径が2～7mm、量が非常に多い。黒雲母は茶褐色、板状～粒状で潰れている。粒径が2～5mm、量が中である。

当古墳が位置する付近は風化が進んで、山地では石材が得られない。古墳の南方には黒雲母花崗岩が分布し、角閃石黒雲母石英閃緑岩Bと黒雲母花崗岩が接する付近には角閃石黒雲母石英閃緑岩Aが分布する。水泥から朝町へ通じる谷には黒雲母花崗岩の礫が多く見られ、角閃石黒雲母石英閃緑岩AやBの礫、圧砕岩の礫も僅かに見られる。古墳より北や西になれば角閃石黒雲母石英閃緑岩Bの礫が多く見られる。葛城川の礫は主として角閃石黒雲母石英閃緑岩Bである。石材の採石地と石室の壁との関係を見れば、奥壁と玄室の右側壁（西側壁）の石材は朝町の谷から採石され、左側壁（東側壁）羨道部の右側壁（西側壁）の石材は葛城川流域の谷から採石されたと推定される。



凡例

-  黒雲母花崗岩
-  角閃石黒雲母石英閃緑岩A
-  角閃石黒雲母石英閃緑岩B
-  ポーフイロイド様圧砕岩
-  未調査

巨勢山75号墳の石室材の石種

巨勢山75号墳の石室材の石種と直径

石種	＼長径 (cm)	11～ 20	21～ 30	31～ 40	41～ 50	51～ 60	61～ 70	71～ 80	81～ 90	91～ 100	101～ 110	合計
左側壁 東側壁	黒雲母花崗岩		1			1						2
	角閃石黒雲母石英閃緑岩A		1									1
	角閃石黒雲母石英閃緑岩B	3	3	1	7	3	6	5	1	1	2	32
	ポーフィロイド様圧砕岩				1							1
	小 計	3	5	1	8	4	6	5	1	1	2	36
右側壁 西側壁	黒雲母花崗岩		2	5	4	5	1	2				19
	角閃石黒雲母石英閃緑岩A			1	1	1						3
	角閃石黒雲母石英閃緑岩B	4	4	7	5	6	1	1	2			30
	ポーフィロイド様圧砕岩				2							2
	未 調 査		1				1					2
	小 計	4	7	13	12	12	3	3	2			56
奥側壁 北側壁	黒雲母花崗岩		4	5		4	3					16
	角閃石黒雲母石英閃緑岩A		1			1						2
	角閃石黒雲母石英閃緑岩B			2	1	1	1	1				6
	ポーフィロイド様圧砕岩			1								1
	未 調 査		1									1
	小 計		6	8	1	6	4	1				26
合 計		7	18	22	21	22	13	9	3	1	2	118

巨勢山75号墳の横穴式石室について

永井正浩

報告でも触れたとおり、この古墳は6世紀前半の築造であり、横穴式石室の編年を考えるうえで貴重な情報を得ることができた。そこで、石室の石積みの特徴、玄室の平面・立面形態をまとめた後に、6世紀前半の巨勢山古墳群に築かれた横穴式石室の特徴について述べる。

1. 石室の構築技法について

石室に使用する石材は、大(約1.5m×0.5m)、小(約0.6m×0.3m)の大略長方形を呈する自然石と、人頭大の自然石を組み合わせて丁寧に横に揃えて構築している。最下段の石材には比較的大きいものを用いているものの、腰石に相当するような石材は用いられていない。石積みの単位については小単位で6列、大単位で2列確認することができた。大単位の一つは、2列目で石積みのレベルを水平に揃えようとする面、もう一つは5列目でこれより上方で持ち送りをを行い石室の変化点となる面である。

この特徴から見た石室の年代を考えると、構築方法を各部位ごとに属性分析した太田宏明氏の分類(太田1999)に合わせると、この石室は2類(奥壁O.2、玄室側壁G.S.2、袖部S.2、羨道側壁S.S.2)に相当し、MT15~TK10型式期の石室の特徴となる。石室から出土した須恵器の型式がMT15型式であることから両者の年代は矛盾しない。

次に、構築方法から見た石室の特徴について述べる。石材をみると、ほとんどは面を揃えて積んでいるものの、角に丸みを帯びたものが多い。つまり石材を調整するための加工を十分に行っていない。また、石材を積み上げる際に原則として下の2石に架かるような石積みを行っているが、奥壁や左側壁で下段の石の真上に積み目地が縦に揃う個所があり、十分な大きさの石材を確保することができなかったことがわかる。また、墓壇に石材を設置する方法をみると、最下段の石材を固定するための掘り込みが浅く、部分的には石室の床面と石材の底面が一致する所すらある。以上のことから、この石室は石材、石積み、石室の基礎の掘り方の3点からみると、非常に構造的にもろい(崩れやすい)ものであると言える。

2. 石室の平面・立面形態について

玄室の各壁の持ち送りをみると、両側壁を直立させ奥壁を前傾させるように構築している。また、奥壁の一部で持ち送りに使われている石材を1石検出していることから、天井構造にあたる部位で急激に持ち送る可能性が高い。持ち送りの石積みは、この変換点より上部において、奥壁と側壁の

コーナーに石材を架ける方法をとっている。このため、玄室の横断面は長方形の上辺の2点を切り落とした五角形に近い六角形であり、天井石は玄室幅よりも小さいものを架けている。

羨道は短く、閉塞石を用いて玄室を塞ぐと同時に土で羨道を埋めている。そのために構造は簡単なものである。また、幅が1 m強と狭く棺を運ぶための十分な広さが無いが、これは羨道の長さに加えて袖部までしか天井石がなく、入口部分が開放された状態で葬送儀礼を行っている可能性が高いことから、支障はなかったものと考えられる。

この石室構造に近似した構造の石室に、奈良県椿井宮山塚古墳をあげることができる。この古墳については、辰巳和弘氏、森下浩行氏を中心としたグループによって詳細な実測図が報告されている(辰巳・森下・吉村・辻川1993)。この中で森下氏は、この石室が大阪府高井田山古墳や大阪府七ノ坪古墳の上部構造を表しているとする。この石室の石積みは上下二段に分かれ、下部は横に石材を揃えてできるだけ垂直に構築し、上部は各壁に共有して石材を積み上げドーム状に構築している。また、この変化点は羨道の天井石を架けるレベルと一致する。羨道は短く、天井石は非常に小さな石材で構築する。また、北垣聰一郎氏は、大和の横穴式石室の石積み技法について考察を行っており(北垣1984)、その中で椿井宮山塚古墳のようなドーム状に膨らむ窮窿式の石室の一群を取り上げ、上部に隅角の四壁が無いことから、これらの石室を井戸組技法の原理を利用して組み上げたものとしている。

巨勢山75号墳の石室はこの石室ほど玄室幅がなく、天井部がドーム(窮窿式)状であったことを想定することはできないが、石室の構築方法については一致する点が多く、上部構造を復元するうえでは興味深い。残念ながら75号墳では持ち送りの変化点と羨道の天井のラインを結び付ける個所が破壊されていたが、レベルを揃えていた可能性は高い。後に述べるように巨勢山古墳群中には、このような窮窿式に近い構築方法を用いた石室が多い。

森下氏が挙げる高井田山古墳や七ノ坪古墳については、上部構造の手がかりがなくこの石室と同じ構造をしていた可能性を指摘しているが、このような天井構造をもつ横穴式石室の一群が近畿地方に存在していた可能性は高い。また、これらの石室は全長6 m以下の小型の横穴式石室に限り用いられている。森下氏は七ノ坪古墳についても5世紀末の築造とし、この石室構造が古式の横穴式石室の特徴であるとしているが、巨勢山古墳群の例からも、この横穴式石室構築技法の一群が6世紀前半(TK10型式期)まで長期にわたり用いられた可能性がある。

平面形態については、75号墳の石室は玄室の平面が横に膨らんでいる。このような形態の石室を胴張り形と呼称し、東海地方などで広く用いられている石室の形態名称によく用いられている。しかし、この地域の石室は袖の石材を1石を立てることによって構築する、いわゆる立柱石の技法を多用しており、平面形態以外、とくに構築方法については共通しない。

このような平面形態をもつ近畿地方の石室には、京都府物集女車塚古墳(秋山・山中編 1988)が存在する。立面形態では75号墳と共通する点は少ないものの、玄室の幅が広く保っているにもか

かわらず、使用する石材が極めて小さく構造的に不安定なものになっている。

土生田純之氏は、東海地方に多く散見できるこれらの石室築造技法について、あまりにも形態差が大きいことから、これらを型式の一つとして設定することが難しいとしている。また、この地方の石室の中で最も古い岐阜県陽徳寺裏山古墳群の石室が丸みをもつ石材を用いており、玄室平面に丸みをもたせていることから、あくまでも不安定な石材で構造的に安定した石室を構築するために考え出された方法であるとしている（土生田1991）。

3. 巨勢山古墳群中の6世紀前半の横穴式石室について

巨勢山古墳群の中で、MT15型式期に築造された横穴式石室については次の古墳がある。なお、全て右片袖の石室である。

巨勢山407号墳 巨勢山の北西の尾根に築造された古墳。石室全長5.7m、玄室長3.6m、玄室幅（奥壁）1.8m、玄室幅（最大）2.0m、玄室高（推定）2.1m、羨道長2.1m、羨道幅最大1.3m、羨道高1.7mである。408号墳と同じく胴張り形の石室で、奥壁を2段に、側壁を下部から持ち送る方法は共通しているが、玄室幅が狭いことや胴張りの膨らみが浅いなど、異なる要素を観察することができる。出土遺物は、墳丘より杯身が並べられた状態で出土している。MT15型式期のもので、口縁端部に凹線を持つものと持たないものが混在している。また、口径が10.8cmのものがあることから、同型式のなかでも古式のものを含む。

巨勢山408号墳 さきの407号墳と同じ尾根に築かれた古墳。石室全長6.4m、玄室長4.0m、玄室幅（奥壁）2.25m、玄室幅（最大）2.8m、玄室高（推定）2.6m、羨道長2.4m、羨道幅最大1.4m羨道高1.2mである。数値にもあるとおり胴張り形の横穴式石室であり、玄室の規模も巨勢山75号墳とほぼ同じである。奥壁の石材は75号墳と同じく2段階に分けて構築しており、上部の構造は側壁と共有するように石材を架けて持ち送りを行っている。しかし、両側壁が基底石の上から持ち送る手法であることや、羨道が発達し天井石を架けていることから75号墳よりも新しい石室の要素を取り入れている。出土した須恵器からMT15型式期の築造であるが、坏身の口縁部に凹線がなく75号墳より新しい要素を加えている。

巨勢山431・432号墳 境谷支群8号墳・9号墳として報告された両墳（久野・中井1974）は、巨勢山の北寄りの西側に伸びる尾根に位置し、407・408号墳に近い。概要報告のため石室の細部については不明な点が多い。431号墳は石室全長5.9m、玄室長3.75m、玄室幅（奥壁）2.1m、玄室幅（最大）2.25m、玄室高（推定）2.7m、羨道長2.15m、羨道幅最大1.1m羨道高1.4mである。432号墳は石室全長4.4m、玄室長2.95m、玄室幅（奥壁）1.9m、玄室幅（最大）2.05m、羨道長1.45m、羨道幅最大1.0m、石室の高さについては不明である。共に胴張り形の石室で、羨道部は未発達であり袖部にのみ天井石を架けている。共に側壁の傾きは上下2段に分かれ下段は傾きが少なく、上半は壁を共有するように石材を架けて持ち送りを急としている。写真で判断する限りでは、431号

墳の持ち送りの角度の変化点は羨道の天井石のレベルと一致する。出土した須恵器から、共にMT15型式期の築造である。

巨勢山71号墳 栗坂小字タケノ口に所在する71号墳（田中1984）は巨勢山の南西の尾根に位置し、山の南に入る谷にあたることから、75号墳に近い位置に築造している。石室全長6.95m、玄室長3.85m、玄室幅（奥壁）2.0m、玄室幅（最大）2.45m、羨道長3.15m、羨道幅最大1.45m、羨道高1.35mである。奥壁の石材は2段に分けて構築しており、上部の構造は側壁と共有するように石材を架けて持ち送りを行っている。しかし、側壁のうち左側壁が基底石の上から持ち送る手法であることや、羨道に天井石を架けないものの、全長が3mを超えるなど新しい要素を有する。出土した須恵器から、この古墳はMT15型式期の築造である。

4. 巨勢山古墳群における横穴式石室導入の特質

これらの横穴式石室は、いずれもMT15型式期の築造である。それぞれの位置を見ると巨勢山の西斜面から南斜面にかけて小群を有するものの、分布に偏りが無い。石室は全て片袖式であり、使用する石材が原因で幅の程度こそあれ玄室の平面が胴張り形を呈している。これらは巨勢山古墳群で創り出された築造方法を用いた石室系譜の一群といえる。

これらの横穴式石室をみると、それぞれの石室には新しい要素と古い要素を抽出することができる。先に述べた椿井宮山塚古墳の石室構造が古式の特徴を残しているものと仮定すると、それぞれの石室について次のように分類することができる。

古式の様相

- ①石室の壁面の構築が2段階に分かれ、下部は直立し、上部は各壁を共有するように石材を架けて持ち送る。（全古墳 奥壁、431号墳、432号墳、71号墳右側壁、75号墳）
- ②羨道は短く、閉塞部以外には天井石を架けない。（431号墳、432号墳、75号墳）

新式の様相

- ①石室の側面は基底石の直上から明確な持ち送りを行う。ただし、上部は各壁を共有するように石材を架けて持ち送っており、古式の方法を踏襲している。（407・408号墳、71号墳左側壁）
- ②羨道は長く、天井石を架ける。（407・408号墳）

以上のことから、須恵器の型式では一致するこれらの古墳を上記の要素で分類すると、古式の方法を踏襲した75号墳・431号墳、432号墳、新式の要素を取り入れた407・408号墳、その中間的な様相を呈する71号墳の3グループに分けることができる。71号墳の側壁については奥壁の図面のみ掲載されていることから、実測時点での石室の変形の可能性も考えられるが、羨道が3mを超すにもかかわらず天井石を架けない状況を見ると、やはり過渡的な要素を持つ石室と考えたい。これら3グループによる分類は、407・408号墳のように須恵器の型式による前後関係がみられるものが、同グループに入っていることから、これをすなわち時期差として扱うことはできない。あくまでも支

群間での特徴としてとらえたい。

最後に、これら巨勢山古墳群に用いられた小型の横穴式石室と大型横穴式石室とを比較する。MT15型式期と考えられる大型の横穴式石室をみると、奈良県市尾墓山古墳（河上1984・1995）に代表されるように側壁は基底石から持ち送り、羨道は長く天井石を架ける構造となっている。小型の横穴式石室は、高井田山古墳（安村・桑野編1996）をみるとTK23型式期には出現している。この石室は朝鮮半島、特に百済の石室を忠実に模倣している。しかし、寺口忍海D-27号墳（吉村・千賀編1988）のようにTK47型式期には大型の横穴式石室に形態を模倣する要素を加えた石室が登場する。但し、特に羨道長に表れるようにヴァリエーションが多く、畿内地域においても地域差が存在する。これは、石材が限定された中で横穴式石室を構築することにより、大型の横穴式石室の形態を表現することが難しいという要因が考えられる。小型の横穴式石室が大型の石室を模倣できるようになるのは、太田氏が分類する3類の大型の石材を加工する技術が普及する段階、TK43型式期のことである。

巨勢山古墳群に造られたこの時期の横穴式石室をみると、たとえ新しい要素をもつ石室であっても胴張り形の平面形を持ち、天井石を架けるために持ち送りを行うなど、従来の構築方法を踏襲している。そのため、ここでも当時の大型の横穴式石室の形態を忠実に模倣するには至っていない。このような石室築造の多様性が、6世紀前半の横穴式石室の導入の状況を表している。

文献註

- 秋山浩三・山中 章 編 1988 『物集女車塚古墳』（『向日市文化財調査報告書』第23集）
- 太田宏明 1999 「『畿内型石室』の属性による社会組織の検討」『考古学研究』第46巻第1号
- 河上邦彦 1984 『市尾墓山古墳』（『高取町文化財調査報告』第5冊 高取町教育委員会・橿原考古学研究所）
- 1995 「第一章 大和の横穴式石室の編年と諸問題」『後・終末期古墳の研究』（雄山閣）
- 北垣總一郎 1984 「横穴式石室構築技法の一考察」『橿原考古学研究所論集』第六（吉川弘文館）
- 久野邦雄・中井一夫 1974 『大和巨勢山古墳群（境谷支群）昭和48年度発掘調査概報』（奈良県教育委員会）
- 辰巳和弘・森下浩行・吉村公男・辻川哲郎 1993 「平群谷古墳群再論（上・下）」『古代文化』第45巻第10号・12号
- 田中一廣 1984 a 「御所市 巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度（第2分冊）』
- 土生田純之 1991 「第五章 西三河の横穴式石室」『日本横穴式石室の系譜』（学生社）
- 安村俊史・桑野一幸編 1996 『高井田山古墳』（『柏原市文化財概報1995-II』）
- 吉村幾温・千賀 久 編 1988 『寺口忍海古墳群』（『新庄町文化財調査報告』第1冊 新庄町教育委員会・橿原考古学研究所）

出土馬具からみた巨勢山75号墳の階層的位置

木 許 守

1. 75号墳出土の鏡板と首長墳出土の鏡板

巨勢山75号墳の比較的残存状態が良好であった石室内において、原位置を保った状態で、1セットになる馬具が検出された。

後期古墳の出土遺物の中でも、馬具は、古墳被葬者の階層性を表出する場合があるとの立場で研究が深化されてきた。例えば、尼子奈美枝氏によれば、大和では鏡板・鞍・鐙・杏葉・雲珠の5点をセットで副葬する後期古墳は、それぞれの所在地域で卓越する盟主的古墳と見なされるという(尼子1993)。尼子氏の、横穴式石室の玄室床面積と出土馬具のセットとの相関関係に着目した検討方法は、資料の提示法を含めて説得力に富むものである。

尼子氏はさらに、金銅装板状鏡板、鉄製鏡板のそれぞれの出土古墳を取り上げて、両者の馬装の違いが、被葬者の階層差に起因する場合があります、前者が後者に対して優位にあることを具体的な資料でもって論じた(尼子1997)。この中でまた、尼子氏が、大和においてはこの馬層の違いをそのような階層差では説明できないとしたことは留意される。

このような研究成果に照らして考えると、巨勢山75号墳出土馬具が、金銅装の鏡板・杏葉を始めとする鐙・雲珠・鞍のセットを備えていることが改めて注目されるのである。

しかしながら、75号墳自体は、墳丘径11mの円墳で、群集墳中の一古墳に過ぎない。その玄室規模は比較的大きいといえるかもしれないが、尼子氏が例示した独立墳(尼子1993)などと比べると、やはり相対的に小さい。75号墳は、立地や墳丘・石室規模などの古墳のあり方からすれば、ほかの独立墳とは同列に扱えないのは一目瞭然である。

これらの点を踏まえて、今一度75号墳の出土馬具を見ると、轡には金銅装の鏡板が用いられたがその形態は下縁部が緩かに挟り込まれた楕円形であったこと、杏葉は金銅装剣菱形杏葉であること、鐙は木心鉄板張壺鐙であったが左右で形状が揃わないこと、雲珠は円環状の比較的簡素なものであるが脚金具には金銅装を施していること、鞍は白木のそれが用いられたことなどを、その特徴として挙げられるだろう。これらを、個別に検討していくと、大和のほかの独立墳として築造される古墳との格差が明確になるかもしれない。

例えば、先に尼子氏が例示した各地の盟主墳的な独立墳から出土した金銅装の板状鏡板は、形状が判るものはf字形、鐘形、心葉形、およびいわゆる車輪形の装飾がある楕円形の鏡板であった。それに対して、巨勢山75号墳の鏡板は金銅装のそれではあったが、その鉄地板の形状は通有の鉄製

楕円形鏡板の形状と同様であった。こうした鏡板の形状に、それら独立墳と群集墳中の一古墳である75号墳の間にある格差が反映されている可能性を見出すことができるだろう。

2. 巨勢山古墳群における75号墳の占める位置

(1) 巨勢山古墳群での馬具出土古墳

それでは、このようにあくまでも群集墳中の一古墳と認識できる75号墳であるが、金銅装の馬具を保有していたことで、少なくとも巨勢山古墳群の中では階層的に上位に位置していたといえるだろうか。

このことは、75号墳の、巨勢山古墳群中における位置付けを考えることでもある。この点を検討するために、さらに75号墳出土の鏡板に注目してみよう。

本書、第1章第3節の表1(12・13頁)に記されたように、巨勢山古墳群では現在までに85基の古墳が発掘調査されている。この内、馬具が出土した古墳は18基で、全体の21%に過ぎず、馬具の副葬が古墳群全体に普遍的に行われたものではないことが判る。この場合、盗掘の影響や、被葬者が生前には馬具を所有しておりながら墓にはそれを副葬しない場合があることなどは考慮しておく必要があるが、現状では、馬具の副葬行為自体が古墳被葬者の、比較的高い階層性を反映しているとみることができよう。

では、馬具出土古墳の中で、75号墳はどのような位置を占めるだろうか。

馬具出土古墳18基のうち轡の副葬が確実な古墳を見ると、さらに絞られて11基の古墳になる。このうち、415・420号墳の2基(藤田編2002)は引手壺や円環部のみが破片で出土したのみで、鏡板の型式は不明である。また、640号墳(糸池南古墳 田中1984)の轡は細片化しており、やはりその型式が不詳であるが、後述するように金銅装f字形鏡板付轡を本来伴っていた可能性がある。

残る8基をみると、木棺直葬墳の、42号墳(ミノヤマ2号墳 千賀・田中1983)・146号墳(御所市教委1989)・371号墳(1997年御所市教委調査)から鉄製素環鏡板付轡が出土し、横穴式石室墳でも407号墳(木許1998)で同様の鉄製素環鏡板付轡が出土している。

また、そのほかの横穴式石室墳としては、408号墳(木許1998)から鉄製複環式鏡板付轡が、431号墳(境谷8号墳 久野・中井1974)から鉄製楕円形鏡板付轡がそれぞれ出土しており、641号墳(糸池北古墳 田中1984)は、攪乱の著しい古墳であったが、金銅装の十字文楕円形鏡板および鉄製素環鏡板のそれぞれ断片が出土している(註)。そして今回報告した75号墳は金銅装楕円形鏡板であった。

(註) 糸池北古墳出土鏡板については、樞原考古学研究所および同所 関川尚功氏のご厚意により、実見して確認することができた。

(2) 75号墳被葬者像とその「集団」

これら轡出土古墳で、横穴式石室墳のうちの75・407・408・431号墳は、本章の永井正浩氏の考察によれば、その石室は、それぞれに多少の前後の差はあるが、いずれもMT15型式期に築造され、片袖式・胴張りなど形態的な特徴が類似した、同一の「石室系譜の一群である」という。そして、それらの石室の規模は、407号墳はやや小さいが、それでも4基の石室の玄室長は3.6～4.0m、同最大幅は2.0～2.8mとなって、ほぼ同規模である。また、丘陵尾根上との立地条件や、墳丘の規模・墳形および馬具以外の副葬品内容を比較しても、各々に大差はない。

そして、これらの古墳の被葬者像としては、本書「第5章 まとめ」で述べたように、渡来系の集団と深い関係があるとみられ、古墳被葬者の系譜としても同一の集団に繋がると思われる。このようなことから、これらの古墳被葬者の個々は、その階層としては等質的なものであったと理解されるのである。

したがって、75号墳の被葬者が、他に比して階層的に突出しているとはいえないだろう。むしろ、75号墳出土の金銅装楕円形鏡板付轡は、群集墳被葬者のこれら馬具所有者層に表れる、いく種類かの馬装のうちの一つとの位置付けも可能である。

そのように考えた場合でも、この種の金銅装楕円形鏡板付轡は、その類例自体があまり多くなく、金銅装を施しているとの点で、同じ形状をする通常の鉄製楕円形鏡板に比べればやはり装飾性を重視した馬具であることには間違いない。このことは、杏葉にも金銅装剣菱形のそれが備えられていたことなどと相俟って、75号墳出土馬具が他と区別される視覚的要素ともなっている。

このような、類例の少なさ故にもやや特異ともみられる馬具を、群集墳中の一古墳である75号墳被葬者が入手し得た経緯として、どのようなことが考えられるだろうか。

その手掛かりの一つは、本墳被葬者の一群が渡来系の集団と深い関係があるとみられたことと関連するのではないだろうか。つまり、畿内地域などでは、例えば鍛冶に関わる技術やその他の先進的な技能に優れた渡来系集団など、一定の職能を有した人々に、この種の馬具が特別に与えられた場合があったとは考えられないだろうか。このようにみればこの種の馬具の特異性についても理解しやすいと思われる。ただし、このことは、本例だけでなく、地域を広げて「渡来系などの技能者集団と馬具」との視点で検討すべき問題を含んでいる。この点についてはすでに別稿を用意しているが、本論の趣旨から逸脱するので、ここでは可能性の指摘に止めおきたい。

さて、今、仮に75号墳出土馬具をそのような性格を持つものと考えた場合には、75号墳と同一系譜に位置付けられ、加えて等質的な内容をもつとしたその他の古墳からは、同様の装飾性の高い馬具が出土していないことが問題になる。

このことに関しては、むしろ75号墳被葬者が個人として負った要素が大であったとみるのが妥当であろう。その「要素」を具体的に考えることは想像の域を出ないが、そうした馬具を入手するに際しては、様々な偶然的な事柄が関連するのであろう。408号墳のように、比較的類例の少ない複

環式鏡板付轡がそこにあらわれるのも、同様の経緯であると思われる。

(3) その他の馬具出土古墳との比較

先に巨勢山古墳群での馬具出土古墳として、上記の古墳以外に、巨勢山640号墳・641号墳（条池南古墳・条池北古墳 田中1984）を挙げた。次に、これらの古墳との比較検討を通して、75号墳の相対的な位置を考えよう。

これらの古墳の所在する地点は、巨勢山古墳群の北辺部で、丘陵中央部の主稜線から北に派生して手の指状に延びる支尾根の先端部に立地する。立地の点では、現状での宅地や水田面からの比高差が5～6m程しかなく、巨勢山古墳群のほかの多くの古墳とは様相が異なっている。また、同じ尾根上には、隣接して、やはり横穴式石室墳である642号墳が存在しており、一支群の様相を成している。さらに近隣には、巨大な横穴式石室内に刳抜式家形石棺を内蔵する條ウル神古墳（御所市教委2002）なども存在する。

両墳のうち、641号墳（条池北古墳）は、墳丘径約16mの円墳で横穴式石室墳であるが、石室自体は著しい攪乱を受けており、石材などもほとんど残されていなかった。石材の抜き取り痕跡から、玄室長4.8m、同幅2.44mとされる。出土遺物は、古墳に伴うものとして、須恵器のほか、管玉・馬具・鉄刀・鉄鏃などがあつたと報告される。馬具のうちに、金銅装の十字文楯円形鏡板が含まれることは留意されるが、先の攪乱のために「元位置を保つ遺物はなかった」といい、現状ではその詳細も明確ではない。古墳の築造期は、出土須恵器から、TK209型式期と考えられる。

ここでは、これよりも比較的検討材料が備わる、巨勢山640号墳（条池南古墳）について、やや詳細にみておきたい。

640号墳は、墳丘径16mの円墳で、玄室長6m、同幅1.8mの横穴式石室内に凝灰岩製刳抜式家形石棺が安置されていた。石棺内には造りつけの枕が存在したことが特徴的である。築造期は、出土遺物から後期後葉の内に収まると思われるが、先の641号墳に先行するものとみられる。

出土遺物としては、須恵器・馬具・鉄鏃・刀子・鉄刀・琥珀製棗玉・ガラス製小玉・粟球・白玉が報告されている。馬具の内訳は、子持劍菱形杏葉4・棘葉形杏葉・雲珠1・辻金具8以上・鉸具・磯金具と記されている。調査者の田中一廣氏は、轡については「数片の断片によってその存在を知るのみ」とも述べている（田中1987）ので、詳細不明ながら轡も存在していたことが窺われる。

ここで注目されるのは劍菱形杏葉である。この杏葉は、五角形の小さな突起が扁円部および劍菱部に取り付けられていることが特徴的な、金銅装の杏葉である。この種の杏葉の出土例としては、福岡県桂川町寿命王塚古墳例（梅原・小林1940）・大阪府八尾市愛宕塚古墳例（安井編1994）・長野県飯田市（旧上郷町）天神塚古墳例（市村編1955）・福岡県宗像郡沖ノ島7号遺跡例（原田1958）などが知られる。このうち、寿命王塚古墳では同じ意匠の突起がつくf字形鏡板が共伴しており、愛宕塚古墳でも同様のf字形鏡板の破片が出土しているので、本来、この種の杏葉と鏡板はセットをなしていたことがわかる。そうであれば、巨勢山640号墳でも当初はそのような金銅装f字形鏡

板付轡が副葬されていた可能性が高い。ただし、本墳の場合、杏葉はこのほか棘葉形のそれが出土しており、断片化していたという轡はこれとセットになっていたものである可能性もある。その場合にはまた別型式の鏡板が想定される。どちらにせよ推測であり、いずれとも決しがたい。

少なくとも、この640号墳（糸池南古墳）は、一定程度の馬具のセットを保有していることが明らかな横穴式石室墳であるといえよう。このような内容の古墳と、75号墳を、階層的な位置を検討するとの視点で比較してみると、どのように考えられるだろうか。

両墳ともに、群集墳中の一古墳に違いないが、640号墳は丘陵の先端部分に占地しており、平地部に比較的近い場所であり、独立墳の立地条件に近いといえなくもない。しかし墳丘は640号墳が径16mの円墳で、75号墳は径11mの円墳である。墳形・規模の点では同程度といえよう。主体部は共に横穴式石室で、玄室規模の比較では、640号墳は玄室長が6mと長いが同幅は1.8mであり、玄室床面積では10.8㎡である。75号墳は玄室長4.1m、同最大幅2.5mである。75号墳の玄室床面積は単純に掛ければ10.25㎡となる。胴張りの平面プランの玄室であるからもちろん正確ではないが傾向として把握すれば、少なくとも玄室規模においても、一概に640号墳と75号墳の格差を見出すことはできない。

しかしながら、次に、用いられた棺を比較すると、640号墳は刳拔式家形石棺であり、75号墳は組合式木棺であった。640号墳の家形石棺で注目されるのは、その身に枕が造りつけられていたことである。家形石棺の身の内部にこのような細工をすることは類例に乏しいが、本墳から至近の距離にある、巨勢谷の首長系譜に繋がる権現堂古墳（河上1995）に見ることができる。

権現堂古墳は、御所市大字樋野に所在する古墳で、640号墳から、直線距離にして2.3kmの地点にあたる。近辺には、樋野古墳群などの群集墳があるが、それらとは立地の上で一線を画した独立墳として築造されている。現状では墳丘の破壊が著しく元の規模など不明な点も多いが、径30m程の円墳と想定されている。築造期は、MT15～TK10型式期とされるが、造りつけ枕のある家形石棺については追葬棺とみられるので、640号墳とほぼ同時期か、やや先行する時期の所産と考えられ、いずれにせよ、両者の間に極端な時期差を想定できるものではない。

このように、この2基の造りつけの枕がある石棺は、距離的・時期的に近い位置にあるので、同一系譜上にあるものとみることができよう。こうして、640号墳（糸池南古墳）には、近辺に所在する独立墳に繋がる要素を見出すことができるのである。

ただし、そのことをもって、直ちに75号墳との階層的格差と結びつけるのはやや短絡に過ぎるとの批判があるかもしれない。このことは、巨勢山古墳群を形成した古墳被葬者の集団が単純な一系の集団ではなく、諸集団の集合と考えられることと関連する。

例えば、巨勢山古墳群の成立に関して、白石太郎氏が説くように、多くの集団が擬制的同族関係を取り結んだ結果と考えた（白石1973）場合、具体的には各集団間の関係は、単位集団の上下関係で表されるような単純なものではないと想定できよう。

もちろん、巨勢山古墳群の成立過程に関しては、なお多くの解釈が成り立つ可能性もあり、その逐一に検証が必要であろう。しかし、例えば、関川尚功氏が、大和地域所在の群集墳を分析した際に、巨勢山古墳群境谷支群と呼ばれた一群について、尾根ごとに群構成や埋葬施設においてかなり多様性をもつとした（関川1978）ことは重要である。こうした尾根ごとの「多様性」が古墳群全体において認められることは、その後の分布調査や発掘調査の成果からも確かめられつつある。そのような尾根ごとに所在する一群を支群と認識すれば、巨勢山古墳群では、支群単位で、主体部構造が異なることや、横穴式石室を採用する場合にはその時期が相違すること、または副葬品の様相に差異がみられることなど、支群それぞれに多様な性格が表出しているという特徴を見て取ることができる。すなわち、単に「古墳の数が多し」との視覚的に認知できる本古墳群の特性からだけでなく、このような支群のあり方からも、少なくとも、本古墳群が単純な一個の地縁的・血縁的集団の墳墓域とは見なしがたく、諸集団の集合と見るのが妥当であると考えられるのである。

こうした、巨勢山古墳群の特殊な事情を踏まえれば、古墳群を構成する各集団を抽出して、それらの厳密な階層的序列を考察していくことは、きわめて困難な作業といえる。

しかしながら、それでも巨勢山古墳群においても、まず、古墳の墳形や墳丘規模・主体部構造とその規模・副葬品内容などに相関的に表出する被葬者間の階層格差は、大きくは認識できる場合がある。そして、大別し得た後の古墳の中でも、例えば、丘陵の主稜線上に築かれる前方後円墳を含む一群や、上述した640号墳（条池南古墳）のような刳拔式家形石棺を有する古墳の一群には、相対的な優位性を看取することが可能であろう。

75号墳と640号墳は、築造時期差のある古墳である。しかし、その内容にみられる差異は、被葬者の属した集団の系譜あるいは出自の違いを反映したものと思われ、640号墳の、家形石棺およびそこに刻まれた枕の存在という近在の首長墳に繋がる要素などから、巨勢山古墳群の中でも640号墳を含む一群の古墳が、当該期においては階層的に優位に位置していたものと理解したい。

また、小稿で問題にしてきた馬具のあり方から言えば、640号墳の所在する尾根上に隣接して所在する641号墳（条池北古墳）からは、金銅装の十字文楕円形鏡板が出土しており、そうしたものもまた、この尾根に所在する古墳の相対的な優位性を物語っている。

さて、次に、巨勢山古墳群における馬具出土古墳のうち、これまで等閑に付してきた木棺直葬墳についてもみておこう。

巨勢山古墳群では、木棺直葬墳から出土した鏡板は、前述のように、いずれも鉄製素環鏡板であった。このような鉄製素環鏡板は、横穴式石室墳である407号墳からも出土するが、407号墳の石室内は攪乱が著しく当該鏡板についても攪乱層の比較的上位で検出されたものであった。したがって、407号墳の当初の副葬品品目は厳密には不詳で、例えば別の轡が存在した可能性も否定できない。その前提に立てば、単なる鉄製素環鏡板付轡と、その他の板状鏡板付轡や複環式鏡板付轡は、出土古墳を比較した場合、現状では、埋葬施設の違いに対応しているようにもみえ、古墳被葬者の階層

差を反映している可能性もないとはいえない。

しかしながら、今は例数が少ないことや、巨勢山古墳群だけではなく広く周辺の古墳を見ると、木棺直葬墳でも板状の鉄製楕円形鏡板が出土している例もある（鹿野1987）。今後の発掘調査によっては巨勢山古墳群の木棺直葬墳でもその種の鏡板が出土する可能性が十分考えられるので、今、直ちにこの鉄製素環鏡板を取り上げて、出土古墳の階層性を始めとする古墳の性格に関して考察を進めることは困難であろう。埋葬施設が横穴式石室であるか、木棺直葬であるかの違いは、もちろん時期差はあるが、後期前半段階など同時期の場合には、例えば系譜の違いを反映している可能性もあるとの視点を併せ持って、今後検証していくべき課題であると考え。

3. まとめ

以上に、出土馬具を中心に、主として75号墳の占める階層的位置について考えてきた。これまでに検討したように、まず、75号墳はあくまでも群集墳中の一古墳であって、大和における各地の盟主墳的な独立墳と比較した場合、馬具のあり方としては、例えば鏡板の形式などに差異を見出すことができると考えた。

また、巨勢山古墳群中では、馬具が副葬されたこと自体が、その中での比較的高い階層性が反映されているとみられるが、ただし、75号墳がそうした古墳の一群からは特に突出しているとは言えないことを述べた。つまり、75号墳は渡来系の集団と深い関係のある一群に含まれており、階層的にはそれらと等質的なものであったと理解されるのである。むしろ、75号墳にみられた金銅装楕円形鏡板付轡は、群集墳被葬者層のそれら馬具所有者層に表れる、いく種類かの馬装の一つとの位置付けも可能である。

一方で、古墳群内での75号墳の相対的な位置付けをはかるとの視点で巨勢山640号墳（条池南古墳）を中心に比較検討を行なった。巨勢山古墳群は、すでに多くの先学が指摘しているように、単純な一個の集団の墳墓域とはみなしがたく、諸集団の集合によって形成されていると考えられる。それだけに仮に古墳群を構成する各集団を抽出し得たとしても、それら集団間の厳密な階層的序列を考察することは困難である。しかしながら、それでも640号墳（条池南古墳）の、家形石棺およびそこに刻まれた枕の存在という近在の首長墳に繋がる要素などから、640号墳を含む一群の古墳が、古墳群のなかで階層的に優位に位置していたと理解した。

また、640号墳や隣接する641号墳（条池北古墳）は、75号墳とは時期差のある後期後半の古墳であるが、より早い時期には、例えば、丘陵の主尾根上に前方後円墳を含む一群が造営されている。このような支群は、立地条件や墳形の点で、他に比して優位な要素といえるので、その築造期において、階層的に上位に位置していたと考えられるだろう。

木棺直葬墳については、出土馬具から見る限り、現状では資料数が少なく、考察の対象にすることは困難である。巨勢山古墳群の場合では、木棺直葬墳と横穴式石室墳との差異を単純に階層差と

みるのではなく、例えば系譜の違いを反映している可能性もあるとの視点を併せ持って、今後検討していくべきであろうと考える。

一つの古墳の階層的位置を検討するとの課題に向きあうには、墳丘や主体部構造が判明し、しかも副葬品内容が比較的原始に近い状態で残されていることなど、各種の条件が整っている必要があるかと思われる。今回検討したように、比較検討が個別具体的になればなるほど、ほかの古墳についてもそのような条件を満たしている必要があり、資料数的にも制約されるものになった。比較検討の方法論的な深化も併せて、今後の課題としたい。

文献註

- 尼子奈美枝 1993 「後期古墳の階層性－馬具の所有形態と石室規模の相関関係から－」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』
- 1997 「金の轡と鉄の轡」『創立三十周年記念誌』（元興寺文化財研究所）
- 市村威人編 1955 「下伊那史」第2巻 原始時代上
- 梅原末治・小林行雄 1940 「筑前國嘉穂郡王塚裝飾古墳」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第15冊
- 鹿野吉則 1987 「大和における馬具の様相－鉄製楕円形鏡板付轡を中心に－」『考古学と地域文化』（『同志社大学考古学シリーズ』Ⅲ）
- 河上邦彦 1992 「大和巨勢谷の横穴式石室の検討」『有坂隆道先生古希記念 日本文化史論集』（後に『後・終末期古墳の研究』（1995年 雄山閣）に所収）
- 木許 守 1998 「巨勢山407・408号墳」『大和を掘る』16（橿原考古学研究所附属博物館）
- 御所市教育委員会 1989 「ゴルフ場開発事業に伴う第1回巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料」
- 御所市教育委員会 2002 「巨勢山古墳群確認調査－現地説明会資料－」
- 白石太一郎 1973 「大型古墳と群集墳－群集墳の形成と同属系譜の成立－」『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢』第2冊（後に『古墳と古墳時代』（2000年 塙書房）に所収）
- 関川高功 1978 「群集墳をめぐる諸問題－大和を中心として－」『桜井市外鎌山北麓古墳群』（『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第34冊）
- 田中一廣 1984 「奈良県御所市 巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」『奈良県遺跡調査概報1983年度（第2分冊）』
- 田中一廣 1997 「大和・巨勢山古墳群の群構造と性格（1）」『花園史学』第8号
- 千賀 久・田中一廣 1983 「御所市 巨勢山古墳群ミノヤマ支群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度（第2分冊）』
- 原田大六 1958 「沖ノ島の祭祀遺物」『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』（宗像神社復興期成会 吉川弘文館）
- 藤田和尊編 2002 「奈良県御所市 巨勢山古墳群Ⅲ」『御所市文化財調査報告書』第25集
- 安井良三編 1994 「河内愛宕塚古墳の研究」（八尾市立歴史民俗資料館）

圖 版



巨勢山74・75号墳 航空写真



巨勢山74・75号墳 (手前が75号墳)



巨勢山74号墳 調査前（西から）



巨勢山75号墳 調査前（東から）



巨勢山74号墳 全景（南から）



巨勢山74号墳 主体部1 (南から)



同 遺物副葬状況 (北から)



巨勢山74号墳 主体部2（南から）



同（北から）



巨勢山75号墳（上から）



同（羨道側から）



巨勢山75号墳 墳丘（東から）



同 石室の調査状況（奥壁側から）



巨勢山75号墳 墳丘断面（奥壁側）



同 墳丘断面（右側壁側）



巨勢山75号墳 石室全景（奥壁側から）



巨勢山75号墳 石室 奥壁側



同 石室 玄門側



巨勢山75号墳 石室 奥壁



同 石室 玄門側



巨勢山75号墳 石室 閉塞石（玄室から）



同 石室 閉塞石（玄室から）



巨勢山75号墳 石室 左側壁



同 石室 左側壁（奥壁寄り）



巨勢山75号墳 石室 左側壁（中央部）



同 石室 左側壁（羨道寄り）



巨勢山75号墳 石室 右側壁



同 石室 右側壁 (奥壁寄り)



巨勢山75号墳 石室 右側壁（中央部）



同 石室 右側壁（玄門から羨道）



巨勢山75号墳 石室（奥壁と左側壁）
（手前が左側壁）



同 石室（奥壁と右側壁）
（手前が右側壁）



奥壁と左側壁 (左が奥壁)



奥壁と左側壁 (左が奥壁)



奥壁と右側壁 (右が奥壁)



巨勢山75号墳 石室 左側壁と据付穴（奥壁側から）



巨勢山75号墳 右側壁と据付穴（奥壁側から）



同 右側壁と袖部（左が袖部）



巨勢山75号墳 奥壁背面



同 左側壁 背面（奥壁側から）



奥壁背面（右側壁側から）



右側壁背面（奥壁側から）



右側壁背面（羨道側から）



巨勢山75号 袖部 馬具 出土状況 (手前が袖石)



巨勢山75号墳 壺鏡と銅製飾金具



同 (奥壁側から)



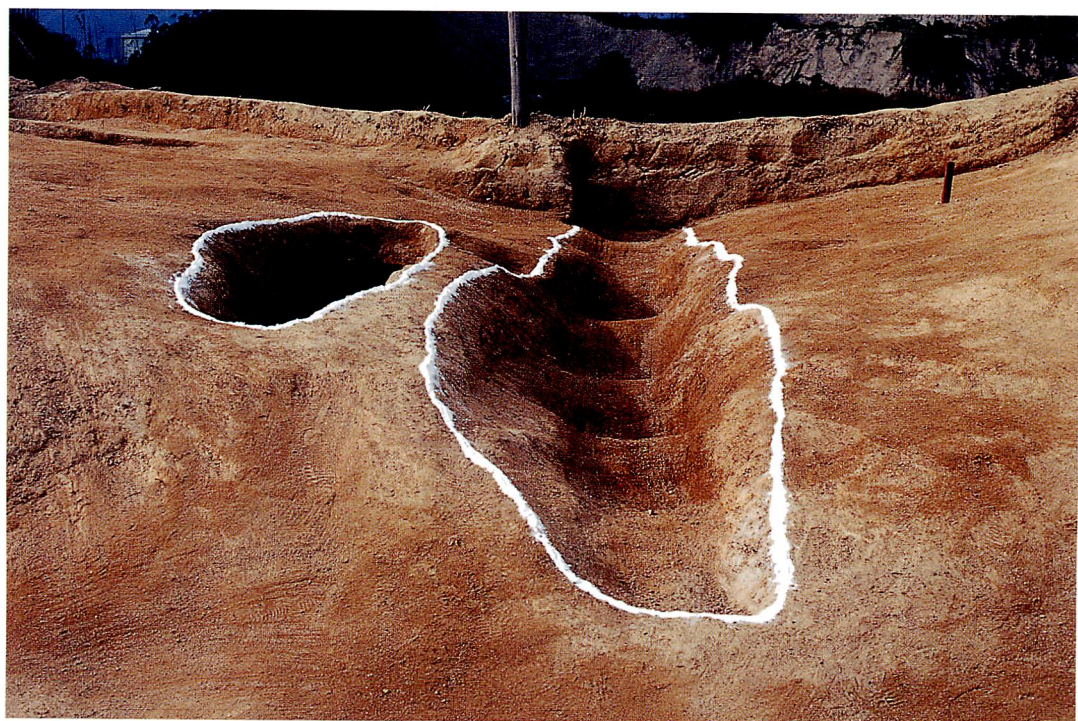
巨勢山75号墳 鏡板付轡と杏葉



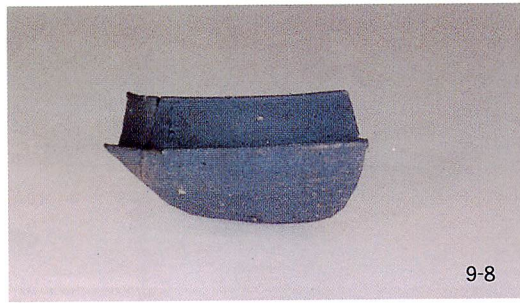
同 円環状雲珠と杏葉 (左が袖石)



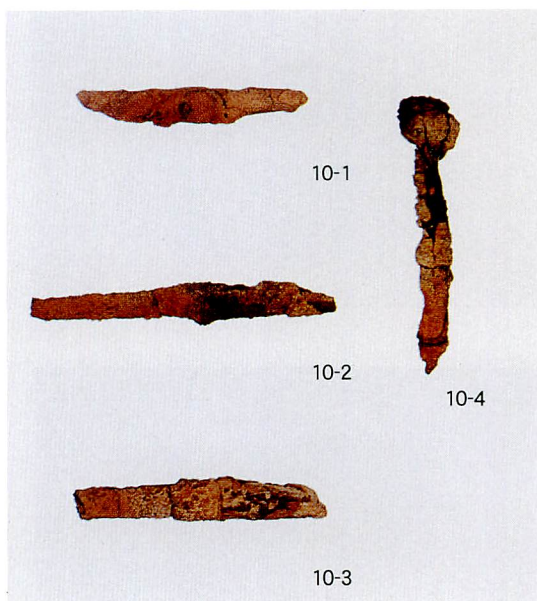
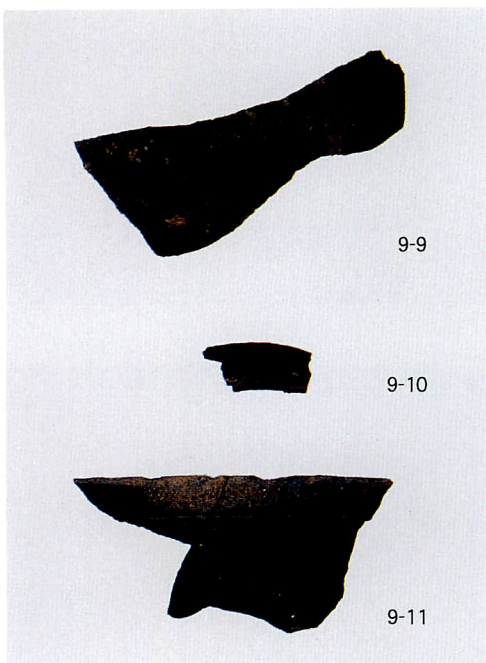
土坑1 (東から)



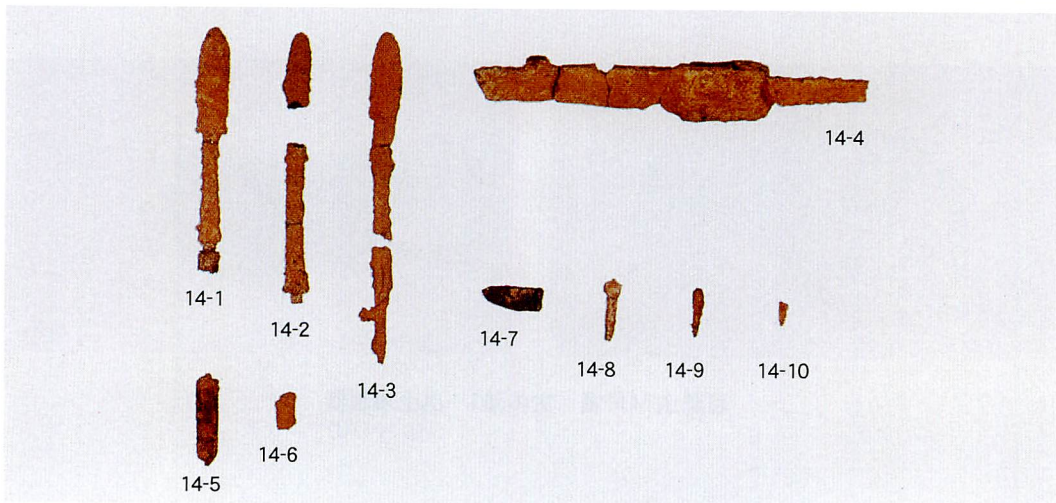
土坑2 (左) と墓道 (右) (南から)



巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器
(s.≒1/3)



巨勢山74号墳 主体部1 出土須恵器・鉄製品 (s.≒ 1/3)



巨勢山74号墳 主体部2 出土須恵器・鉄製品
(s.≒ 1/3)



8-4 内面のあて具痕跡（上）
同 外面のヘラ記号（左）



8-6 内面のあて具痕跡（上）
同 外面のヘラ記号（左）



8-5 外面のヘラ記号

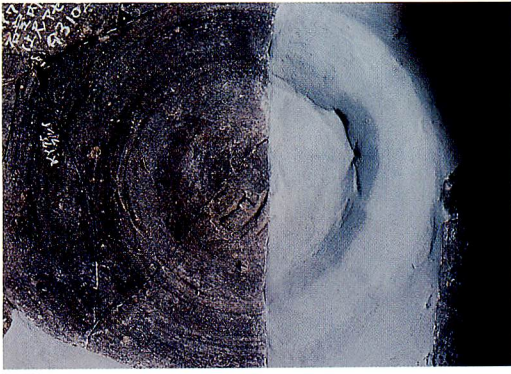


13-1 内面のあて具痕跡

巨勢山74号墳 出土須恵器のヘラ記号とあて具痕跡
(s. ≒ 1/2)



巨勢山75号墳 出土須恵器
(1~7は s.≒1/3、8は s.≒1/4)



21-1 内面のあて具痕跡 (s.≒2/3)

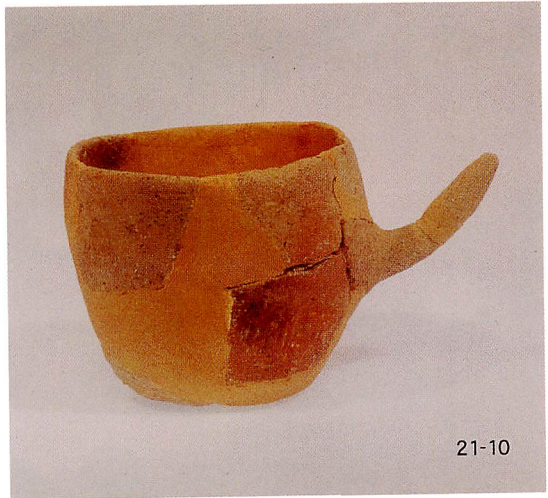


21-2 内面のあて具痕跡 (s.≒2/3)

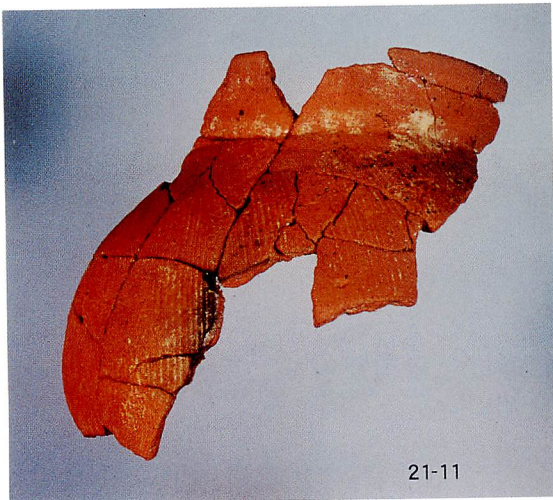
巨勢山75号墳 出土須恵器のあて具痕跡



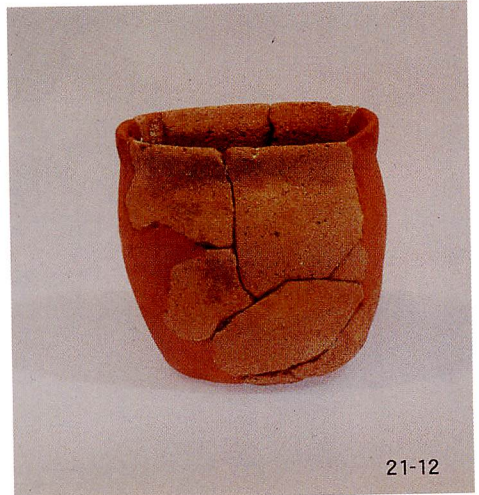
21-9



21-10

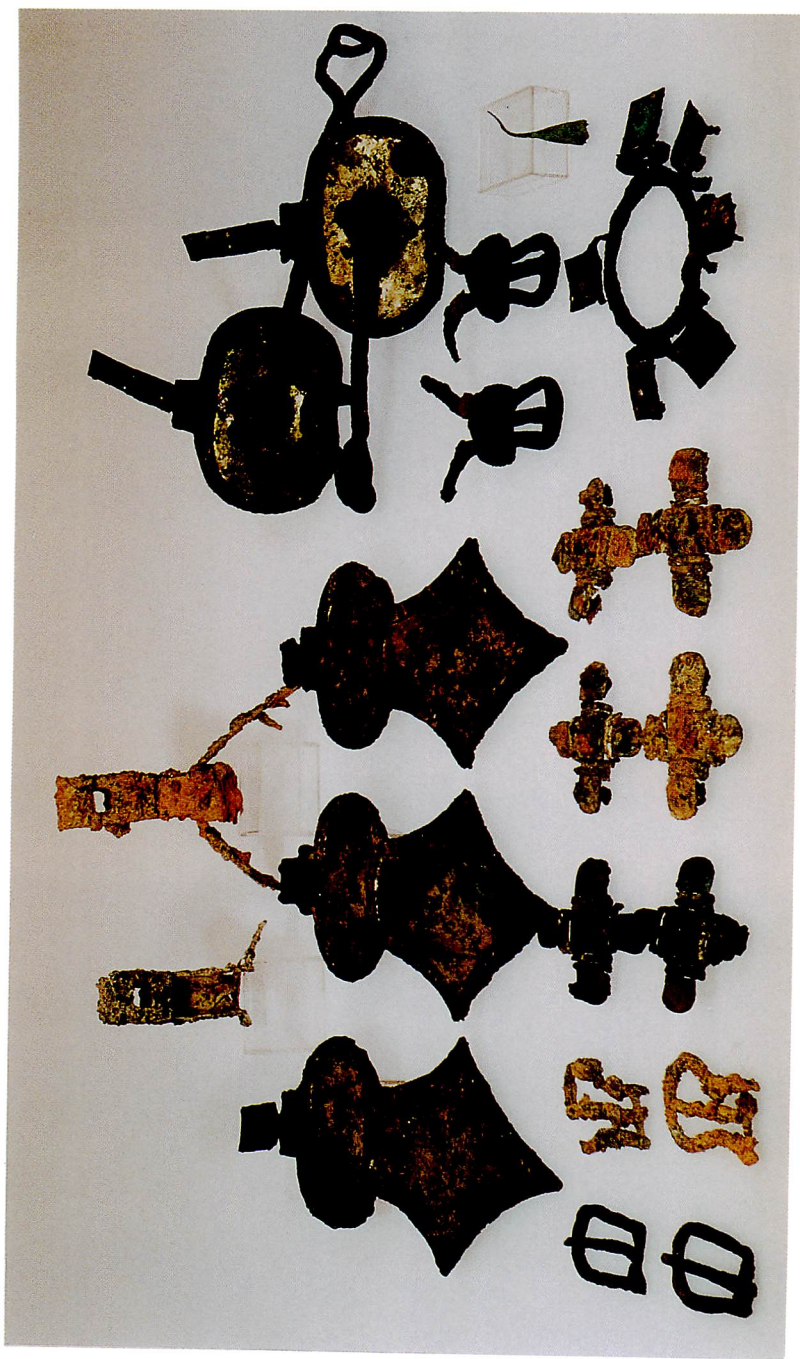


21-11

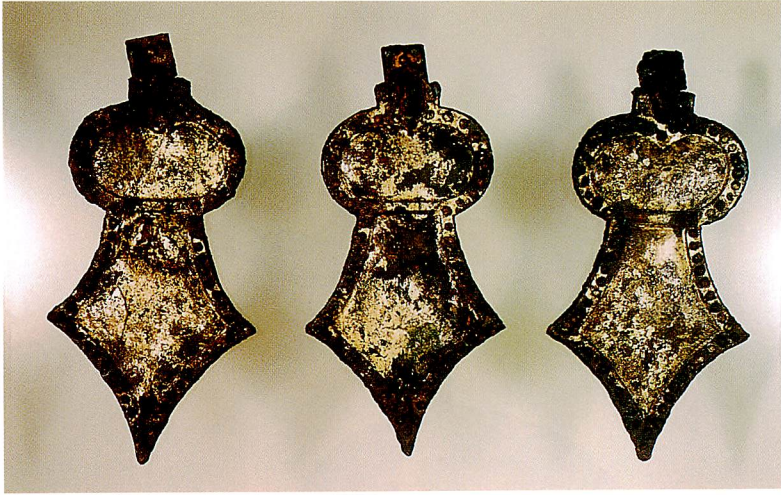


21-12

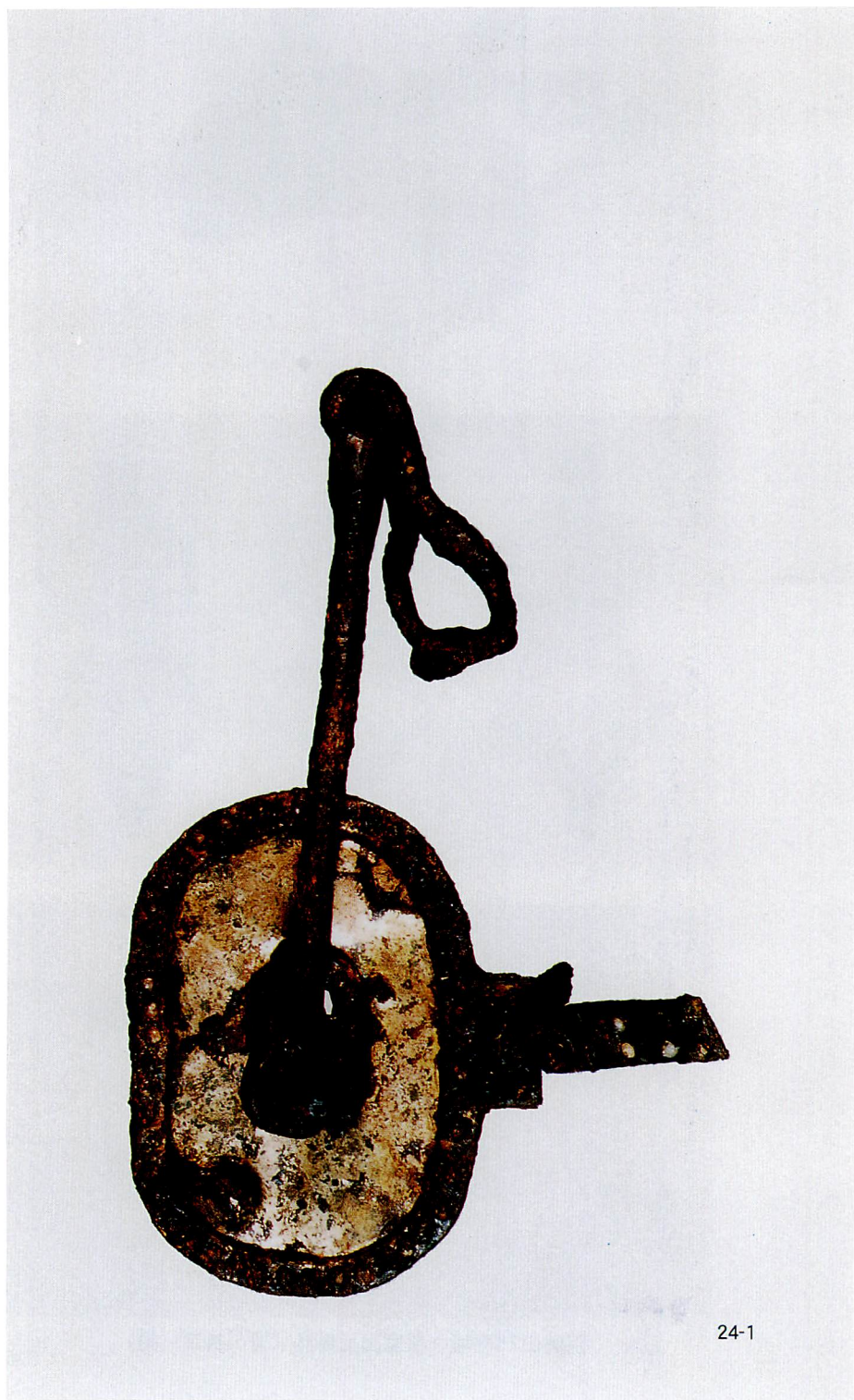
巨勢山75号墳 出土土師器
(s.≒1/3)



巨勢山75号墳 女室出土馬具



巨勢山75号墳 玄室出土馬具（轡・杏葉・鐙）





24-2

巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鏡板・引手）（s.≒1/2）



26-3

巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その1）（s.≒1/2）



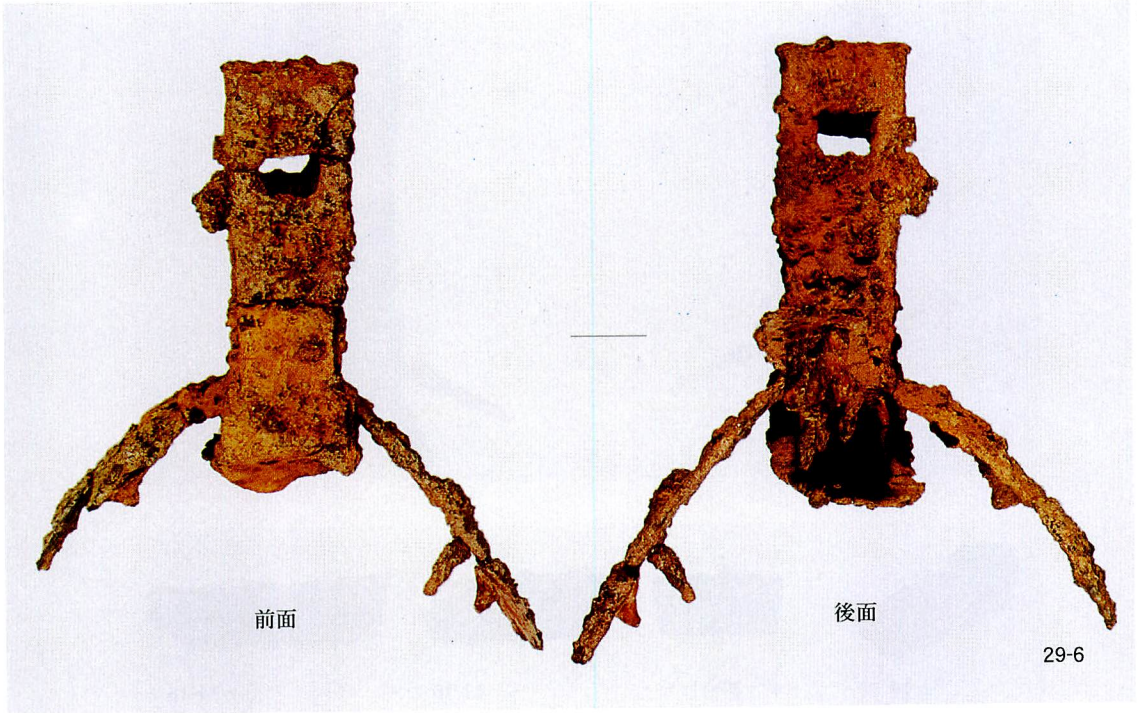
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その2）(s.≒1/2)

27-4

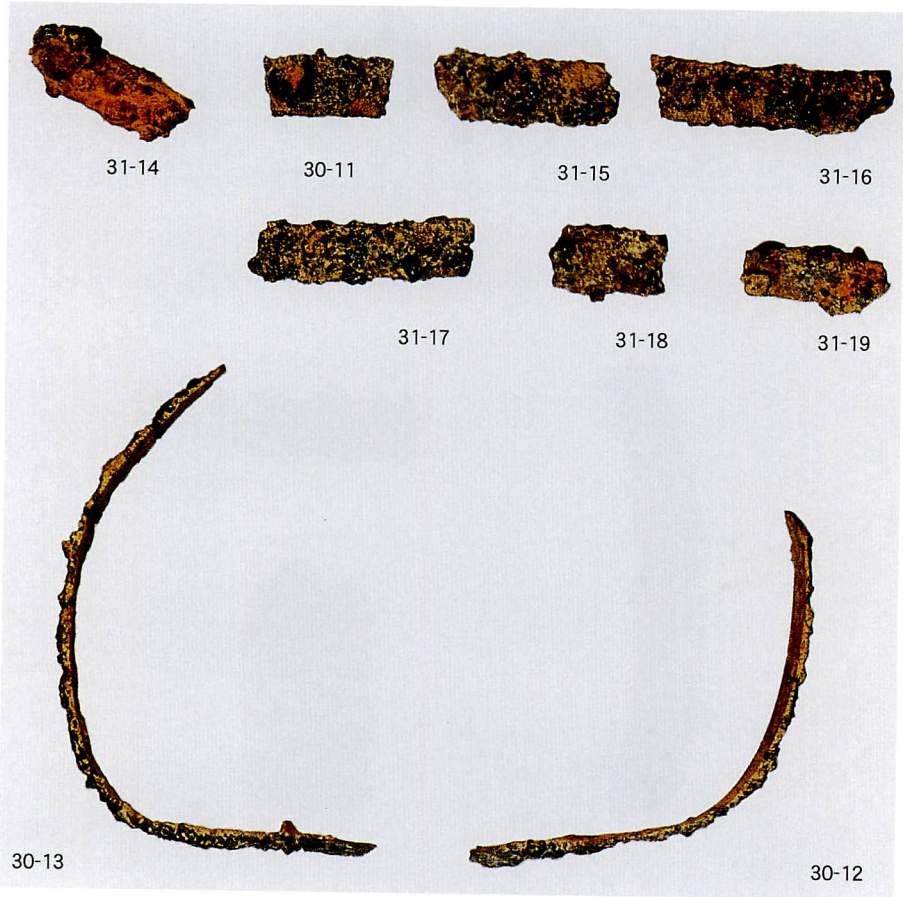
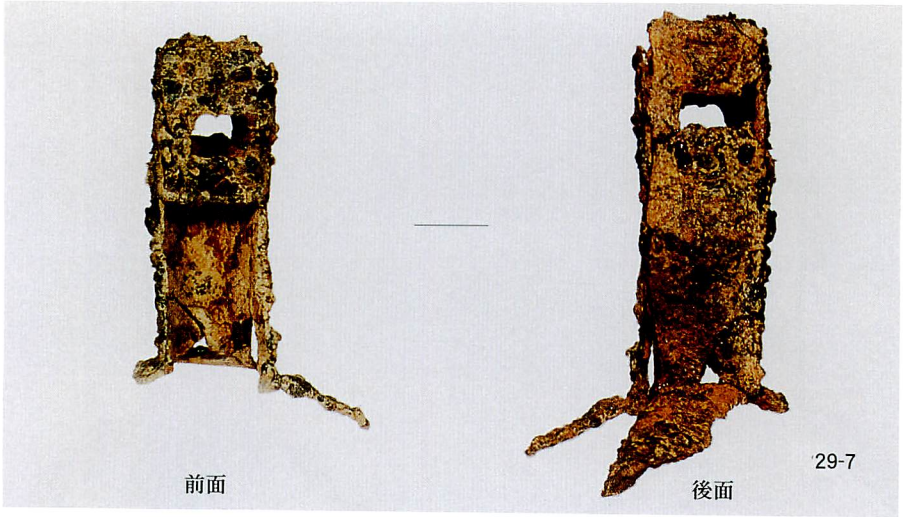


28-5

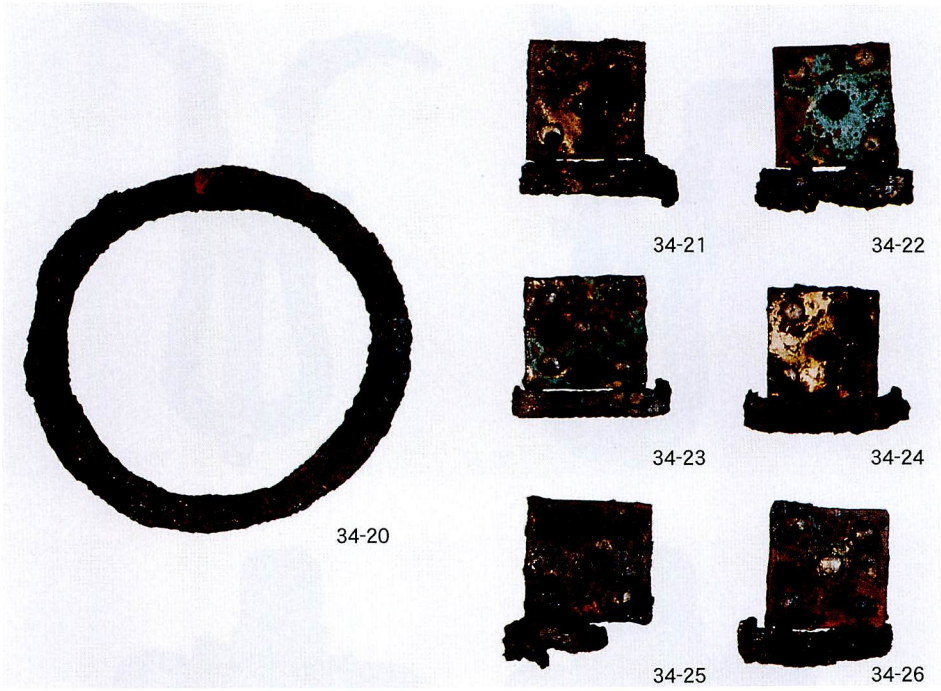
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（杏葉その3）（s.≒1/2）



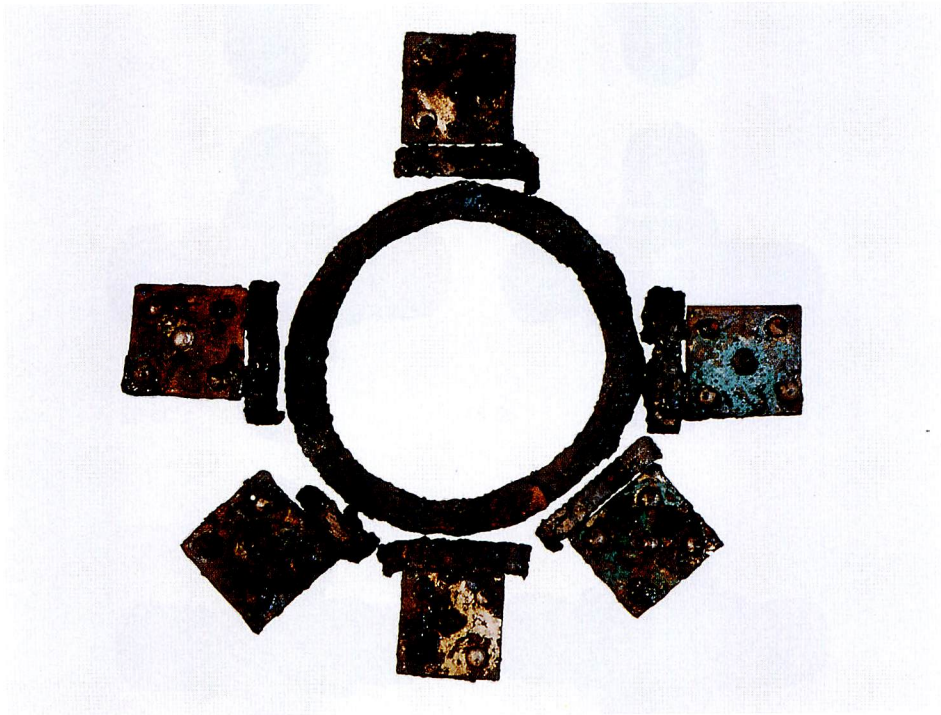
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鐙その1）(s.≒1/2)



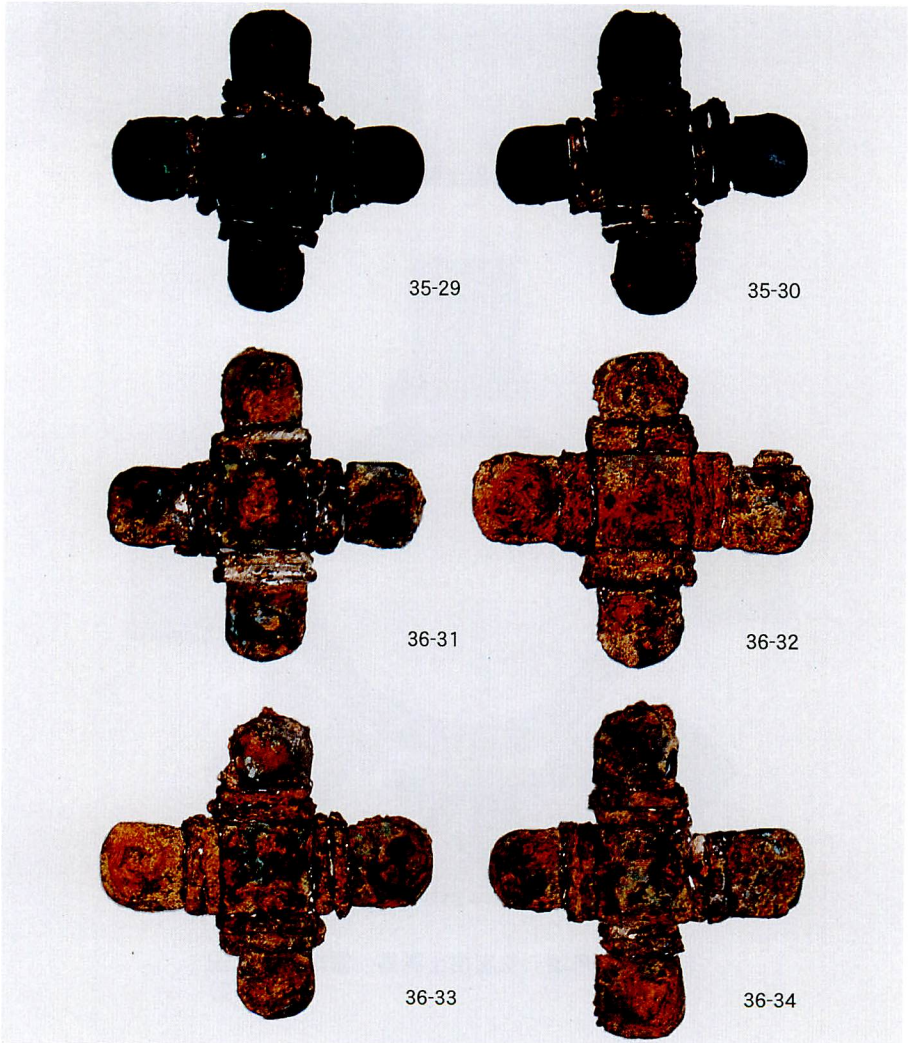
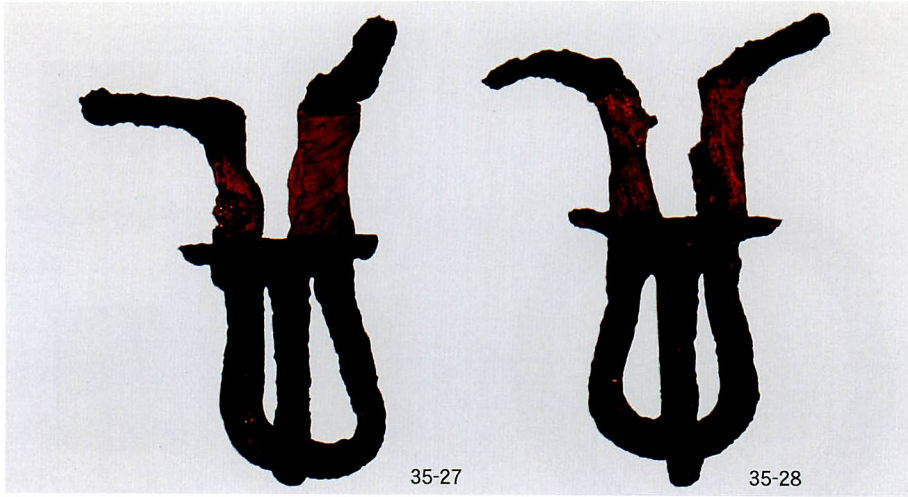
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鎧その2）(s.≒1/2)



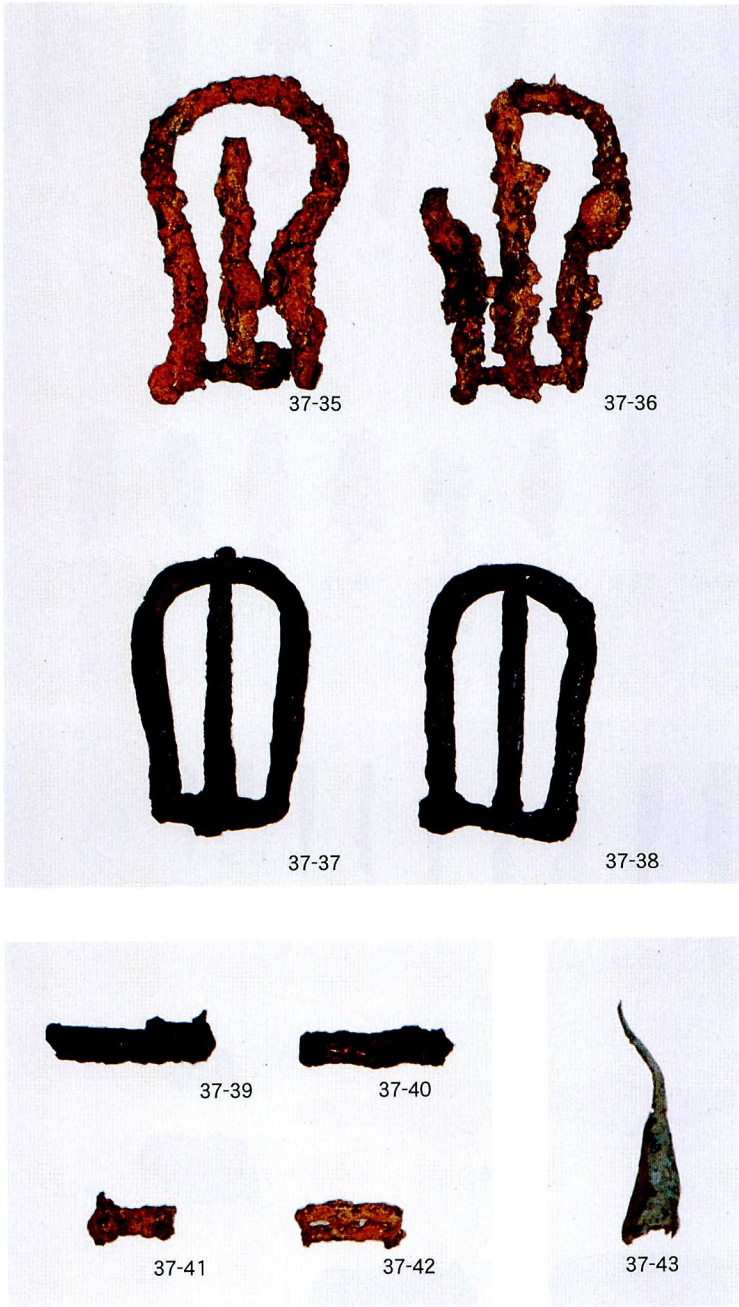
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（雲珠）(s. ≒ 1/2)



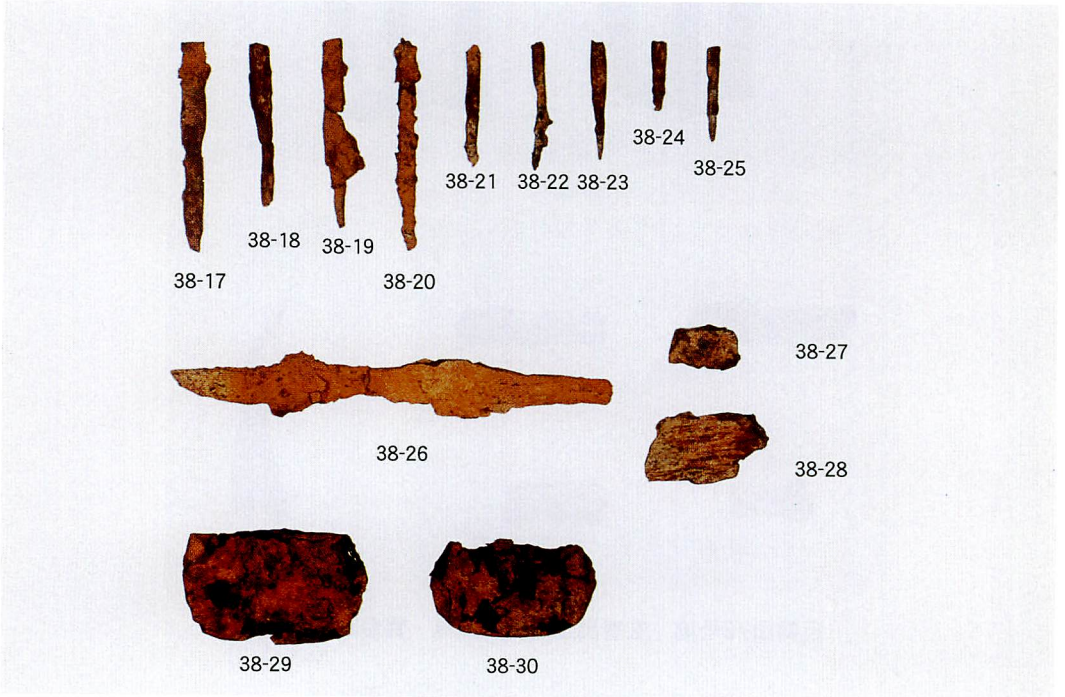
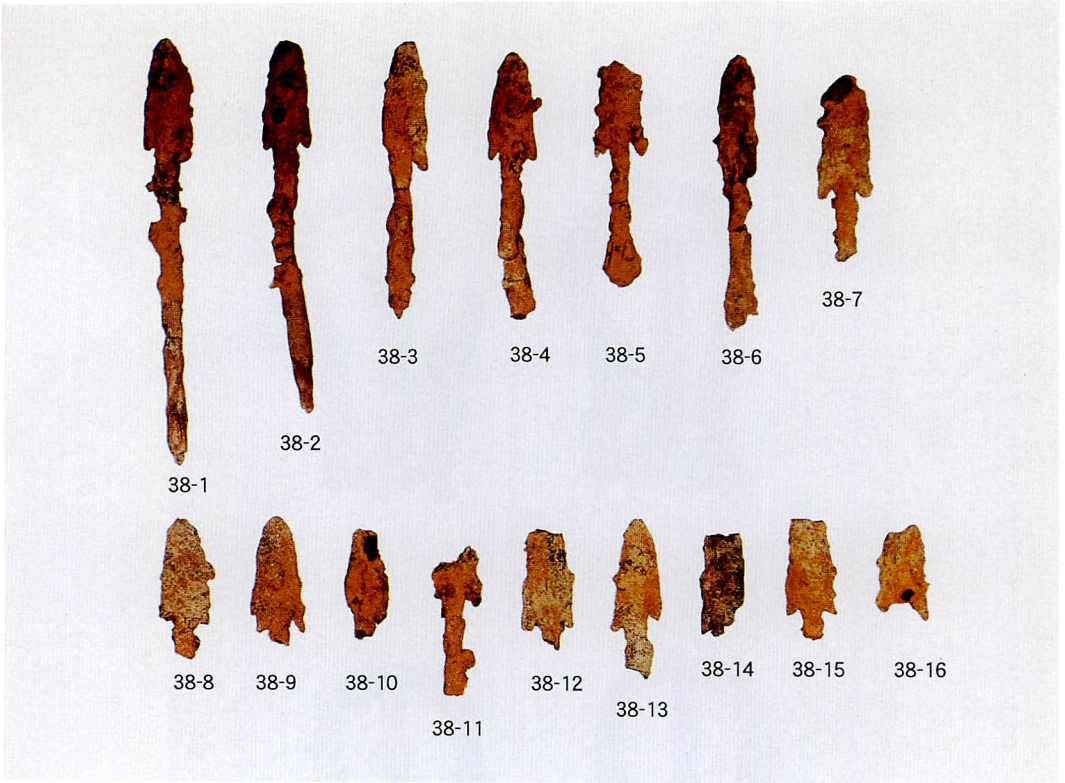
巨勢山75号墳 玄室出土馬具 雲珠復元狀況
(s. ≒ 1/2)



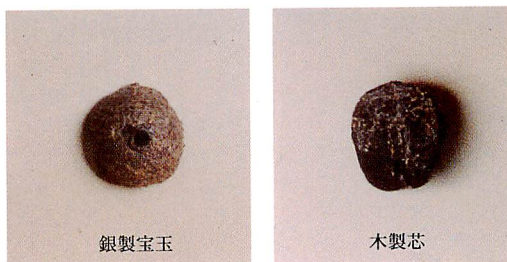
巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鞍・辻金具）（s.≒1/2）



巨勢山75号墳 玄室出土馬具（鉸具・鍔金具・飾金具）
(s. = 1/2)

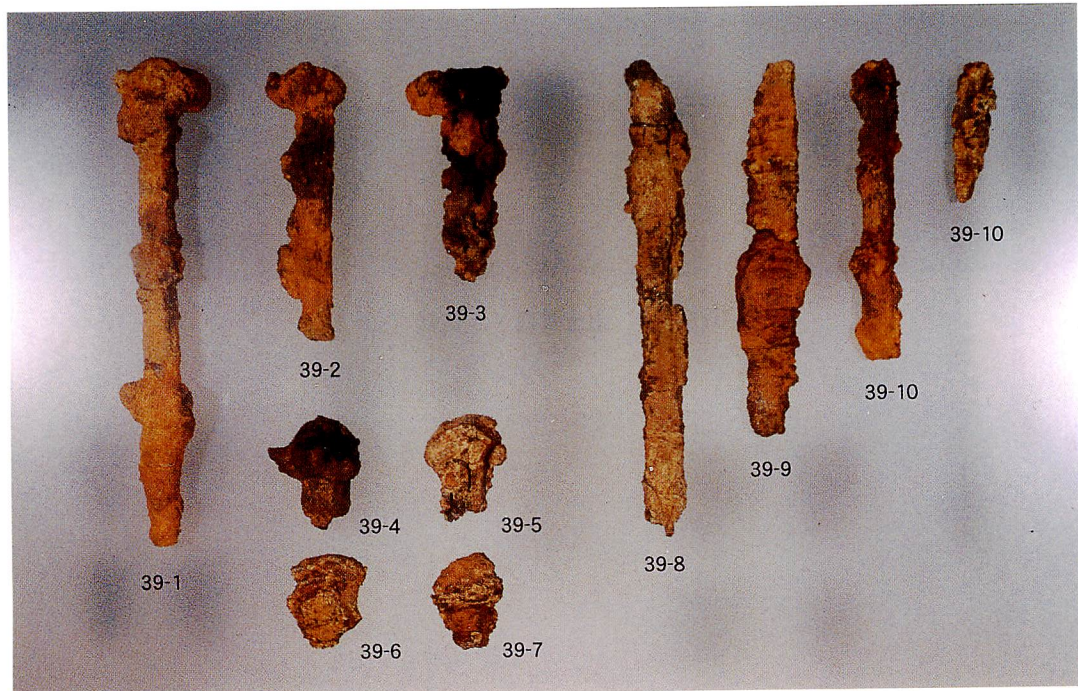


巨勢山75号墳 出土鉄器 (s.≒1/3)

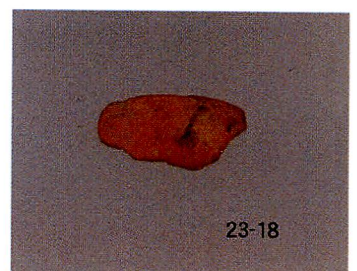
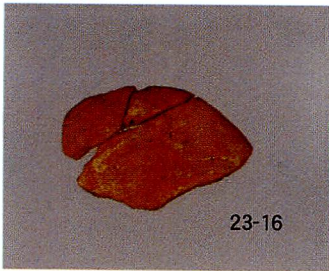
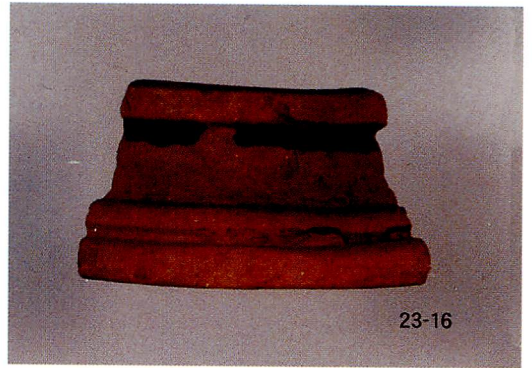


38-32

巨勢山75号墳 出土銀製品 (s.≒1/1)



巨勢山75号墳 出土 鉄釘 (s.≒1/3)



巨勢山75号墳 出土瓦器・土師器 (s.≒1/3)

報告書抄録

ふりがな	こせやまこふんぐん4							
書名	巨勢山古墳群Ⅳ							
副書名	巨勢山74・75号墳の調査							
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	木許 守・藤田和尊／永井正浩・奥田 尚・相見 梓							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こせやま 巨勢山74・75 号墳	ならけんこせし 奈良県御所市 だいじくりさか 大字栗阪	29208		34度 25分 28秒	135度 43分 51秒	19930924～ 19940106	440 (古墳2 基)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
巨勢山74号墳	古墳	古墳時代 後期	埋葬施設（木棺 直葬2基）	須恵器・土師器				
巨勢山75号墳	古墳	古墳時代 後期	埋葬施設（横穴 式石室）	須恵器 土師器 馬具（金銅装楯円形 鏡板付轡・金銅装劍 菱形杏葉・木心鉄板 張杓子形鐙・円環状 雲珠・鞍・辻金具・ 鉸具・銅製飾金具） 銀製釵子 同空玉 鉄鏃 鉄刀片 鉄釘 ミニチュア鋤先				

奈良県御所市

巨勢山古墳群Ⅳ

—巨勢山74・75号墳の調査—

御所市文化財調査報告書 第26集

平成14年（2002年）3月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市 1-3

印刷 (株) 笹田印刷所
御所市今住 16-3